

營みしは、繁華になりゆく一因なれど、名所舊蹟の自から破壊せられんとするは、惜しむ可き事である。然れ共、大震災のため別荘地としての鎌倉は根底より破壊せられた。

備考 鎌倉と云ふ名稱の起りに就いては、

(A) 神武帝東征の御時、毒矢にて東夷を射給ひ、數萬の賊徒を殺し、が、其屍を埋めし所が鎌倉である、屍藏が鎌倉になりしとの説、(相模風) (土記)

(B) 大織冠鎌足、鹿島參詣の途次、由井濱に泊し靈夢に感じ、年來持ちし鎌を大藏の松岡に生めし故鎌倉郡と云ふの説、(詞林采) (葉抄)

(C) 鎌倉のカマは麓の意にして、クラは谷の意なりとの説、

(D) 鎌倉は、神倉(神庫)の意なりとの説、

さあるが、余は地形より論じて(C)の説に賛成する(鎌倉の地形は麓に似てゐる)

鎌倉の名勝古蹟

鎌倉は、歴史的由緒に富んだ地であつて、桑園田畝、一木一石と雖も捨て難い。其中主

要なる名勝古蹟を、

(A) 第一方面

▲鶴岡八幡宮 國幣中社で、鎌倉第一の大社である。康平六年(後冷泉)源頼義が石清水八幡を勧請した者である。始め由比郷にあつたのを、頼朝の時小林郷の北山(大臣)の麓に遷したが、建久二年の火災で類焼したので、後の山上に寶殿を造り、下ノ宮末社も造營した、山上の社は即ち今の鶴岡八幡である。

八幡は、源氏の氏神と仰がれ、頼朝の信仰殊に篤かつたので、代々の將軍深くこれを尊信し將軍自ら儀衛を張つて參列する例となり、除書を拜受し拜賀を行ふにも此社頭に於いてした。されば、武家庶民に至る迄一般に本社を尊崇し、神封も次第に増加して、相模國の大社になつたのである。八幡宮の社前から由比濱に至る坦々たる大路を若宮大路といふ、(鳥居は三)後足利氏も徳川氏も之れを信仰したので、幸に荒廢を免れた。下宮に詣うで、六十二級の石階を上宮に通ずるが順である。境内入口の反橋は赤橋と云ひ、(嘉永年)間架設)橋を

渡つて左右の大池は、壽永元年に大庭景親の掘つたものである。(昔は四つの島あり)石段左の銀杏は、實朝の最後を語るものである。多くの神寶中、螺鈿時太刀、菩薩面は見る可きである。八幡の傍らに師範學校がある。(生徒のストライキが名物である)

▲頼朝の墓 頼朝屋敷地、(今は三四町)より進み大倉山の麓にある。(法華堂)五輪塔だが古いものではない、東一町許りに、大江廣元、島津忠久の墓がある。

▲幕府址 將軍の亭館、幕府の址は、今や其面影を留め無い。將軍の亭館は、三度移轉せられて居る。

(A) 大藏(壽永四年より嘉祿元年迄四十六年間、今や田畑と化してゐる)

(B) 宇津宮辻(嘉祿元年より嘉祿二年迄十二年間、小町大路の途中であらう)

(C) 若宮大路(嘉祿二年から元弘三年迄九十八年間、土俗親王屋舗と唱ふる所である)

▲荏柄天神 此神の勸請の年月不詳だが、鎌倉幕府以前の古社である。(頼朝大藏邸鬼門)祭神は、菅公である。寶物は、鎌倉宮に保管してある。享徳四年今川範忠、成氏迫討とし

て鎌倉に亂入せし時、菅公自畫の像を濃州に奪ひ去つたが、後遷座したと云ふ。

▲覺園寺 藥師堂が谷を、五六町進んだ所にある。鷲峯山真言院と云ひ、本尊藥師は運慶作、(建保六年義時)堂は建長三年火災にかゝり、後永仁四年北條貞時が一寺としたのである。消防連の信仰する黒地藏(火燒地藏)がある。

▲鎌倉宮 官幣中社、護良親王の靈を祀つたもので、明治二年の創建である。宮より東方理智光寺跡山上は護良親王の墓がある。

▲瑞泉寺 鎌倉宮の、東七八町にして、關東十柱の一瑞泉寺がある。足利基氏の建立、夢窓國師の開山である。

▲大御堂谷 勝長壽院のあつた地である。(頼朝が義朝鎌田正清の首を葬つた所である)孫實朝、平政子の墳墓も此にあつたと云ふが今は詳かでない。

▲杉本觀音堂 天平六年僧行堂の創建と云はれ觀音の像が著名である。

▲犬懸谷 衣張山の西麓にあり上杉定朝の邸宅がある。

▲報國寺 宅間が谷にある。功臣山建忠報寺と云ひ、臨濟派尊氏の祖家時の建立である。宅間法眠作の逗葉最も名高かつたが、近年火災に罹つて烏有に歸したは惜しむ可きである

▲淨妙寺 杉本觀音(天平六年行)の東二町許にある。稻荷山と號し、臨濟宗、鎌倉五山の

一で、文治四年足利義兼の草創である。(始め密宗後) 足利義兼、義氏の墓がある。

▲足利公方屋敷址 淨妙寺東の芝生である。

▲明王院 五大堂と唱へ、賴經將軍の願所である。(飯盛山) 是より街道を進めば、朝比奈切通を通つて金澤に通ずる。

(是より字小町の名勝古跡にうつる。)

(B) 第二方面

○▲北條屋敷址 元弘の役、兵火にかゝつたが、尊氏、北條氏追弔の爲め寺を建て、寶戒寺と云ふ。(寶室) 此前の畑地が、若宮大跡幕府跡である。宇都宮稻荷と稱する所が、宇都宮辻幕府跡である。

○▲東勝寺址 葛西が谷にある。(今地) 北條泰時の草創で北條氏一門滅亡の地である。

▲妙本寺 比企谷にある。日蓮の俗弟子企(大學)の建立である。(もこ比企) 比企一門の墓がある。

▲安國寺 松葉が谷にある。日蓮の草創で、安國論は右方の巖窟で編述したと云はれる。是より名越の切通を越えれば逗子に至る。

▲下若宮 辻町にある。(鶴岡八幡の故地で、賴義) の勸請した所である。

▲補陀落寺 亂橋にある。開山は文覺上人である。寺寶に富んで居る。

▲光明寺 材木座にある。(補陀落寺) 淨土宗 關東總本山(天照山)である。始め經時(北)佐介谷に建てたのであるが、(蓮華) 後今の地に移したのである。山門「天照神」の額は、後花園天皇の宸筆である。本堂方丈共に立派である。寺寶又多いのである。是れから海岸を傳うて逗子へ行ける。風景絶佳である。(巨養坂を越えて、山之) (内の名勝古跡にうつる)

(C) 三方面

▲大江季光墓 八幡宮の西鶯谷にある。季光は毛利氏の祖先で、廣元の子である。(墓の當不詳だが立派である。瀋関の力の大なるを語るものである。)

▲巨囊坂 是を越ゆれば、建長寺の前に出づる。

▲荒居閻魔堂 圓應寺と云ひ建長寺の前である。(運慶作の閻魔がある)

▲建長寺 巨福山と號し、五山第一である。相模守平時頼の建立である。(建長三年)近年裏山の絶頂に、半僧坊を勸請し、毎月十七日を縁日として居る。金龍水(鎌倉五山門)山門は見る可

きである。外門額の字は朝鮮人竹西の書である。寶物は八月頃蟲干を行ふ。

▲長壽寺 足利基氏開基と云はれる、尊氏の墓及び本像がある。

▲淨智寺 鎌倉五山第四である。(平師時建立)

▲明月院 (淨智寺より明月院に至る道の右手の畑を上杉管領屋敷跡と云ふ) 上杉憲方の開基である。憲方は應永元年に逝去した。

▲東慶寺 圓福寺の南にある。臨濟宗の尼寺で松岡と號す。開山覺山尼(北條時宗の室)である。

此寺には婦人をして夫と縁を切らしむる権力がある。(廿四ヶ月此寺に居る時は) 御醍醐皇女用堂、豊臣秀頼の女天秀の墓がある。

▲圓覺寺 鎌倉五山の第二で、弘安中時宗の建立である。(瑞鹿山) 佛山額(瑞鹿山) 佛殿の額は後光嚴帝の宸筆である。佛日庵には時宗の墓がある。總門左右の池を白鷺池と云ふ。又最明寺跡は、鐵道の踏切を越えて右方二町許り奥にある。

(長壽寺より龜が谷坂を降り扇ヶ谷方面に至る)

(D) 第四方面

▲海藏寺 扇谷山と稱し、開山は源翁律師である。境内に十六の井がある。

▲葛原岡神社 假粧坂の上にある。右少辨俊其郷を祀つたのである。もと其近傍の畑中に墓があつたのを、明治二十一年新に社を建て、祀つたのである。(是より此道を進めば梶原村を経て藤澤に至るのである)

▲淨光明寺 泉谷にある。(泉谷山) 建長三年、北條長時の建立である。(冷泉爲相郷の墓がある)

▲英勝寺 東光寺山と號し、淨土宗の尼寺である。此地はもと太田道灌の舊跡で、水戸中

納言頼房の母堂英勝院の開基である。(壽福寺)の北隣

▲壽福寺 龜ヶ谷にある。(龜谷山金剛)鎌倉五山の第三である。(源義朝の舊)平政子の本願

で、榮西を開山としてゐる。集西も當寺で寂し、實朝も屢々參詣に來て居る。此寺の後山が源氏山である。

▲間注所址 御用邸(停車場)西の筋向邊である。御用邸前南方に裁許橋と云ふのがあつた。昔を語るものである。

▲和田塚 大原町にある。(和田一族を葬)つた所である

▲佐介稻荷 佐介谷にある。信仰頗る厚い。

▲稻瀬川 古へは水無瀬川とも云ふ。(水源は御輿岳であ)る。(萬葉集)

まかなしみさねにわれゆく鎌倉の

水無能勢河に潮みつらんか

青砥藤綱の傳説で著名な滑川よりは、小流であるし、又は文學地理上の價値も少ない。

▲甘繩神社 御輿ヶ岳の麓、伊勢大神宮の別宮である。(古くは甘)繩(繩神名)頼朝も屢々參詣した。

▲大佛 高德院の保管である。青銅三丈八尺の大佛で建長四年の鑄造である。(美術史上研)究すべきで

▲長谷觀音 海光山新長谷寺と云ひ、坂東巡禮札の第四で、光明寺末である。本堂の風景は絶佳である。本堂には、二丈六尺の十一面觀音がある。(元正天皇の時、徳道上人、和州長谷の山中で大木を得、二對の觀音を造り、其一對を海中に投ぜしに十六年をへて、長井の海面にうかんだ。依つて、徳道を開山として寺を造つたこの傳説がある。)

▲御靈社 鎌倉權五郎景政の靈を祀る傳説に富んだ社である。

▲星月夜 文藝地理、謡曲地理の舊跡である。極樂寺切通にかゝらんとする右端にある。昔は、此井に晝も星が見えたが、奴婢、過つて菜刀を井中に落すや星の影が見えなくなつたのであると云ふ。

○ 稲村ヶ崎 西境の山脈の延びて海に逼つた所で絶壁である。(東端を靈山ヶ崎西方)昔は此岬角の下に道があつたのである。新田義貞の鎌倉入りは、茲を利用したので、鎌倉防備上

の弱點である。

極樂寺 極樂寺坂の下にある。(真言律宗、靈寶感應院)北條重時の建立(重時の法名極樂寺云ふ)昔は四十九院あつたが、今は一院のみ。開山の忍性は、仁者で病者を憐んだ。元亨釋書に曰く

「桑が谷の療病所には、二十歳の間癒ゆるもの四萬六千八百人、死する者一萬四百五十人已にして治するもの四の五をこえたり」と忍性こそ、眞の慈善家なれ。

▲七里ヶ濱 稻村崎より、腰越に至る海岸で、日蓮赦免に關して著名な行合川がある。海岸風景絶佳、唯肺病患者多きをうらみとす。(龍口の變の時、奇瑞多きを知らせる使、日蓮赦免の使と行合つた所である)

五寺。建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙名。

五泉水。日蓮同水、梶太刀洗水、錢洗水、金龍水、甘露水。

十井。六角の井、銚子の井、星の井、鐵の井、棟立の井、瓶の井、甘露の井、泉の井、

扇の井、底脱の井。

十橋。亂橋、逆川橋、延命寺橋、琵琶橋、夷堂橋、筋違橋、歌の橋、勝の橋、十王堂橋、裁許橋。

鎌倉近傍名所舊蹟

(一) 片瀬、江の島方面

▲小動 七里ヶ濱を進み、腰越に入る。左の巖山を云ふ。山上に八王子宮あり。風光絶佳

▲滿福寺

古へ京、鎌倉の木街道、義經が腰越狀を認めた所だと云ふ。(開山行基。寺に傳ふる腰越狀は眞義不詳)

▲龍口寺

日蓮、刑に處せられ特免せられし所である。弘安年頃六老僧が力を合せて創立

したものである。九月十一日十二日が御會式である。蒙古使者杜世忠の殺されしも此邊である。片瀬マンチユーは名物である。

▲片瀬川

境川とも田倉川とも云ひ、川口稍大である。大庭景親の處刑されし所である。

▲江の島

繪の島とも書く。鎌倉より二里、陸地を距る十一町、橋を架し、島の高さ二四

二呎、(潮引げば) 昔は必らず船で交通したが、建保四年大海忽ち道路に變じ、參詣の客引きも切らずとあるが、地形は變化がある。昔、惡龍住み、人を害せしが、欽明天皇十三年海上忽ち孤島を湧出し、天女降りて、惡龍を隨へたと縁起にあるが牽強である。壽永元年頼朝の本領として、文覺上人が辨天を勸請したに始まる。江の島神社は、下の宮、上の宮本の宮の三社は何れも、縣社である。(宗形三女) 貝細工、螺螺の壺焼が名産である。

▲兒が淵 本の宮を下りゆけば、斷崖の下、白浪のさわぐ所がそれである。兒白菊の投身した所である。辭世の句に

白菊としのぶの里の人間は

思ひ入江の島と答へよ

▲龍窟 魚板岩より假橋を渡つて大岩窟に入る。穴は分れて、二つとなり(胎藏界) 奥に石佛がある。此で云ふ傳説は言ふに足らぬ。總じて江の島は、俗氣紛々たる所である。

▲鶴沼 片瀬を距る十餘町。(引地川と片瀬川の間) 風景よく避暑避寒の客多し。

▲田谷の穴 大船驛の北半里、定泉寺の後園にある。洞の長三町、(里人佐藤某靈夢に感じて開鑿せり)

▲藤澤清淨光寺 時宗の總本山、藤澤道場と云ひ、足利時代には盛んであつた。(開山吞海世の僧で、一遍駐錫の地) 小栗判官と遊女照手姫の話がある。

(二) 逗子葉山方面

▲逗子(鎌倉八幡前) 今は川越村と云ひ、櫻山附近迄も含めて逗子(古書に)と云ふてゐる。逗子より葉山へかけて、東都紳士の別荘多く、天然の風景は、自ら俗化しつゝある。

鎌倉逗子の間の小坪の梅岩(材木座の飯島崎の南)の景は絶佳である。小山太郎の由緒を語る小山天神祠は、僅かに石祠を残すのみ、此間に鐘乳洞がある。

▲六代墓、三崎街道を進み、田越川を渡り左にある。六代は維盛の嫡男で、此地で殺された。

▲新宿濱 驛より六町、海水浴場である。

▲燈摺 六代墓を見て、猶三崎街道を進めば、日蔭の茶屋に至る。此の邊を燈摺と云ふ。

頼朝、三崎遊覽の時、道狭く燈がすれ合つたが故名づけたと云ふ。

▲森戸明神 葉山に至り、森戸橋を渡り數町にして右側に森戸明神がある。古くは杜戸とも書く、葉山郷の總鎮守である。(源家の將軍は、屢々、杜戸に遊び給うた。)

▲葉山御用邸 驛を距る一里餘、此邊の風光は絶佳で長者が崎の眺め天の妙を極めて居る此附近、皇族、華族の別荘に富んで居る。

▲岩殿觀音 葉山より、返子驛に歸つて行くのが道順である。(久野谷村) 行墓の開基で、阪東二の札所である。

▲神武寺 沼間にある。醫王山來迎院と云ひ、天臺宗である。行基の開基、慈觀の中興である。境内は石山で石を切りぬいた堂宇がある。險路五町して達する。

鎌倉及其附近案内

鎌倉を一見せんとする人は、西より來る人は、藤澤で下車し、東京より來る人は、鎌倉で下車するを可とする。東京驛より三十一哩(貨銀は、三等八十九錢、鐵道省が發賣する江ノ島鎌倉廻遊切符は東京驛より一圓九十二錢)鎌

倉見物は驛を中心とするが、便利である。驛より各名所への距離は、

八幡宮	五町三十間	頼朝墓	十四町三十間
大塔宮	十七町	建長寺	十四町
圓覺寺	二十三町	十六ノ井	十七町三十間
壽福寺	十町	由井濱	十一町
光明寺	十八町	中佛	二十町
長谷觀音	十八町	權五郎社	二十町
七里濱	三十二町	江之島	二里十一町

鎌倉と藤澤の間は、電氣鐵道で連絡されて居る。(江之島電氣鐵道) 長谷迄五錢、江の島まで十

七錢、藤澤迄三十一錢である。團體に對しては、割引ある事勿論である。學生三十名以上普通貨金の半額である。普通團體も三十名以上から割引もある。又、名所廻遊馬車もあつて、五人乗一臺三圓五十錢、名所廻り俵五時間一圓五十錢、自動車日雇二十五圓。一日四

十圓。見物機關は備つて居るが、壯健の人は徒歩の方が、趣味深いのである又案内者を雇ふ事も出来る。

一日、金一圓二十錢、半日六十錢、鎌倉江の島廻り二圓、寶物拜觀料は五十錢で充分である。

遊覽の便宜は備つて居る。

旅館としては、角正、松岡、鈴木屋、海月樓、長谷海濱ホテルが著名である。宿泊料は五圓五十錢から一圓五十錢迄であるが、學生なら一圓五十錢で泊まれる。

名産としては、鎌倉彫、鎌倉焼、武者煎餅等がある。近時、鎌倉は、避暑避寒の好適地と目された結果、著しく俗化した。特に、夏の鎌倉は、最も雑風景である。海水浴は由井濱で出来る、鎌倉を訪うて、懐古の思ひにふけり得るは、冬のみである。特に最近肺病患者の避難所となつた結果此地の滞在は最も危険である。

鎌倉見物に要する時間並びに見物の順序を究めておく。鎌倉を學問的に研究しようとする

る人には、少くとも一週間の滞在を要する。然らずんば、一通りの研究は覺束無いのである。然し鎌倉を訪ふ多くの人は、左程迄研究の必要は無いのである。一日の遊覽を試むれば足りるのである。

専門に此地を研究せんとする人は、基礎的智識として少なくとも

吉田博士 大日本地名辭書

大森學士 かまくら

横井春野 歴史的日本地理

横井(時冬博士) 大日本繪畫史

歴史地理學會 鎌倉時代

を一讀す可きである。是を一日にして見物す可き順路は、

(東京驛發一番列車に乗じて、鎌倉に至り、夕刻歸京の豫定には)

(鎌倉驛—八幡通若宮小路—二の鳥居前右折—小町通左折—北條屋敷跡—寶戒寺—筋違橋—頼

朝屋敷跡—附近滑川—頼朝、大江、鳥津の墓—鎌倉の宮—鶴岡八幡宮—同境内左裏門より巨福呂坂通し—建長寺—圓覺寺—最明寺—引返して龜が谷切通—扇が谷右折、鐵道レールを越え化粧坂(景清土牢)—海藏寺—引返し英勝寺、壽福寺、實朝—政子の墓—正宗屋敷—御用邸前—由井濱通長谷通り—長谷觀音—觀音手前右折—長谷大佛—鎌倉權五郎社(御靈社)—星月夜—極樂寺坂—極樂寺—左折稻村が崎—七里濱—行合橋—腰越—片瀬—江の島—藤澤驛

「藤澤驛と鎌倉驛は共に、東京驛から三十一驛で賃銀は同じである」

猶壯健の人は、

○鎌倉驛—右折八幡宮通り—一の鳥居—由井濱—左折材木座—右折、光明寺引返して比企が谷妙本寺—本覺寺小町通りへ引戻つて、前記の順に廻るも一法である。

是れに要する時間は、人々各々違ふが、江の島藤澤—電車に乗る他は全部徒歩で、九時間で充分である。況んや馬車又は、人力車を利用するに於いては、易々たりである。逆に藤澤よりするも、結局同じ事である。(見物の箇所は、猶簡單にする事が出来る)

場合に依れば、大船驛で下車して、鎌倉に入り、江の島から藤澤へ行くのも一法である。

(大船より鎌倉驛迄は一里十六町である)

猶簡略に見るには、

鎌倉驛—鶴岡—頼朝、大江、鳥津墓—鎌倉宮—光明寺—由井濱—長谷大佛—觀音—星月夜—極樂寺—七里濱—江之島—藤澤

(大船—圓覺寺—最明寺—建長寺—鶴岡と云ふ順でよい)

でも、一通りの見物である。(小學校の遠足等は是れで充分である)

江の島方面

江の島は、藤澤驛から一里、片瀬迄電車賃八錢、鎌倉片瀬—十七錢、旅館、惠比壽屋、岩木樓、金龜樓、讚岐屋が著名で三圓内外で宿泊出来る。此方面の見物は、鎌倉と結びつけて一日に出来る。又海水浴場鶴沼は藤澤より二十五町、電車賃七錢、旅館は、東屋、中家館、待潮館 三井樓等で、二圓五十錢から五圓迄で宿泊出来る。島は周圍二十町、面積



相州七里濱よ江之島を望む

十八町、江ノ島辨天の名は、天下になり響いてゐる。

逗子葉山方面

逗子驛より海水浴場西南十二町
 六代御前墓南十町、森戸神社南
 三十町、葉山海水浴場南三十町
 是から逗子海水浴場迄十二町

森戸の海水浴場は、驛から三十三町ある。驛より長者が崎迄乗合自動車がある。自動車一日貸切三十五圓、一時間(六人)四圓である。此驛から神武寺(東北一里、自動車一人乗一圓五十錢)金澤八景(東北)にゆく事が出来る旅館は、(子逗)養神亭、松屋

(葉山)日蔭茶屋、長者園、かぎや等で、参園から泊まれる。

金澤方面

金澤へは、鎌倉からも行く事が出来る。鶴ヶ岡から、一時間半で達する。峠を越すので交通機關は無い。如何しても徒歩で行く可きである。峠は水も豊富だし、茶屋もあるから、老人と雖も心配は無用である。鎌倉本部の見物を終へて、金澤に出で、田浦か逗子驛へ出るのには面白い。又壯健な人ならば、金澤へ出て、横濱街道を進み、横濱へ出るも一興である。金澤横濱は半日程である。又單に金澤八景を訪ふなら、田浦驛で下車するが最も便利である。田浦から一里三十町、船一艘雇へ八十五錢である。

旅館としては、千代本、野島館、吾妻屋が主で、参園内外で泊り得るのである。

旅行案

學生に對し鎌倉見物以外に、鎌倉を中心として、附近の名勝古跡を尋ねる旅行案内を記載する。何れも、余が少年教育機關として設けし元祿會旅行部で實行した所で、日歸りを

眼目として居る。

(A)案、大船より鎌倉に入り、鎌倉見物をすまし江の島より、藤澤に出で歸京する。

(B)案、鎌倉の大部を見物し、朝比奈切通しを越え、金澤八景に至り、稱名寺を見て、逗子又は田浦に至り歸京する。

(C)案、金澤八景を見物し、横濱に出で、歸京する案。是れも一日でゆつくりである。

(D)案、品川を起點とし横濱に出で、杉田金澤をへて、鎌倉江之島迄夜行する案、夜の行軍は精神修養、體力養成には、最も効果あると信ずる。(歸りに汽車)品川を夜八時に出で、

江の島へ翌朝九時には着ける。修學の目的を果たす爲め、名勝舊跡を見物しても、午後二時頃に江の島に着ける。(神奈川より東海道を進み、大船)より鎌倉に入るも一方法である

(E)三浦三崎横須賀案、新橋を一番列車で發し、鎌倉にて下車し、主なる所(鶴岡、頼朝墓、観音、由井、光明寺)を見物し、材木座より海岸に沿ひ(山を越)逗子に出で、三崎街道を進み途中小網代、油壺の奇景を探り、三崎に出で、午後十一時の汽船に乗れば翌朝五時に東京靈

岸島に着く事が出来る。學生は、日曜に出かければ、月曜日に缺席しなくてすむのである。又は三崎より浦賀に出で、横須賀より汽車にて歸京する案。

費用は、三圓五十錢で充分である。特に夜行案の如きは二圓内外で充分である。學生諸君の活動を望む。

鎌倉のよるの山おろし寒ければ

みなのおせ川に千鳥なくなり

賀茂真淵

横 須 賀

▲横須賀驛下車。

横須賀は、近世迄一寒村であつたが、文久年中造船廠を建て、明治維新益々經營を加へ鎮守府をおき、内港を以て軍港と定めて以來、一大都會となつたのである。(港は内港と外内港は軍港となり、外港に市街がある)北條氏永祿役後に、五十貫文、三浦横須賀、安藝守、諸役一切御免、

軒別段錢懸鏡共、此外五十貫也、御公方様、永代買得、但着到者百貫役、如前々之仰被定也」とある。

今の横須賀停車場の附近は、古くは、逸見と云ひ、東鑑三浦黨の中に、逸見太郎、同五郎、同次郎の名が見えておる。けれ共、この地が、歴史上著名となるは、三浦安針の塚があるからである。(琵琶首坂の上) 三浦安針は、本名ウイリアムアダムスと云ひ、漂流外人であるが徳川家康に仕へて、外交上の顧問官となり、三浦の逸見に於いて二百五十石を賜つたのである。安針は、日本の女子を妻にめとつて二子をあげた。安針は、肥前平戸に歿したのである。かうして、此地にある墓は、所謂分骨塚か追福塚の何れかである。

名勝地誌云ふ、

横須賀鎮守府 正門は稲岡町通と相對し、敷箇の洋館より成れり。その他、海軍機關學校、

海軍機關術練習所、海兵團、海軍病院等あり。陸軍に屬するものは、要塞砲兵の屯營を主とし

楠ヶ浦・泊ヶ浦 猿島には砲臺あり。

大日本地誌曰ふ「抑も横須賀が今日の如く本邦第一の大軍港たるに至りし基礎は、實に慶應元年二月、時の勘定小栗上野介が日附柴本瀬兵衛と謀り、百年の大計を打算して幾多の異議を排し、海軍技師佛國人ウエルニの設計に基きて、造船所をこゝに經營したるにあり。幕府その末路に迫り、府庫窮乏を告ぐるの時に際して、目前の便利を提けて、國家の爲めにこの不朽の事業を起したる兩氏の功は、蓋し没すべからず。その後造船所落成を告ぐるの時、會々明治維新に遭遇して遂に現政府海軍の手に歸したり。現政府は即ち改めてこれを軍港となして鎮守府を置き、造船廠はその後暫々擴張せられて船渠を増加し、帝國の軍艦を製造修理するに供せらる。

長浦灣 横須賀の隣灣にして、吉倉の渡船場より兩灣は堀切を以てこれを通じ、絶えず小蒸汽船の往來するを見る。長浦の地はもと幕府が船廠を設置せんとしたる地にして、灣口東北に向ひ、南に延びて更に西折し、灣長大略横須賀に同じ。たゞ内狭くして海面の幅員横須賀灣より小に、水深また所々に淺所あるを以て、遂に横須賀をして之の名を成さしむるに至りたりといふ。今、之の海岸、船越と稱する地に、海軍水雷術練習所、同砲術練習所を置けり。

アンツン墓 アンツンの原名はワイリヤム、アダムスと稱し、英國の人なり。慶長五年難船してわが國に漂着し、浦賀より上陸して、江戸にいたりしに、幕府これをこめて還さず。アンツンまたわが邦の風土の温和なるを慕ひ、遂に歸化して職祿二百五十石を賜ひ、この三浦郡逸見の地を領せり。その墓は横須賀より金澤にいたる本道十三峠の上、路傍の丘上にあり。これ彼がこの地の風景の絶勝なるを愛し、遺言してこゝに葬らしめたるなりといふ。丘上近く夏島鳥帽子島、長浦、横須賀等を眼下に見て、風光よし。横須賀停車場よりは約半里なり。

衣笠城址

▲横須賀驛から自動車の便がある。

衣笠村大善寺の後ろ山にある。頂上に金峯藏王権現祠がある、衣笠本城の跡がある。今は櫻の名所であるが、古へは、三浦家累代の居城で、三浦介義明の時、畠山重忠の爲めに亡ぼされたのである。大介の墓は、衣笠村大字大矢部の満昌寺の境内にある。里俗御靈明

神と稱してゐる。満昌寺は建久五年、頼朝公が大介の菩提を弔はんが爲めに、建立した古刹であつた。

拙著三浦藤栗毛云ふ。(大正八年)

「三崎を出で、衣笠の城址へついたのは、午後二時。山高からずと雖も、坂路險峻、一箇の要害である。今は、櫻の名所と云ふが、櫻の時季でないからして、その美觀には接することが出来なかつた。一行は大介の靈を弔はんが爲めに、追悼の野球試合を行つた。紅軍の投手は余が承つた。勝利は若手に幸した。若手組の殊勳者は、宮崎の鐵ちゃん其人であつた云々」と。

逗子

▲逗子驛下車。(鎌倉の部参照せられよ)

逗子は、田越川の谷にある、こゝより葉山に至る海岸は、近年貴族、富豪の別荘地とな

つて繁盛してゐる。風景絶佳である。逗子は古書に豆師又は厨子とあり延命寺には、三浦道香一族の墓がある。

逗子から、鎌倉材木座に至る間に、小坪がある。(小壺)盛衰記に「治承四年八月、三浦介義澄酒匂に至り、石橋山合戦敗北の由をき、引返、畠山次郎重忠追掛けて、和田小太郎義盛と小坪坂に挑み合ふこと」見ゆ。

(1) 披露山古戦場 小坪村がある。治承四年、頼朝伊豆に旗をあげた時、畠山重忠が、三浦義澄と戦つた所である。

(2) 三浦道香墓 延命寺にある。道香は道寸の弟で、永正十年北條早雲との戦ひ敗れて、この地に來り潔よく自裁した。

(3) 六代御前墓 櫻山宇柳作山にある。櫻山は、田越川の南岸にあり、西方の海岸は杜戸ノ崎である。こゝに守殿の明神がある。杜戸は東鑑に鎌倉四境七瀬の名所である。

六代御前は、平維盛の息女で、二位神尼と云ひ高雄山にありしを、頼朝岡部泰綱に

命じて斬らしめた。

櫻田の東沼間に天台宗の古刹神武寺がある。一度は訪ふべき地である。

徳富蘆花氏の「自然と人生」は逗子を描きて餘蘊なし。「湖南雜筆」の一節に曰ふ「舟を浮べて、御最期川を溯る。日落ちて、残照水にあり 山には蟬の音蝸の音猶流れぬ。舟は暮色と共に次第に川を溯る。夕潮満々さ満えて、青蘆の洲も半水にあり。舟行く方は、山影碧く水に臥し、時に魚あり、高く跳ねて白き紋を畫く。日暮れて、水白く、兩岸黒し。鈴虫、松虫、きりぎりす、水を挟みて鳴き、山の開きには梟喉を鳴らす。空に五位鶯の聲あり。」また「四ツ牛網」の一節に曰ふ「風風ぎ、日和らぎ、何所にもなく春意動きて、早咲きの梅五六輪、村路の籠に香る頃、田越の橋にゆめば、膚薄き村と村との間に纒かに青める麥圃を辿りて四ツ手網の數五つ六つ、近きは大きく、遠きは雛の帳よりも小さく、川の形に屈曲して、悠悠として日光に掛かる。宛ながら畫ける様なり。忽ち網の一は音なく落ち、網の二は落ち、彼や此やかはるゝ伏しまた起きて、景即ち活く。伊豆の落日逗子の三方を繞る山を紫に染め、木葉落ち盡したる

柳の村を茜珊瑚の森に化し、麥圃の縁を黄に、畦路を歸る野老の顔を鬼よりも赫く、罌上の鐵先を金に閃めかし、眼の向ふ所皆赫として燃へむとす。此時御最期川の水十倍の明を加へ、水に臨む四ツ手網、箇々火の如く赤し。魚驚いて其下を過ぎらす。影鮮かに水底に落つればなり。已にして日全く落ち、神武寺の鐘聲杳々として夕を告ぐれば、殘照の色と光とロセンの榮華よりも疾く湖み、黄昏は夕烟斜めなる山本の村より湧きて、半時にして地は茫々たり。缺月空にあり。御最期川一條夕闇と縫ふて白し。晩寒を忍びて、川邊に立てば、玉の如き月、水にあり。闇に隠れて有りとも見えぬ四ツ手網の、影鮮やかに其ほそりに臥して、魚などの過ぎてか水搖んと動く毎に、網は跳りて逃く月を掬はむとするに似たり。

葉山

▲逗子驛から自動車の方がある。

葉山は、田越の南で、古くは、郷名に命ばれたことには、永祿役帳に「百六十二貫、宮川左近將監、三浦葉山郷」とあるにて知られる。

今は、御用邸あり、旗亭あり、別荘あり、貴族富豪跋扈の地である。見るべきは、旅館長者園の後丘旗立山である。古くは燈摺、原見山とも云ひ、北條父子が、旗押したて、和田義盛と戦つた所である。事の次第は、源平盛衰記治承四年の條に詳細に出てゐる。
(旗立山のある所は、堀ノ内である。新記に、丸堀ノ内の唱は池溝中の義なり。されば古城蹟の村落となりし所に、この地名多しと見ゆ、)

逗子及び葉山云ふ。

沿革 逗子町及び葉山村は共に三浦郡の一部にして、三浦郡の歴史に就ては太古にも亦、記すべき事少しとせず、日本武尊の妃橘姫が海中に身を抄せし御事共など殊に然りとし萬葉集には、「芝村のみうらさきなるれつこ草あひ見すあらばあれ戀ひめやも」と云ふ歌あり三浦の名は古くより用ひられしが本郡が殊に歴史上顯著の地となりしは康平年間高望王の孫貞道の子爲道が衣笠に居住し土豪となつて以來其子平太郎爲繼より義繼に到つて相模の介となり三浦の介と云ひ大介義明に及びしにて、頼朝が石橋山に兵を起して敗れたる時は義明年既に八十九歳、孫和田小太郎義盛逗子を境に畠山勢と戦ひしが義明は遂に衣笠に陣を敷き惡戦して討死し、後天下

の覇權源氏に歸するや義明の遺子義澄を以て半島の領主となし右府公廳々遊覽に來るの折は義明の塚に詣て、靈を弔ひたりと云ふ。津久井の義行、鷹名の三郎爲清、山口の次郎有綱、三戸の十郎友澄初聲村和田の小太郎義盛等所謂三浦武士の長者猛者は何れも義澄の前後に於て逗子葉山及び其附近より出でし一族中錚々たる者にして、義澄の子義村は性敏なりしが子泰村等北條氏の爲めに敗れ寶永元年一族二百七十餘人自殺を遂げしが後佐原義連の孫盛時執權北條時頼に與し三浦を領し子高時三浦介となり次で義同の世に至り、其子荒次郎義意を新井城に止め自からは上杉氏を奉じ居りしが、永正九年八月十三日北條早雲の爲めに攻め亡され一時は北條家の直轄となりしも、後天正十八年小田原落城の後徳川氏の天下となり半島各所に番所陣屋等を置き管理するに至りしなり。

以上は徳川家康江戸に城廓を築きし前に於ける半島の略史にして同時に逗子の沿革をも語るものなれど、徳川幕府の時に到りては字池子のみを鎌倉英勝寺の寺領に納め、他は酒井雅樂頭松平肥後守、松平大和守等の領を経て井伊掃部頭、細川越中守、堀田相模守の御預り所となりしが嘉永年間久里濱にペルリ來航の前後幕府は此處に江川太郎左衛門を派して守衛の任に當ら

しめ浦賀沖に黒船の影見ゆる時は此邊の町民等も報を待ちて急馳せしものなりとぞ、而して明治維新の後小坪、逗子、池子、沼間、櫻山、久木、山の根を合して一村となし田越村と稱し、逗子又同村内の一小區たりしが大正二年四月一日田越村全村を擧げて逗子町と改め町制をかくに及んで逗子の名は益々顯はるゝに至りし也。而して逗子の名の起源に就ては明かならねど古は逗師又は豆子と記せし事もありしが延命寺に弘法大師のお厨子在りし爲め、人呼んで同寺をお厨子と呼び遂に今日逗子の名を生ずるに到りしもの、如し。

次に葉山村の沿革に就ては永祿二年北條氏の麾下宮川左近將監の采地に屬し天正十八年徳川氏の領となりてより貞享年間始めて此處に代官を置き寛文三年酒井雅樂頭領地に屬し八十餘年間を過ぎ寛延二年松平大和守の領となり前後約百年を過ぎて後安政六年には逗子と同じく細川越中守文久三年堀内相模守御領所となり慶應三年江川太郎左衛門の代官所となり明治維新の後屢々改制を行ひ廿二年三月六區を合して一村となし堀内區小字葉山の名を取りて葉山村と改められ以て今日に及べり。

浦賀

横須賀の東南二里。自動車の便がある。回國雜記に「浦河の湊と云へる所に至り、此は昔、源頼朝卿の鎌倉に住ませ給ふ時、金澤、榎戸、津河とて三の湊なりけるとかや」とあり古くから湊であつた。蓋し、浦河の湊は、西浦賀の久比里の地であつたと思ふ。近世徳川幕府は、茲に、奉行廳をおき、江戸入津の船宿を監視した。嘉永六年、アメリカ水師提督のペルリ軍艦を率ゐてこの地に來航し、これが動機となつた日本は、開國の國定をとるに至つたのである。近世外交史上重要な史蹟である。米艦來航當時の狀況は、澤田章氏著側面觀幕末史」に、最もよく記述せられておる。嘗ては浦賀の造船所は、日本屈指のものであつた。

浦賀港を大觀するには、西浦賀の愛宕山へ登るをよしとする。愛宕山上から、浦賀水道を隔て、房州鋸山を見ると風光絶佳である。

走水神社

浦賀町大字走水にある。郷社にして日本武尊を祀り、社域は、岡阜の中腹にあり、前面は海灣に頻し、二里の海峡を隔て、上總の富津と相對してゐる。走水の一岬を旗山鼻と云ふ。

日本武尊東夷征伐のみぎり、走水より船につて上總へ渡らせられた。海上荒れて、巨浪船をのまんとしたので、寵妃弟橋姫、尊に代りて入水なされた。走水神社の創建はそれに由來する。

走水は古書に馳水に作り、走水渡とは、今の浦賀海峡を指すのである。走水の名義は、この間の潮流急なるより起ることに異論はない。走水の山上に走水觀音があり、昔は、この邊の海上をすぐる船は、神穗米を獻する例になつてゐた。蓋し、觀音と云ふは、弟橋姫の御尊像であらう。昔は走水神社と、觀音とは、相關係したものであつた。

観音崎

浦賀町大字鴨居の管内で、近年燈臺及砲臺を造られ夫れが爲めに著名になつた。

舊幕府の頃、観音崎の山上に、大燈臺場があり、又船見番所において江戸灣を警戒した

江戸灣防備上大切な地點を占めてゐることは、今も昔もかはりはない。

観音崎は古名を佛崎と云ひ、観音堂あり、天正十九年、観音堂料朱印狀には佛崎と明記してある。この地と富津の海岸と相距ること僅かに三海里半にすぎない。

久里濱

浦賀の西南半里、嘉永六年六月北米合衆國水師提督ペルリ來朝の時、應接所を設けられた所である。明治卅四年、この地に紀念碑を建立し、其除幕式には、ペルリの孫ロジヤ將軍遠く軍艦を卒ゐて來りて會し、非常の盛觀であつた。住吉社(栗濱)は、一小祠である。

三崎

▲逗子驛又は横須賀驛から自動車の便がある。東京靈岸島から、汽船の便がある。

三浦半島の極南で、前面に城ヶ島横たはり、一港灣を形成してゐる。近年避暑避寒地として、著名である。鎌倉時代に、源家右大將頼朝公は、屢々この地に渡御した。三代實朝公も、この地に櫻の宴を催ほしたことがある。戰國の世には、小田原北條と安房里見との間に海戦行はれ、特に元龜二年の春、里見義弘と北條民政の舟戦さは著名である。管窺武鑑に、

「元龜二年春、伊豆の三崎表にて船軍さあり、岡本左京亮頼元、父隨縁齊と被連立、一三手の船は、房州海賊衆也、この手の船は、隨縁齊也」と見えてをる。又武家盛衰記に、

「應永十年八月二日、大風にて、同三日中の下刻、唐船二艘相州三崎浦へ漂着したり、千時鎌倉左兵衛滿兼下知にて、印藤備前守美高奉行にて詮議す。船中を實檢するに、明朝永樂錢數百貫あり、此旨將軍義滿、新將軍義持の兩公方聞給ひ、其船中の錢不足錢、足利滿兼へ被下、夫より關東に此錢を用ひらる。」
と見えてをる。此後、明船の到着せしこと數回に及んでをる。

(1) 三崎城址 今の城山で、寶藏山或は北條山とも云はれてをる。頼朝、實朝が屢々遊興を試みしもこの地である。(東鑑に見ゆる三崎山莊、三浦御所) 城は戰國の頃三浦氏の持城で、三浦道寸滅亡後に、北條氏が再興した。小田原記云ふ。

永正十三年、早雲は三崎に城を取立て、房州の敵を防ぎ給ふ、森岡の勢所々より召出されてこの城の在番す。大將には横井越前守を還給ふ云々」

(2) 海南神社 天元五年の創建で、鎌足の裔藤原資盈夫妻を祀る。社側の高丘からの眺望は頗るよき。

(3) 城ヶ島 島は東西十町、南北二町。新記云ふ「古此地城郭ありし遺名と云ひ、或は尉と云者住せしゆえ、尉ヶ島と書せしを、後今の文字に改むとも云ふ」と。
北條氏康氏政も永祿の頃、この島に遊んだことがある。又慶安元年以後、烽火臺を設けた。今は燈臺がある。

新井城址

三崎町から半里、小網代(一小)の荒井崎にある。荒井崎は、小網代港と油壺の入江の間なる岬角である。地は三浦の居城で、城址は歴然と存してゐる。永正九年八月、城主三浦義同義意の父子、北條早雲に圍まれ、三年の間固守して降らず、食盡きて主從城を枕にして倒れ、三浦氏は滅びた。城は北條の有に歸したが、天正十八年北條氏滅亡後、自然此城も廢城となつた。
川上眉山云ふ。

荒井の城址をたすねつ、ゆく歩武數百、麥作り茶作る方を過ぎて松林の中に入る。こゝに荒次郎の墓あり。大龍院殿云々曰ふ。嗚呼半世の勇士、其名は八州に震ひ、其力は萬夫に當りけるが、徑は荆棘に亂れて松籟たゞ昔の夢を吹く裏淋しき塚の主や。いにし永正十三年なりけむ、油壺の波を紅にしける御身が末路も亦悲しかりき。時を隔つる事四百歳、こゝに來つて御身を吊ふ契淺しとせんや。さ花は無ければ跡傍の枝を折掛かけて一傾の酒を屬して出づ。松風颯たり。濤聲近く聞ゆ。此波曾て此人が矛を枕の夢にも通ひけむ。更に徑は斷崖に窮まつて、こゝにも村松と浪の音の相争へる方に、一基の墓あり。道寸義同の刻字を見る。左手に稍深き松林の中、一面平布の芝原あり。荒井の城址として残るは此あたりのみ。松の露夕に落ちて汐風枯草の上に吹疲らん時、怨魂將いづこにさまよはんとすらむ。十二の要害九つの切所、勇士雲の如く、千駄の粟を横んで籠城幾歳に及びけるが、滔々たる小田原勢、敵は好漢北條新九郎入道早雲なり。勢の馳する所、命の歸する所、高が延鐵細工の劍いつの時に折れざらむ。戰國敗餘の武人、弓矢の意地も亦憐むべし。烏兎勿々、深仇なりし其人も近き其武も盡くる時あつて其國も亦滅びたり。あゝ當時の智や勇や略や術や衆や劍や功や涙や、すべて朝雲暮烟に先立

ちて只今たゞ帝國大用學地と記したる木標のもさに一文人の立てるあるのみ。

城址の手前、油壺に面して、東京帝國大學の水産實驗所がある。學界の著名地である。

三浦半島一週案。

(1) 逗子より三崎へゆく途中、新井城址、帝大水産實驗所を見る。

(2) 三崎より久里濱、浦賀、走水をへて横須賀へ出る。

一泊旅行案としては、最も有意義なものである。一度は杖を曳き給へと御すゝめする。

清淨光寺

▲藤澤驛より東北八町。

藤澤は、古來東海道の名驛として知られてゐる。清淨光寺は、時宗の總本山で、藤澤道場と稱し、古へは、寺門大いに繁盛した。文明十八年回國雜記に云ふ、

「藤澤の道場、聞えたる所なれば一見し侍りき、道場の前にふりたる松に藤のかゝり付

ければ、

紫の色のゆかりの藤澤に

迎への雲を松ぞ木高き

正保二年俣野五郎景平の創建にかゝり、開祖は吞海上人(一遍上人から四世の像法孫)である。古來この住職となる者は、一遍上人遊行の跡をついで、全國を遊行し、現住去るに及んで歸つてそのあとを嗣ぐを例とする。寺を俗に遊行寺と稱するに至つたのもそれが爲めである。新郷風土記に「清淨光寺を或は宗祖一遍の制立と説くは非なり。弘長年中一遍駐錫の地は、當府無量光寺なり」と。境内には小栗堂とて、小栗判官滿重を祀つた堂と、寺寶としては判官の愛馬、鬼鹿毛の轡や、照手姫所用の鏡と云ふのが残つてゐる。

小栗判官滿重は當州小栗の城主であつたが、應永の始め、鎌倉より討手をむけられ、落城し、主従十一騎、三州さして落ちのびた。其路次、當國の郷士横山大膳の家(やまたいぜん)に宿つた。大膳は表面は郷士だが實は強盜を業とし多く美女を集めてゐた。中に照姫と云ふ美人あり、

滿重と借老の契りを結んだ。

大膳は、滿重を殺さんとし、さまざまの計をめぐらした。必らず人を喰ふと云ふ鬼鹿毛と呼ぶ悪馬を用ひたこともあつたが成功しなかつた。終ひに毒酒を用ひて滿重主従を殺し遺財を奪ひ、上野原へ屍を捨てた。

此頃、清淨光寺の住職、靈夢に感じ、上野原に至り、滿重の屍を携へ歸り、熊野本宮の湯に湯あみさせた所が、蘇生した。又照姫も、大膳の元を逃げ、人買の手にわたり美濃國青墓の宿で遊女となつてゐた。

滿重はやがて、所縁について京に訴へ、本領を賜つたので、目出度く歸路の序で、相州に入り、横山を搦め捕つて刑に所し、當山に入り、恩恵を謝し、上州から照手姫を仰へて、夫婦の縁を結んだ。

今に判官堂へ御詣りする人は多い。

又、宗祖一遍が弘長元年駐錫の地たる無量光寺は、當麻にある。時宗内の一派本山とし

て知られてゐる。四世法孫吞海の時に、藤澤に清淨光寺をたて、夫れが、時宗の本山となつてしまつたのである。當麻と座間の東にある曠野が、有名な相模原である。

寒川神社

▲茅ヶ崎から寒川鐵道にのり、寒川驛で下車すればよい。

本社は古への相模國の一ノ宮で、鎌倉幕府の盛時に於いては、頼朝北條氏らの崇敬をうけ社殿の修理間然する所なく、不易の廟觀であつたが、元龜天正の兵燹をへて、舊態を失つた。維新の際別當寺たる藥王寺は破却せられた。

祭神は、寒川比古命、寒川比女命で、共に大水上命の御子である。今國幣中社に列せられてゐる。境内頗る廣く、特に一ノ鳥居から二ノ鳥居に出る迄は兩側に年をへた松杉などの天を摩する壯嚴なる光景を呈してゐる。本社の附近には古墳がある。吉田東伍氏云ふ。「此神は仁明紀、承和十三年授位、延喜式高座部の名神大社にして、東鑑に一ノ宮佐河大

明神と載す。近世は社領百石を附せられ、不易の廟觀たりき」

大山

▲平塚驛から四里半、子易迄約三里自動車(一圓)馬車(六十)俵(十圓)の便がある。子易から頂上迄一里半強、約三時間で登れる。二ノ宮驛から湘南軌道で奏野(五十)へゆき、同所から山麓蓑毛迄一里半、蓑毛から頂上迄一時間半で登れる。

大山は、相州第一の大山なりとて、其名が起つたのである。雨降山とも云はれてをる。海抜三千四百五十尺。頂上に阿夫利神社(雨降)がある。俗信的となつてゐるので登山者は頗る多い。大山のうしろは、大正大地震の震源地と云はれる丹澤山塊である。春季祭四月十五日から廿四日迄、夏季祭七月二十七日から八月十七日迄は、特に登山者が多い。山の高峻ならんとする斜坡に沿うて大山町がある。商家、旅舎、舊御師の家などがあり

一繁華をなしてゐる。いまでも講中の人達は、御師の家に泊まるを例としてゐる、舊幕府の頃には、大山嶽とて一種の謠ひ方が此地に存してゐた。

大山の附近に、道興准后が

山陰や雪氣の雲に風さえて

名のみ日向と聞くもたのます

と口ずさみし日向寺がある。杖曳くも一興である。

雨降神社 往時は石尊大權現と稱したるもの、俗に太山不動といひ、祭神は大山祇命にして、

神體は一箇の岩石なり。相傳ふ、日本武尊東征の時この石の上に入りて國見をしたまひし所と

また親鸞上人七ヶ年間相州廻歷の時こゝに登山して、石面に歸命盡十方無碍光如來の十字を鑄

り、本願寺の蓮如上人これをし拜してその主旨を書せり。されば維新前は全く佛に歸して、

眞言宗を奉じ、坊舎十八院を有する巨刹たりき。明治にいたりて神道に歸し、今縣社に列せり。

社の創建は遠く上古の事に係る。傳へられ、孝謙天皇の御宇僧良辨が中興してよりその名六に

揚る。後ち焼失して、徳川家治これを重築し、更に徳川家齊これを修理して、現今見るが如

き銅葺となしたるよし。祭日は毎年四月一日より二十一日まで二十日間及び七月二十六日より

八月十五日まで二十一日間にして、就中七八月の祭禮には登山來賽するもの數萬人の多きに達

すといふ。富士登山の歸途この神社に參拜するものまた尠なからず。町を去り、一の華表を過

ぎて、路兩岐に分る。急なるを男坂といひ、緩なるを女坂といふ。而してその合せるところは

關東平野の渺茫たるを望みて、眺望絶佳なり。また山上不動堂の北三町餘のところに二重瀧あ

り、霞ヶ原に大瀧あり。共に三丈餘の小瀑布たり。

大町桂月氏「相州の雨降山」の一節に曰ふ「男坂に出でまた仰いで登る、石燈幾千級、東京

の愛宕山の男坂を幾十倍せるばかりにて、苦しさ言はん方なし。半里許にして雨降神社に達す

こゝは山腹の平地にして、眼界頓に開け、見渡す限り、一面の蒼波白帆鷗の飛ぶが如く、江島

は、巨甕の浮ぶが如し。茲に小憩して、また上る。上りくつて山頂に至れば、こゝにも雨降祠

あり。祠をめぐるて道あり。長さ三町、以て四方を俯瞰すべけれど、生憎、白雲四面を封じて

絶えて眺望なし。わざと酒を携へたれども、友も、われも宿醉の爲に心地悪く、また飲むの

勇氣なく、空しく瓶を携へて下りぬ。山腹の雨降祠より左折して二重瀧を見る。溪ありて路絶ゆる處に、橋を架す。一の瀧は、其上に在り。二の瀧は其下に在り。二の瀧は大なれども上よりは全幅を見ること能はず。且つ瀧壺に就くべき道なし。友は年久しく大山に住へるものなれども、未だこの瀧を見ることなしといふ。われ見ずして歸るは残念なりとて、羽織を脱ぎ、身を軽くし、生命を一條の葛羅に託し、木根にたより巉巖を踏んで、辛うじて谷底に着きしが、瀧小なりとせざれども、別に奇觀はなし。友は従ふ能はず、上に在りて凡なりや否やと問ふにわれわざと絶景なりと答へて、上り來り、實は下らぬ瀧とて相顧みて一笑す。歸路は女坂を下り、不動堂を見る。一寸壯麗なり。こゝは大磐石を拆きて、堂を其上に安す。周圍の石欄は別に設けたるにあらで、地盤の大石をそのままに削り成せるものにて、奇工見るべし。更にまた出で、大瀧を見る。二重瀧よりは、更に小なれども大山にて自然の瀧は、この瀧と二重瀧のみ。

靈山寺

▲日向山にあり。大山の東の尾山にあたる。和名抄大住郡日向郷である。

靈山寺は、日向山にある。薬師の靈場で、昔當國の國司公資の妻、乙侍従がこの寺に参籠し、

さして來し日向の山を頼む身は

目もあきらかに見えざらめやは

と口ずさんだので有名である。建久三年には將軍家、建暦元年には政子實朝夫人が参詣してゐる。行基菩薩建立の薬師靈場で、代々勅願寺であつた。小田原北條氏の世には、六十貫三百文の土地を寄附され、天正以後六十石を寄附されてゐた。

高麗寺山と諸越ヶ原

▲大磯驛下車。

列車が平塚を出て暫らくすると、右方に、樹木こんもりと茂つた一小丘がある。高さ四百六十呎にすぎないが、歴史上名高い所である。今では大磯町の中へ編入されたが、夫れ迄は高麗寺村と呼ばれてゐた。和名抄大住郡高來郷に當る。

この地一帯は、往昔歸化高麗人の移住地であつた。山の頂上に高麗神社がある。山下から、大磯宿の海邊へかけてが、諸越ヶ原であつて、古歌に多く詠まれてゐる。名義については

「往古東國七州に高麗人散居せり、本州も其一なり。續日本記靈龜二年の條に見ゆ。此邊居住の地なりしゆゑに、此名起りしならん」

と云はれてゐる。永祿四年三月上杉景虎當國討入りの際には、この山下に、陣をとつたこ

との詳細は、甲陽軍鑑に見えておる。

からやまと色々におる錦かな

撫子さけるもろこしの原

(和歌手習)

高麗寺山の東を流る一水が花水川である。源を泰野の山中に發し、當國屈指の歌名所である。

泡多羅山

相模なる立野の山のたちまちに

君にあはんと思はざりしを

と夫木集に詠まれたる立野山は、泡多羅山の一嶺である。山は大磯驛の北に連る丘槽で、嘗て横穴が發見せられたことがある。

大磯と鳴立澤

▲大磯驛下車。

大磯は、貴顯豪富の別荘地として、又海水浴場(日本最初の)として著名である。維新後小磯、高麗寺村を合併して町制をひいた。この地は、東海道の古驛で、行客の事跡も頗る多い。建仁元年六月、源頼家江ノ島詣でのついでに、この驛に止宿し、遊女を娶めて盛宴を張つたことは、著名のことである。又曾我十郎が遊女虎とちぎりを結んだことも有名な話である。(曾我物語)

大磯小磯の地は、和田抄伊蘇郷の中で大小を以て分ち唱ふることも古い頃のことである。曾我物語に

「小田原の宿より、佐川、古宇津、澁美、小磯、大磯、平塚、三浦、鎌倉云々」
と見えてをる。

大磯と小磯の間に、小溪がある。これぞ、鳴立澤であつて、こゝにある一小庵が鳴立澤である。西行法師吟詠の古跡と云ひつたへてゐるが、西行物語によれば、彼歌は高座郡大庭砥上原で詠んだのである。近世寛文の頃、崇雪と云ふ人、この地に幽栖を營み鳴立澤と云ふ石標をたてゝから有名になつた。廻國雜記に、

「鳴立澤と云ふ所に至りぬ。西行法師こゝにて、心なき人にも知れけりと詠ぜしより、此所に斯は名づけ侍る由、里人の語りければ、

哀れ知る人の昔を思ひ出て

鳴立澤を泣きぞ問ふ」

と見えてをる。

又大磯に、眞言宗關東五ヶ寺の一、地福寺がある。一向宗親鸞の弟子了源の開いた善福寺がある。

日本武尊草薙變の史跡

相州愛甲郡に、鮎獲あゆれで有名な厚木町がある。平塚驛ひらつかえきの東北三里半、自動車賃一圓。厚木町から一里強にして、小野神社せのじんじやに至る。この地は、日本武尊草薙の變の史蹟しせきである。

愛甲郡小野神社は、式内の古祠で、閑香明神かんかみょうじんとも云はれてゐる。新篇風土記に、

「日本武尊東征の時、駿河するがに入り給ひしを造等欺ちまむきて、草野に誘ひ、野火をつけ焼打やきうちせんとせしことあり云々」

とある舊蹟は、この神社の附近に求むべきである。日本武尊東征のみぎり、野火の災にあひ給ひしは、駿河の焼津と草薙と、この小野の三地である。このことを一般の史家は忘れてゐるが、夫れは大きな誤りである。この點は大いに注意を要する。古語拾遺に

「倭武尊東征之年、到相模國、遇野火難、即以此劍、薙草得免、更名草薙劍也云々」とあるは、當時の事狀を最も正確に示したものである。

相模國府址

▲二ノ宮驛下車。二ノ宮と小磯との間に當る。

和名抄わめうりせうに「相模國府、左大住郡、行程上二十五日、下十三日、管八郡」と見ゆる相模國府址は今の國府村新宿しんじゆくに求むべきである。今新宿に六所神社がある。國府址は、この附近である。六所神社は、國府創立以來の古祠で、毎年五月の祭禮まつりには、國中の一ノ宮、二宮三宮、四宮及び平塚八幡の神輿みこしを神揃山かみぞろやまにそろへ、高天原參集たかまはらのさんしゆくの儀を行ふを舊例としてゐる。

今東海道の停車場のある國府津は、國府の津と云ふ義で、相模國府の港であつたのである。國府村は、和名抄に云ふ所の餘綾郡餘綾郷よらやまのこらやまであつて、後世、小余呂岐、小由留義と訛つてゐる。

こゆるぎの磯山櫻いそやまざくらさきにけり

小田原

小田原は、箱根の谷口にあたり、丘を負ひ、海に對し、形勝の地を占めてゐる。小田原が箱根路の一驛たりしことは、鎌倉時代既に然りであつたが、小田原が繁盛して、長州の山口と共に文化を競つたのは、戦國の比、後北條氏の時代であつた。小田原記に「相州小田原守護の政道私なく、民を撫しかば、近國他國の人民、懷惠移家して、津々浦々の町人職人、西國より北國に群り來れる、昔の鎌倉もいかでか程あらんやと、覺ゆる許りに見えたり。東は一色より板橋に至る。其間一里の程に、柵を張り賣買數を盡しける云々」とあるにて當時の狀況は大略知ることが出来る。大手小路の東に唐人町があつた。永祿九年の春、三浦三崎へ著船した唐人の一行に家を給して住まはせたのが、唐人町の始まりである。小田原名物の外郎薬は、唐人陳外郎の裔孫宇田某が京都から來て氏綱に謁し、宅を賜

り靈藥をひろめしに始まつたものである。天正十八年後北條氏滅亡後は、町民多く江戸に移轉したが、徳川氏は、この地を宿驛としたので、相かはらず繁盛した。箱根八里を上下する人は必らずこの地に一泊せなければならなかつた。維新廢藩の初め足柄縣廳を此においたが、明治九年に廢され、後足柄下郡の役所がおかれた。東海道線の開通以來、宿驛としての小田原は衰へたが、其後箱根の開發、熱海の開發につれて、漸次恢復し、小繁華の地となつた。今では避暑地としても、相當の勢力をもつてゐる。(世に小田原提灯云ふものあり、廣く全國に流行するに至つたのである)

(1) 小田原城 小田原城の築城の始めは詳かでない。管領持氏の頃、土肥黨の輩が居住したことは明かである。けれ共小田原城の城としての完成は、後北條氏の時である。

(牙替は四十米の丘上にある。今) 後北條氏滅亡の年、大久保忠世入城し、夫れ以後再三城主かはり、貞享三年以來維新に至る迄大久保氏が世々城主となつてゐた。(今小峰曲尊徳を祀れる一小祠がある)

(2) 松原神社 縁起は不詳であるが、俗説では、日本武尊を祭ると云はれてゐる。新編風土記には「松原明神は鶴森明神と號す。こは御醍醐帝の時、當所に眞名鶴棲けるをもて、鶴ノ森と唱へしにより、遙の後天文中金佛の十一面觀音石窟に出現あり、其託宣に任せ、當社本地佛となす。北條氏は、當社を特に崇敬ありき」と見えてをる。北條氏全盛の頃には、社前に市があり七座の棚をかまへたと云はれてゐる。

(3) 蓮生院 花木山と號し、満願寺と云ひ、眞言宗の古刹である。小田原第一の舊址と云ひ傳へられてをる。

久野總世寺

小田原から一里強、山丘に倚つた里が久野である。この地に北條幻庵の屋敷跡がある。幻庵は北條早雲の末男で、幼名菊壽丸と云ひ、箱根別當坊に住し、退隱してこの地に住し風流三昧に世を送つた。當時、幻庵のことを久野幻庵と云ふてゐた。宗牧が、天文十四年

に幻庵の宅を訪問したことは、紀行に見えてをる。

「二月二十六日、幻庵より朝風呂に入るべきよし便あり。云々、幻庵後園の山家見るべしとて、竹の枯葉踏分しるべせられたり」

この里に、曹洞宗の古刹總世寺がある。阿育王山と號し、開山は安叟宗楞である。宗楞の甥小田原城主大森氏頼の歸依をえて、立派な堂宇をいとなんだのである。明應三年には三浦義國が、養父三浦介時高と不和なることあり當寺に遁れたことがある。

曾我の里

▲下曾我驛にて下車。

曾我は今下曾我と云ひ、原、岸、谷津、別所の四區に分れてゐる。東北に曾我山(三三米)を負ふてゐる。

谷津に曾我城前寺がある。この寺の後ろが、曾我兄弟を生んだ屋敷であつた。寺に、曾

我兄弟及び遊女虎の木像がある。城前寺は、曾我物語中に、「曾我の老母、十郎五郎兄弟菩提の爲めに、當所に一寺を建て、曾我大御堂と號す」とあるものであらふ。

曾我山の一嶺に、回國雜記に「答へする人こそなけれ足曳の山彦やまは嵐ふくなり」とある山彦山がある。十郎祐成が、大磯の虎御前を送り、あかぬ別れを惜しんだ舊跡である

道了權現

▲驛から關本まで一里、乗合自動車五十錢、馬車三十五錢、關本から麓迄半里、麓から大雄山最乗寺迄二十八町、小田原から塚原、狩野飯澤をへて山麓迄三里、俵賃三圓。

寺から、明神山をこえて、箱根の宮城野へ三里、道は甚だ悪い。

最乗寺の坊では、金さへ出せば泊めてくれる。田舎の旅館よりは遙かに設備がよい。

道了權現は、大雄山最乗寺の境内にある。最乗寺は、曹洞宗の大刹で、應永元年の草創である。開山は了庵禪師である。本堂開山堂の結構は頗る壯麗である。本堂左方の觀音堂結果門を入り右手の石階をのぼつた所に、道了薩埵殿がある。

佛殿は、古木の立像で、別に大天狗小天狗を祀つてある。最乗寺草創の日に、開山了庵禪師の徒弟道了なるもの、怪力をあらはして自ら大木巨石を運んで工事を助けた、了庵寂の目道了は忽ち天狗と變じ、永く山門を鎮護すべしと誓つて雲中に飛び去つた。今日俗信の的となつてゐるのは、この道了である。縁日は、毎年一月、五月、九月の二十八九の兩日で、其日には、近國より參詣人が群集してくる。

當山では、昔から伐木を禁止してあつたので、一山老松鬱々として天をおふてゐる。一度は杖を曳くべき所である。

道了大薩埵の傳云ふ。

大薩埵、名は道了、妙覺を號す。碁の生處を詳にせず、最乗寺開山了庵慧明禪師が總持寺住

持たりし時、來りて受戒得度し隨侍修學せり。師が近江國總寧寺及び越前國龍泉寺に歷住するや、其の間師事すること影の形に隨ふが如し、應永元年禪師故郷に歸錫し、縁に應じて當山を開闢し、伽藍を建立す。薩埵は天稟非凡の力を出だして巖窟を鑿ち、溪壑を填め、或は巨木を剪り、榛蕪を除き、凡べて勞力に關することは、之を一身に引受けて奔走盡瘁せざるなく、衆人皆舌を捲て其の怪力を驚嘆せり、金剛泉の鑿掘、御金印の現出、一擲石等は歴々作務の迹垣なり、然れども質性柔和温淳にして斷えて異人の風なく、常に紀綱の任務に在りて一山を整理し、禪師の化益を裨補して遺す所なし、同十八年三月初旬禪師微恙を示し、其の月二十七日涅槃に入りたるや、薩埵悲歎措く能はず、衆に謂て曰く、先師既に示寂せらる、子の因縁も茲に終れり然れども盡未來際當山に在りて伽藍を守護し衆庶を利濟すべしと其の誓願に曰く

常恐三寶尊以言直和順心念我者可令獲三寶拔濟

常恐四恩以慈悲心念我者可令獲三難悉除武勇術

常恐父母師長以平等心念我者可令獲三衆惡病消滅

常恐自讚毀他意以正道心念我者可令獲三衆人愛敬

常恐三作業事以無初間斷心念我者可令獲三福德圓滿
と唱へ畢りて俄然形を變じ虛空に昇り去れり、須臾にして右手に降魔の輪杖を持ち、左手に縛魔の剛繩を握り、兩羽翼を生じ、全身大火焰を起し、依然法衣を著し、白狐に乗りて別峯大樹の間に降る、地維六種震動して復た見えす、依て其の影像を模寫し、該垂迹の地に賽堂を建立して之に安置し、道了權現と稱し、以て當山の鎮護とす、爾來五百餘年、衆庶の所願空しからずして、其の利濟を被れるもの幾千萬人なるを知らず、靈驗の顯著なる古今一日の如し。

洒水の瀧

▲山北驛より半道。

相模第一の瀑布と云はれてゐたが、大正十二年の震災の爲めに、著しく破壊せられた。夫れでも猶一見の價値はある。瀧の手前に不動堂がある。相當の信者をえてゐる。新篇風土記云ふ

「源は矢倉瀧より出、三段に落つ。瀧壺より次第して一ノ瀧(高さ三十五間、半、幅六尺許)二ノ瀧(高さ許、幅三ノ瀧(間幅同上)と唱ふ。同上)と唱ふ。」

其形状銀河の中天より落つるが如くにして、當國隨一の瀑布と云ふべし」とあるは、今は昔語りとなつてしまつた。

拙著富士紀行云ふ、

「御殿場からの歸りに、山北で下車した。雨は止んだが、馬鹿に蒸し暑い日だ。自分は酒水瀧は二三度見たことがあるので、見たいと云ふ氣はなかつたが、弟冬海、春雄の兩人に見せてやりたいからであつた。なつかしい不動堂で、冷やしビールを飲んで、瀧へいつてみて驚いた。地震の災害で、昔の面影がない。震災前には、瀧へゆく途中の右の崖上には西洋人の別荘があつたが、崖がくずれて跡方もなかつた。(大正十三年)

足柄路

一 足柄郡 足柄郡は相模國の西部に位して、足柄箱根の山險を以て駿河と相模とを界し北は高嶺を以て甲斐と境して居る、恰かも足柄は、相模平野の西北の城壁の様なものである、この郡は古來上下二郡に分れて居る。然し其境域は、暫々變遷があつて、一定はして居らぬ、古への上郡下郡の境域は如何であつた？ 大略足上郡は酒匂川の中游西岸竝に下游西岸の郷里を總べたものと思はれるが、中世に至つては、郡境が混同した、然し、寛文中に至つて、上下の郡號再び、確立し、足柄の山中を足柄上郡に屬せしめ、下游左岸の地を足柄下郡に併せ且餘綾郡中村郷の地をも入れたのである。又足柄と云ふ名は、萬葉集に多く見えて居る。

安思我良のなてもこのもにさすわなのかなるましづみころあれひもこく(萬葉)

母毛豆思麻安之我良をふれあるきおほみめこそかるらめ心はもへど(萬葉)

又阿之我利とも云ふが恐らくは、質書總風土記に、「相模國足輕郡云々」とある足輕から出たものである、此山の杉で造つた船の足の輕き故とは採るに足らぬ説であるが、足

柄山から船材を取つた事は信用するに足る、唯、足輕か足柄の語源とは見られぬ。

イ 足柄上郡 酒匂川の峽谷をはさんだ、所謂足柄山中の地で、面積、二十六方里、二十六村、人口四萬。松田に郡役所がある、古く足上郡（延喜式、正倉院文書）と云はれ、和名抄には、

足柄上郡（註に 足辛乃加美）とある、正保改高二萬四千石、天保時代の改高は三萬四千石。

ロ 足柄下郡 酒匂川の下流、箱根山中土肥海涯の地を管内として居る、面積十四方里、人口五萬八千、二町三十村、小田原に郡役所がある、古く足下郡（萬葉集、延喜式、東大）と云はれ和名抄には足柄下郡（註に 足辛の下）とある、正保改高二萬六千石、天保中二萬九千石である。

足柄峠 竹之下から登る事一里十二町にして、頂上に達し下る事一里二十九町にして、矢倉澤に達する、俗に地藏峠と云はれ、高さ二四六二尺である。竹の下にも、地藏堂（大雄寺）があり、又矢倉澤にも地藏堂がある、地藏峠と俗稱するも、又いはれありと云ふべしだ。

イ 新道古道 今は新道、古道、とある、新道は明治八年に出來た、明治二十二年に陸軍の砲車運搬等の爲めに修繕せられて、完全になつた、古への足柄路いはゆる足柄の御坂は古道である、新道は草山、古道は比較的木がある、水なき谷を隔て、相平行して居る。

ロ 足柄御坂 古道即足柄の御坂である、萬葉集に、過足柄坂、見死人作歌

「安思我良の美佐可かし、こみくもりよの吾したばへをこちてつるかも」

「安之我良の美佐可にたして袖ふらばいはなる妹はさやに見もかも、」

古事記に「倭建命、悉言向荒夫琉蝦夷等、亦平和山河荒神等而、還上幸時到足柄之坂本云々」とある足柄之坂はこゝである。日本武尊吾嬬者邪の舊蹟は、紀、紀の文の相違よりして、一 上州の碓日峠とも 二 足柄の碓日だとも云はれる、然し地理上よりして、吾妻者邪の舊蹟は、足模の碓日だと見るが至當である、久米氏の説に依れば、宮城野から御殿場へ越える峠を碓氷峠と云ひ、其峠上を堺として、相模の海は見えなくなるとの事であ

る。果して、久米氏の所謂碓氷峠なりや否や二段として、廣義に解して、日本武尊の吾妻者邪の舊蹟は足柄路にあるとは云へる、この足柄峠は、東海道第一の險要で、坂東の稱も此坂から起つたのである。古くは足柄以東を坂東と云ふたが、近古に至つて、更らに、關東とも云ひ、つひに關八州の號が起つたのだ、兎に角くに、古への官道で令義解に「凡朝集使、東海道、坂東（謂駿河興相）皆乘驛馬」とある、即東海道を下る人は、息津蒲原長倉横走（竹之）をへて足柄峠を越え、坂本へ出たのである、然るに、延曆二十一年になつて、富士山大噴火の爲め足柄路は通へなくなつた。そこで同年五月に新に宮荷路を開いた、恐らくは長倉驛邊から宮荷へかゝつたものであらふ。然し當時猶政府では足柄を大路と目して居たので、直ちに改修に著手し、二十二年五月に宮荷路を廢して足柄路を復した、宮荷路を廢したとは云へ、是れ以後は足柄宮荷兩路共通行路となつた、元來關を諸國の要害におく事は、古制であつて、足柄の關も、古代からあつたものと思はれるが、延曆八年に、諸國の關防一切停止せられた時に、足柄關も廢された、然し昌泰二年に至つて、東國の靜

肅を資けん爲めに、足柄、碓日之二關を復活した、然し其後の沿革は、わからない、中世に至つては、足柄箱根兩路共行はれて、大小公私の別はなかつた様である、梅花無盡藏に「自桃園赴相州、有兩道、一口箱根、一日足柄、足柄爲近、曉陰及且快晴、詩日箱根雖近小桃源、尙隔神巫三島村、一步不臨山似恨、直尋足柄并朝暾」

とあり、又宗祇が湯本で死んだ時にも、遺骸を昇がせ足柄山中をすぎたのである、然るに徳川時代に至り足柄を塞ぎ、箱根を以て公私の往來の便に供するに至つて、足柄路は、荒廢するに至つたのである、箱根にも古道新道がある、徳川時代の官道は、即新道で、古道は湯本から峯續きに通じて居た。

ハ 足柄關址 關址は、今詳かでない、新篇風土記に「古關は足柄峠の頂上よりこなたに字をば明神と云ふ所あり、其邊を舊蹟ならんと云ふも、未慥なる證を得ず」とある、而して又、關の廢蹟となつた、年歴も分らないのである。（昌泰二年官符、同三）

足柄の山の關守いにしへは有もやしけん跡だにもなし

（明日香井集）

行かひの道のしるべにあらましをへだてけるかな足柄のせき

(相模家集)

足柄の關の山路を行く人は知るも知らぬもうさからぬかな

(後撰)

ニ 古城址 北條家で戰國時代においたもので、頂上にある、儼然として形を存しておる

此邊の景色は絶可である、右に八時山を眺め、富士の裾野を眼下に見る。

ホ 照天様 頂上に樹木鬱蒼たる所がある、元來今の足柄路には、木が少ない、殆んど草

茫々たる山であるが、こゝ丈けは珍らしく森になつて居る、此中に鎮座まします、照天様で、其下の、獵師八郎兵衛の祖先は、茶屋であつたとも追判であつたとも云ふ事だ、八郎兵衛の家は、竹之下の農であつたが、建久四年五月、源頼朝富士野の狩の途上、此家に休憩して四方八町の地を賜うて以來連綿として、つゞいて居るとの事である、照天様後ろの池は、水の絶えた事がない、昔から雨乞の時は、此池に祈るとの事だ。前後二里半にあまる峠中、家はは一軒だ。

へ 足柄明神古祠 今刈野岩村に在る、矢倉澤明神は、古くは、此時にあつたのだ、照天

様より下る事二町にして、其舊址と唱ふる礎石がある。

ト 義光笛吹の古蹟 古城址の附近にある、箱根にも小涌谷と蘆の湯の村界に笛塚と云ふのがあつて、矢張、往昔新羅三郎義光が、伶人豊原時秋に笛の秘曲を傳へた舊蹟だと云ふて居る。是らは何れも時秋物語から附會した故蹟であるが、足柄山の方が事實に近いと思ふ。

チ 金時山 公時とも書かれ、又猪鼻嶽とも云ひ、足柄連嶺の一峯で、四千三尺の高さである、地質學から云ふと、箱根火山北方の外輪で足上、足下、駿東の三郡界である、俗説に、「昔此山は坂田の金時の生長した山である」と、然し、公時が足柄山で生長したとの説は、前太平記にある許りで、信用は出来ぬ、此山へ上るには、仙石原から行くのが一番樂で二十五町、矢倉澤から二里、足柄山から一里半である、山の傾斜は頂上近くで随分と急である、唯、面白いのは、周圍の山が草山であるに、此山頂附近丈け樹木鬱蒼として居る事だ。

矢倉澤 矢倉澤は、今、内山、平山等を併せて北足柄村と云ふて居る、足柄峠の直下に位置し、其溪流即内川は、内山で酒匂川へはいる、近世矢倉澤番所をおいた地で、形勝の地點である、矢倉澤郷土誌に曰く「里俗、岩窟ヲヤグラト云ヒ溪谷ヲ澤ト稱スレバ、此地所謂足柄ノ八重山ノ溪間ナレバ其形容ニ、因テ古ヨリ、矢倉澤ト呼ビシ地ナルヲ、後村名トモナリシニヤ」とある、此地にある嶺松山江月院の如きは、山緒不明である。

イ 矢倉嶽 矢倉澤の西嶺である、いはゞ矢倉澤は、山陽にあるわけだ高さ二千八百六十一尺、全山悉く草茫々たる有様だが、頂上迄一里はある、萬葉集に和乎可鷄山とあるは此山の舊名であるとは新篇風土記の説である、又頼朝についての傳説もある。(源平盛衰記)

阿之賀利の和乎可鷄山のかつの木のをかつさねもかつさかずとも、

ロ 番所 番所は今も残つて居る、これが所謂近世の足柄關で、小田原大久保家の守衛に屬して居た、誰れも知つてゐる通り、徳川幕府は、箱根に嚴重なる關門を設けけたが、抜け道をする者を防ぐ爲めに、

一 根府川、(伊豆方面) 二 矢倉澤、三 仙石原、四 谷峨、五 川村、(以上駿河方面)
番所をおいたのである、矢倉澤番所もこの一である、小田原迄三里半、

ハ 地藏堂 古道筋にある、閻魔堂、と共に、古ぼかしい建物ではあるか、反つて奥ゆかしい、御詠歌に

むつみどり山は二國のさかひなりちかひも廣き奥の院哉

鬼鹿毛馬頭觀世音の碑がある。

ニ 貝殻澤 地藏堂の少し下の溪流のわきにある、貝の化石を産するを以て著名である、地質學者は、是れに依つて研究の一資料を得るであらふ。

ホ 足柄明神 今では、矢倉澤明神とも云はれる、元來は、峠にあつたのだが、後に矢倉嶽に遷坐し、三轉して、今の地に鎮座します事となつたのである、景行天皇の御宇、日本武尊東征の歸路、此神が白鹿に化顯して、道案内をした事は古事記に見えて居る、兎に角く古社である、竹之下の合戦の時にも新田方が、明神の南の原に陣を設けけた事

は、梅笑論に出て居る、この明神の矢倉澤に移りましたのは、應永の頃であらふと思はれる、林民神社考に

「足柄明神、昔赴唐、其妻神留三歳。明神歸朝、妻神色白肥美、明神日、思慕之情、待歸之心、必可瘦衰、今何肥而麗哉、不思我也。遂去妻神」

と。神とは云ひ乍ら、艶物語である。

へ 夕日瀧 高さ十五間幅二間の瀧である、内川が、土地の段階を直下する所にある。

平山の里 今、北足柄の大字である、内山と谷峨の間にある、貞應二年海道記に「逆川を立て平山を過ぎて、高倉宰相中將、苦峰山のつみぢり、急河と云ふ淵にて、底の水屑と沈みにけり、つらく其昔を思へば、

流れ行て返らぬ水の哀れにも消えにし人の跡を見ゆらん

此地である。

イ 酒水瀧 この瀧は、當國隨一の瀧と云はれ、源は、矢倉ヶ嶽である、三段に落ちてゐる

と云ふのが特色であるが、

一ノ瀧(高三十五間半、幅六尺許)二ノ瀧(高八間許、幅六尺許)三ノ瀧(高十五間、幅同上)

と云はれる、形状は銀河の天より落つるが如くであるが、水量の缺乏は唯一の缺點である、瀧の傍に不動堂があり又石棺がある、山北驛で下車して、此瀧を見るは、頗る便利である。

怒田と範茂の舊蹟 今福澤村の大字である、清川と云ふ溪流がある、斑目、竹松、怒田、千津島等の名は皆永祿役帳に載つて居る。

範茂の舊蹟 此地の清川は甲斐宰相範茂の身を投じて死んだ舊蹟であると云はれて居る、東鑑に、

「承久三年七月十八日、甲斐宰相中將範茂、爲式部丞朝時之預、於足柄山之麓、沈于早河底、是五體不具者、可爲最期生障碍、可入水由依所望也」

とある早川は、こゝだと云ふ事である、東鑑には、早川とあるが、承久記、海道記には

清川とある、依つて範茂の死を遂げた舊蹟は、終田の清川である、村内にある古墳を範茂の墓だと云ふが最もな事である。

關本 今南足柄村と改めた、松田へ一里半、小田原へ二里半ある、足柄路の古驛で、延喜式にある坂本驛とは是れである、坂本驛は上郡小總驛と、駿州横走驛との中間である、當時横走と、此坂本とは、要樞の地點であつたと見え、驛馬の數は他より多く坂本驛は二十二匹である、東鑑、建久元年十月、將軍上洛の條に「四日酒匂、五日關下と」ある關下も又こゝである、更科日記に、

足柄山と云ふは、四五日かねて怖しげに暗がり渡れり、漸々入たつ麓の程に、空の氣色果々しくも見えず、えもいはず、茂りわたりて、いと恐しげなり、麓に宿りたる所に、月もなく暗き夜の闇に、惑様なるに遊び三人、何こよりともなく、出來たり、五十許なる一人、二十許なる一人、十四五なると有、庵の前に傘をさゝせて居ゑたり云々」

又海道記に、

「關下の宿を過れば、宅を並ぶる住民は、人を宿すを主とし、窓に歌ふ君女は客を止て、夫こそ、哀むべし、千年の契を、旅館の一夜の遊女に結び、生涯の樂みを、往還の諸人の望にかく、翠帳紅閨、萬事の禮法異なりと雖、草庵柴戸、一生の觀念是同じ」云々、

ある、當時の繁昌の有様がわかる、遊君迄居た宿であるが、徳川期に箱根が官道ときまつてからは、衰えてしまつた、唯、大山詣りの人が、松田をへて道了山へくると、小田原をへて、道了へくるとで、賑ふのみとなつた、

イ 狩野山 關本驛南嶺で、公時山の東に並び箱根山の北を蔽ふて居る、山上に明神祠あるを以て明神ヶ嶽とも云ひ、塚原の西にあると云ふので、塚原山とも云ふて居る、高さは三千八百四十六尺である、最乗寺から、この道をぬけて、宮城野へ出る道は景色がよい、頂上から宮城野迄三十三町ある、狩野山は一度は訪うべきだ。

ロ 狩野極樂寺 元來、狩野と云ふ地名は、伊豆國天城山下にもあつて、延喜式輕野神社

應神紀なる伊豆の枯野舟の故事を傳へて居る、足柄山も又萬葉集に、「足柄小舟」とうたつて、「舟木伐」とうたつて居る、是らと何か關係があるかも知れぬ、又狩野は獸狩する狩野の意味にもとれるが、未だ確證をえぬ、極樂寺は康承三年に僧法師（佛滿禪師、今川範國弟）の開創で、臨濟宗を奉じて居る、中興は松田尾張守憲秀である、兎に角古寺である。

石橋山

▲早川驛の南十五町。

小田原から、熱海街道を進むと石橋村がある。村から石橋山へ登路十二町。治承四年源頼朝が僅か三百騎を以て、大庭景親の三千餘騎と戦ひ一敗地に望れた古戰場である。戦争の有様は、吾妻鏡、源平盛衰記に詳しく出てゐる。この間道路は、皆海より遙かに高く山腰を周りに狭く、レオニダスのサーモピリーも實にかくやと思はれる。

頼朝は、此一戦に敗れたけれ共、幸ひにして身を全うして三浦に投ずるをえ、此より諸國の源氏集り來り漸々志をえ、遂に東方に大勢力をうるに至つた。今山の麓に佐那田與一の墓がある。

治承四年八月二十日、源頼朝は三浦介義明の一族以下の輩が兼てより重奉せるにもか、はらず、未だ參着せず、蓋し海路風波を凌ぎ遠路艱難に泥み遼巡敢て出づる能はざる故なるべし。今や三浦來らすとて猶豫すべきにあらずと（三浦氏は相模三浦半島に在りて、相模灣を隔て、土肥と相對せる地にて、海路なれば此間を通過し來らざるべからず、陸路は迂回甚しく而も當時は大庭の輩此途上に要したるなり、而して此頃は恰も夏秋の交なれば海上は穩ならざる勝の時なり、武衛（頼朝の事）先づ伊豆相模の御家人のみ率ひ、伊豆國を出で土肥實平の在る相模國土肥郷に赴き給ひ、此にて軍の評議あり。扈從の輩は北條四郎以下四十六人、皆頼朝が恃とする人々にて各家を忘れ親を忘れて赴きたる人々なり。廿二日三浦義澄以下海路三浦を發す。武衛は北條佐々木を先として、早川尻に陣を取。早川黨進出て爰は軍場には悪く侍り、湯本の

方より敵山を越て後を打、園中に取籠られなげゆ、しき大事なり。更に一人も遁れ難しと申ければ、其より米嶮石橋と云ふ所に移て陣を取、上の山の腰に楯をかき、下の大道を切塞て引籠る。此事角と聞ければ大庭三郎景親は武藏相模の勢を招從へ、宗徒の者三百餘騎家子郎等相具して三千餘騎也。同二十三日寅刻武衛既に三百餘騎を率ゐて石橋山に陣し給ふ。此間高倉宮より賜ひたる令旨を以て御旗の上に付けられ、中四郎忠重之を持つ。父頼隆自幣を上箭に付け御後に候ふ。同日辰刻景親の三千餘騎石橋山に押寄、谷を前に隔て海を後に當て陣を取る。兩陣の間僅に一谷を隔つるのみ。景親の士卒の中飯田五郎家養心を武衛に通ずるも、景親の陣に隔られて心ならずも彼の陣に在り、又伊東二郎祐親法師三百餘騎を率ゐて武衛の陣の後山に宿し之を襲ひ奉らんす。三浦の輩は曉天に及び丸子河邊（今酒匂川）に宿りて景親の家屋を燒く其煙焔々半天に聳ゆ。景親等遙に之を見て三浦の輩の所爲なりと知りぬ。時に落日西山に傾て其日も既に暮んす、景親等相議して曰く。今日黄昏に臨みたりと雖合戦を遂ぐべし。明日を相待ならば敵大勢附重て輾ち攻落難けん、後には三浦の者共馳來也、兩方を禦ん事ゆ、しき大事也、道狭くして足立悪き城なれば、小勢におはする時佐殿（頼朝）を沮落して、明日は一向

三浦に向て勝負すべきと、三千騎聲を調へて関を造り、武衛の陣を襲ふ。武衛も同じく関を合て鳴矢を射通しければ、山神谷で敵も味方も大勢とこそ聞えけれ。武衛の從兵を討るに到底彼の大軍に比ぶべきにあらず、されども皆舊好を重するに依り唯命を輕じ死を效し紇りぬ。佐那田與一義忠并に武藤三郎及郎從豊三家康（安）等命を殞しぬ。佐那田與一は岡崎四郎義實の嫡子當年二十五歳、武衛の命を奉じて今日の軍の先陣して名ある大將大庭股野に組んて進む、左手は海右手は山間さはくらし、夜に入りて雨沃ぐが如く降り出す道は狭し馬に任せてぞかけ行ける。平家方よりは與一は能き敵ぞ、あますなもらすなとて進む者には景親景久以下屈竟の兵七十三騎、佐那田一人に組んて我先にさはやれ共、間さはくらし道は狭し馬次第にぞ打たりける、かくて與一は股野五郎景久と組討し馬の間へ落重り上になり下になり驛返し持返し、山の岨を下りて四段計ぞこるびたる、今一返もこるびなば互に海へは入なまし、股野は大方なるに下に推附られてうつふしに臥したるも、與一の刀は血詰して抜けず。互によびひて上や敵下や敵と園中に争へる中、與一運の極の悲さには、遂に長尾新六の爲に首をか、れけり。無慙といふも愚なり、家安も分捕八人して討死して、こそ失にけり。後は源平互に入替立替終夜戦けるが

軍兵もはや疲ぬ敵は大勢也今はいかにも難叶かたはじて曉方に武衛は土肥をさしてぞ落行おちゆける。時に疾風心を惱し暴風身を勞いやす、景親之を追ひ奉る中飯田家義武衛を遁のがれしめんとて裏切して景親と戦ふ、此際を以て武衛相山に入り給ふ。廿四日武衛相山の内堀口邊に陣し給ふ、(此地今明かならず今の城堀村即ち元の堀内村附近とては、少しく南により過ぎたる如く思はる、要するに此山脈重疊の間には相違なし)景親亦重ねて競ひ來る、武衛後幸に遁れ給ふ、此間加藤大見等御後に留りて景親を防ぐ、此父兄敵にありて各子を思ひ弟を憐て進まず、此外佐々木高綱、天野遠景等轡を並べて攻戦す、乗馬多く矢に中りて斃る。武衛駕を廻し百發百中の藝を振ひて相戦ふ事度々に及ぶ、其矢必ず羽を飲まざるはなし。射殺す者多ければ箭既に盡く。加藤景廉御駕の轡を取り深山に引き奉る、景親の兵四五段の際に近き來る、仍て高綱等猶防ぐ。北條殿父子三人亦景親等と共に交戦して筋力漸く疲れ峰に登る能はず仍て武衛に従はず。武衛は險阻に登りて臥木の上に立しめ給ひ、實平其傍に候ふ。實平景員等の來隨はんことを退け、人數を率るに於ては此山に隠居給はんことを定めて遂げ難からん、御一身に於ては縦ひ旬月に渉るも實平計略を加へて隠し奉るべし、今の別離は後の大幸也とて各分散す、悲涙眼を遮り行歩道

を失ふ。家義も亦武衛が今朝合戦の時路頭に落し給ひし御念珠を持來り御共に候はんといひしも、實平先諫の如く申し、亦泣々退きぬ、北條殿は箱根湯坂を経て甲斐國に赴かんとし、同三郎は土肥山より桑原(伊豆田方郡)に降り平井郷を經る中早河(今の冷川ならん)の邊に於て祐親の爲に圍まれ、茂光と共に戦死す。景親は武衛の跡を追ひ嶺溪を捜し求む。時に梶原平三景時は確に御在所を知るも有情の慮ありて、此山に人跡なしとて、景親の手を引き傍の峯に登る。(源平盛衰記に朽木のうつろに隠れ給ひ、鳩飛びたり兎出たりなどと稱するは附會の説にて吾妻鏡の説こそ正かるべけれ)晚に及て北條殿相山陣に參着す。爰に宮根山の別當行實弟僧永實を遣はし御駄餉を上る、武衛飢ゑ給ひし時とて大に喜びせ給ひ、實平の世平となりし曉には行實を別當職とすべしと云に諾ひ給ふ。武衛密々宮根山に登り給ひ、行實の宅は參詣の縋素群集すべしとて、永實の宅に入り給ふ。三浦は丸子河の邊に來り去夜より曉天を待て參向せんとせし處に、合戦既に敗北と聞て馳歸り、路次由井濱に畠山重忠と戦ひて重忠を敗る。二十五日景親武衛の前途を防がん爲方々の衛をせき固む、武衛宮根に居ます間行實の弟良選兄に背き武衛を襲はんことを、故に武衛再び宮林通を經て土肥郷に赴く。廿六日武藏國の住人畠山重忠由

井浦の會稽を雪んきて、三浦の輩を衣笠城に襲ふ、義澄等よく戦ふも昨今兩日の合戦にて力疲
れ矢盡き、半更に臨て城を捨て遁れ去る。義明を具せんさ欲す、義明時に年八十九、餘算幾も
なければ、我武衛の爲命を致さんさ、義澄以下涕泣度を失ふさ雖命に任せて去りぬ。廿七日風
雨甚し義明遂に討たれ義澄等は安房に赴く。北條殿岡崎四郎等さ土肥郷岩浦より船に乗りて安
房を指して纜を解き、海上三浦の輩に遇ひ互に心事の伊鬱を述ぶるを得たり。景親等數千騎を
率ひ三浦に攻め來りしも、義澄等渡海の後なりき。仍て歸り去る。景員景廉光員三箇日の間宮
根の深山に籠りて糧絶え魂疲れ心神惘然たり。就中景員衰老して進退自由ならず、巧ち赤湯山
に送り景廉光員は駿河に入る。廿八日武衛土肥眞名鶴崎より船に乗りて安房國に赴かんきて、
實平土肥の住人貞恒に小舟を粧はしめ、廿九日武衛實平を相具して扁舟に棹し安房國平北郡獵
島に着し給ひ、北條殿以下の人々之を迎へ奉る。

眞鶴岬

眞鶴村の東南に斗出した岬角である。(南東に斗出する一里、高さ三七六呎)眞鶴港は石橋山に敗れし頼朝

主従七騎が、安房國へ走つた地である。又梶原平三が、頼朝を助けたと云ふ嶋窟がある
これは東鑑に「或岩窟」と記したものである。
東鑑に、頼朝石橋山敗軍の後

「二十八日、武衛自土肥眞名鶴崎、乗船赴安房國方、土肥次郎實平仰住人貞恒、粧小舟
九月二日、御臺所(平政)自伊豆遷秋戸郷、不奉知武衛安否、獨深悲淚終之處、土肥彌太
郎遠平、爲御使自眞名鶴崎參着」
と見えてゐる。又岩村觀音堂の瀑布も有名である。

土肥の里

土肥とは、舊郷名で、早川の庄と異稱同地である。今では、門川村の邊を土肥村と改め
たが、近世迄は土肥六筒村と云ひて、吉濱以南を總べてゐたのである。古の土肥郷は、北
條氏分國の頃迄は、眞鶴三ヶ村に屬してゐたのだが、採石場のことより爭論に及び、眞鶴

と土肥は分離したのである。

この地は、源頼朝の家人土肥次郎實平、同彌太郎遠平の住所で、土肥一黨の時めいた所である。土肥堀之内に成願寺がある。土肥氏の菩提寺で、實平遠平父子の本願である。

湯ヶ原温泉

▲湯ヶ原驛で下車して約二十町。自動車人力車の便がある。

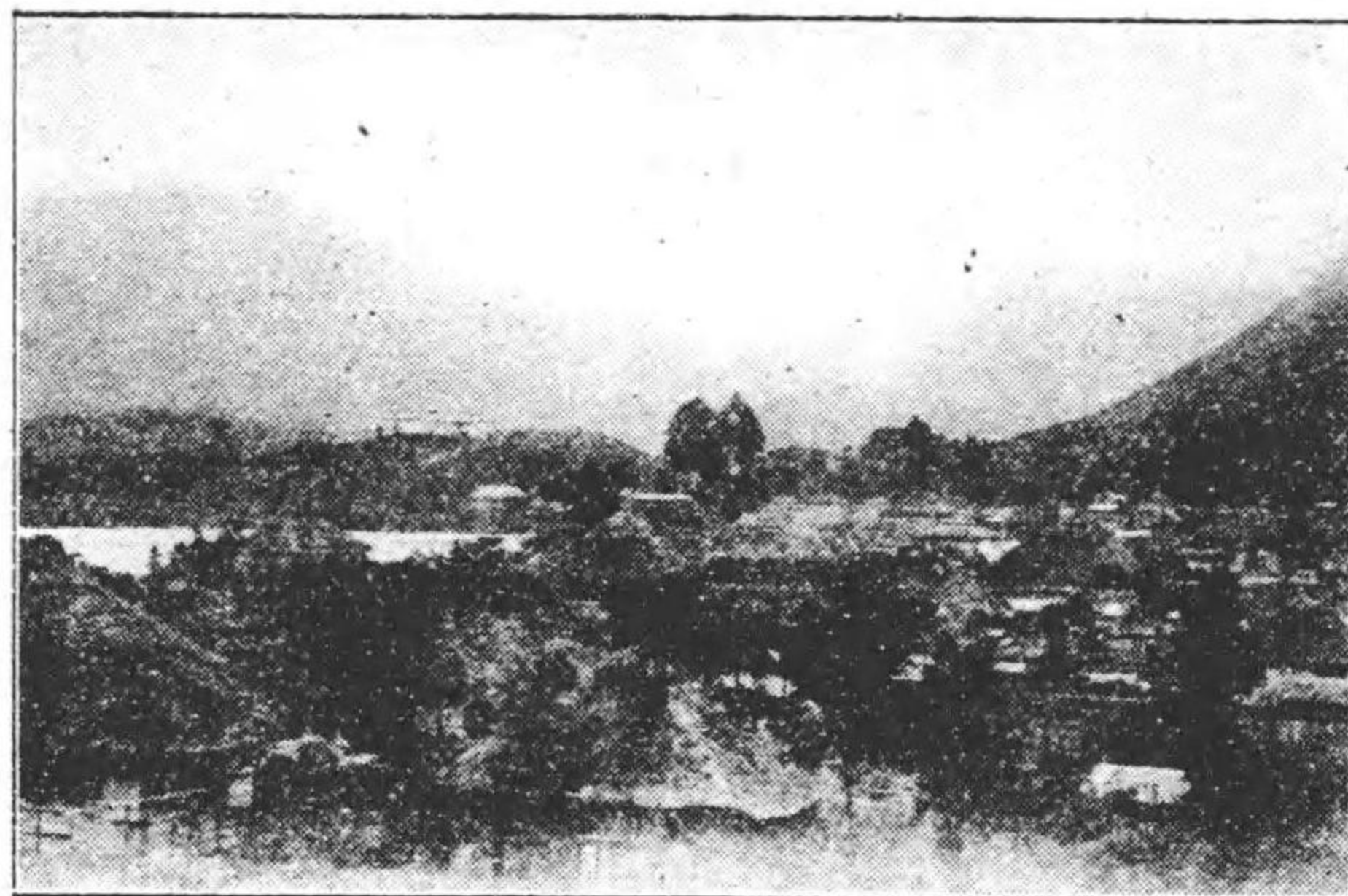
萬葉集に「阿之我利の刀比(註今)の河内」と見えてをる河内は湯ヶ原の谷である。温泉は、白鳳二年の發見にかゝり、中古小梅の湯と云はれてゐた。西南北の山面は山、東南の一方は展けて相模灘を望んでゐる。

附近には、土肥の大杉(頼朝石橋山の合戦に敗れて身を隠したといふ)土肥父子の墓、成願寺、五段の瀧、不動瀧十國峠等みるべき史蹟が多い。温泉は、藤木川の兩岸に湧出し、透明無臭、鹽類泉で打撲傷、切創、火傷、胃腸、疝氣、子宮病、痔疾、リウマチス等に効がある。

箱根山

帝都附近 遊覽浴泉第一の地である。四季よりくの面白味がある。震災後登山電車も破壊されたが、今では復舊した。小田原驛から電車で湯本迄ゆき湯本から登山電車で、強羅迄ゆける。又温泉と温泉との間は、自動車走らすことが出来る。山中の交通機關は完備してゐる。芦ノ湖には、和船及びモーターを浮べる事が出来る。

箱根七湯の名は古來世に聞えてゐるが、今では七湯以外に、四温泉が開かれてゐる。昔は湯本(旅館福住、小川、)塔ノ澤(旅館環翠、)一ノ湯(宮ノ下、)旅館、外人向の富士(底倉、)旅館、仙石屋(堂ヶ島、)旅館、大和(木質、)旅館、蘆ノ湯(旅館紀伊國、)以上は古のいはゆる箱根七湯であるが、明治の世に新に小涌谷(旅館三河屋、外人向の小涌谷ホテル、)強羅(旅館強末廣、)姥子(旅館秀、)仙石(旅館俵石閣、)の四温泉開かれた。



△ 望ヲ宮離リヨ町根箱

箱根山は、宮根とも書く。近世漢學者は函嶺と稱し、世にきこえた大火山である。東海道の古驛路其間を過ぎ、諺に箱根八里と云ひ關東八州の天險であつた。

足柄の宮根飛越えゆく鶴の

ともしき見れば日本しおもほゆ

(萬葉集)

山はいはゆる複成火山で、金時、明神、明星淺間、鷹巢、要害、鞍掛、山伏、三國、乙女などを外輪山とし、其中に、神山、駒ヶ岳、双子山が聳立してゐる。山上にある芦ノ湖は火口原湖早川須雲川は火口瀬である。

箱根十二湯の名は、

湯本、塔ノ澤、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、芦ノ湯、(以上は昔からの七湯である) 小涌谷湯の花澤、仙石原、強羅、姥子 (近來七湯に加る)

である。湯本で道は、二つに分れる。右は塔ノ澤、宮ノ下に至る新道、左は芦の湖、箱根宿に至る舊道である。湯本では、金湯山早雲寺を見るべきである。北條五代の墳墓がある湯本より五丁にして、塔の澤、一里半にして宮ノ下、途中の小塚から、溪流に下れば、堂ヶ島温泉である。宮ノ下は十二湯の中心、(一千百餘尺) 宮ノ下の上は、底倉、茲から路は二つに別れる。左は小湧谷、芦ノ湯をへて箱根山に通じ、右は、木賀、強羅、仙石原、姥子の各温泉に通ずる。今は強羅迄電車が通ずる。

木賀から四丁にして、宮城野、(古の火) 一里にして仙石原、こゝより長尾峠又は、乙女峠をこえて、駿河へ出る事が出来る。(御殿場) 又木賀及び宮城野から強羅へ行く事が出来る。強羅から左すれば、小湧谷、右すれば、大湧谷、姥子をへて、湖尻へ出る。こゝか

ら舟で芦の湖を横断して、箱根宿へゆく事が出来る。大湧谷は、通稱大地獄で、學術上の硫氣水である。

小湧谷は、(海拔三)風光雄大、(本へ出る道は、古の箱根路である)茲から芦の湯へも出て二子山駒ヶ岳へ登るも一興、又直ちに元箱根へゆくもよい。途中箱根神社へ寄るべし。箱根町から三里にして、三島町へ出る事も出来るし又鞍掛峠を経て、湯ヶ原へゆくもよし、又鞍掛、十國をへて熱海へ出るもよい。

新相模風土記に、箱根の小沿革あり。曰く「箱根古は宮衙に作る。郡の西にあり。巍然として千嶽萬山蟠繞す、箱根はその總名なり。西は伊豆國に跨り、北は足柄山につづき、南は海に盡き、東の山麓は風祭村——小田原の西方半里ばかり——より始めり。山中に村落を結べるもの凡そ十四村、最西を箱根宿と云、宿の西堺は豆州君澤郡中山新田にて國界をなせり。東海道の係る所を以て山中の東西を計るに、長四里四町餘、南北は山嶽重疊にして其表知るべからず直亘凡そ五里餘もあるべし、東海道の官路、往古は専ら足柄山を往返せしに、富士山焚燒し碎

石路を塞ぎしを以て、桓武帝延暦二十一年五月、始て當山に新路を開き官道を通ぜらる。明治五年、此道を廢せられ再び足柄の舊路を復せられしこ見ゆ(されど此道直徑なるが故に、便宜を以て足柄、箱根の兩路互に往來せしと見えたり)治承四年八月、頼朝石橋山敗軍の時、北條時政、義時父子、此山に路して甲州に赴く。又頼朝箱根別當坊を出て山中を経て、土肥郷に赴けり。加藤五郎景員其子光員、景廉等敗軍の後、此山中に匿れ糧食を絶三日、景員子息等に訓告して頼朝の跡を尋しむ。壽永三年、木曾義仲を追討の時、軍勢足柄、箱根兩路にかゝりて走上れり、文治四年九月、岡崎四郎義實の郎等山麓にて山賊王藤次を獲す。承久の亂に、鎌倉方足柄、箱根の兩道を切塞ぎ固め、敵を待て合戦あるべき山評議あり、寂蓮法師關東下向の頃山中を過り歌を詠ぜし事、家集に見ゆ、建久中、曾我祐成兄弟弗戴の讎を報んと、足柄、箱根の兩路にて工藤祐經を狙へり、仁治三年、前河内守親行にも、山中を過りし事あり、阿弗が十六夜日記に、足柄山は道路迂遠なるを以て當處にかゝりし事を載す、正應二年九月、北條相模守貞時、久明親王を迎へんが爲、飯沼判官等をして上京せしむる時、先將軍維康親王の踰られし道、足柄山を避て箱根路にかゝりて上洛す。建久元年八月中、前代蜂起の時に、足利尊氏討手

さして下向、相模次郎時行の兵と箱根水飲峠又大崩にて合戦あり、平氏敗北す、又左馬頭直義箱根山に籠り水飲要害とせし事見ゆ、二年十二月、尊氏追討として新田左中將義貞下向の時、左馬頭直義箱根路を支へ、尊氏は足柄山を堅む、足柄搦手として、中務卿親王を奉じ脇屋左衛門佐義助等馳向ふ、箱根は大手にして、大將義貞一族等を將て押寄直義と合戦、義貞勝利を得たり、されど搦手の京勢敗北せしかば義貞遂に退陣す、應永二十三年十月、上杉禪秀の亂に鎌倉持氏山中に遁れ駿河國へ走る、永享十年九月、京鎌倉矛楯の時、持氏方の軍兵山中にて京勢と戦ふ、持氏滅亡の後、幼児春王、安王獲せられ此山を踰し事見ゆ、文明十二年、太田持資入道道灌上洛の時、山中を過て和歌を詠す、十八年、聖護院道興准后も箱根權現に詣て歌を吟す天文十四年、連歌師宗牧小田原に寓居せし頃、或曉山中の雪景を見て歌あり、山中東海道の官路、古より屢沿革ありて、今の道は大に違ひと見ゆれど、其慥なる事は今より知るべからず按ずるに、往昔は湯本村より湯坂を登り、城山の峰を通じ、西の方川端より箱根山の上を歴、蘆野湯へかゝり元箱根に出しとなり、今も山の頂には樵夫の細徑あり、其後又路革り、東海道權現坂より北に折、二子山の西麓より元賽河原にかゝり、姥子の邊より蘆湖の北涯をすぎ、夫

より豆州に出しにや、末詳ならず、中古此路も又革り、元箱根より社地をよぎり、蘆湖の東北涯に添、神宮山の麓を歴、前にいへる古道に合せしと見ゆ、然るに箱根新關の建しより、此路は禁止せられ、今の道を官路とせらる、蓋此時はじめて開かれしにはあらず、甲陽軍鑑、永祿十三年九月、武田信玄豆州韮山に働かし條に據げ、其既に徑路の往來はありしなり、今の如く大路を開き箱根宿を置れしは、元和四年の事にて、新關を建られしも大抵此頃の事なるべし。爾來此道東海道の官路にして、足柄越の道は全く間道となれり。

早 雲 寺

箱根七湯廻りの咽喉にあたる湯本温泉は、湯坂山(湯本から鷹巢、芦ノ湯をへて二子山の北面を通つて箱根權現へゆく道を湯坂道と云ふて、元和四年以前の驛路である。)麓にある。こゝは、箱根官道(須雲川)湯坂道、底倉道(早川に)の合點である。

早雲寺は、早川南方の丘上にある。玉簾の瀧を見てから、早雲寺へゆくをよしとする。

禪宗で、金湯山と號し、北條早雲の本願、大隆禪師の開基である。(舊名眞覺寺) 北條氏五代の墓、及び宗祇法師の墓がある。この寺の後園は、東山式の代表のものである。早雲とは北條氏の祖宗瑞の庵號であるが、其庵は須雲早川の邊なる地に置かれければ、地名によりて早雲の二字を撰びけるならんとの説もある。吉田博士云ふ

「宗祇は種玉庵芳蘭と號し、連歌に長ぜるを以て世に聞ゆ。文龜二年七月、此地にて卒す。終焉記を閱するに、遺骸は駿州桃園定輪寺に葬れば、當所の墳は終焉の遺蹟なるを以て建立せしならん」と。

早雲寺の東、舊官道と湯本道との分れ路、早川に架したのが、三枚橋で戊辰の亂、五月江戸脱走兵が、官軍の追撃軍と血戦した所である。新風土記云ふ。「此所より(三枚橋)西折、

温泉場への岐路ありて、橋邊茶舗軒を連ねて、湯本細工、及び米饅頭を賣れり云々」と。

猶湯本正眼寺中に、曾我堂あり、曾我兄弟の位牌を安んじてある。
湯本よりの里程

- | | | | |
|-----|--------|-----|--------|
| 塔の澤 | 五町 | 堂ヶ島 | 一里半 |
| 宮ノ下 | 一里半 | 底倉 | 一里二十二町 |
| 木賀 | 一里三十二町 | 小湧谷 | 二里 |
| 芦ノ湯 | 三里二十町 | 箱根驛 | 二里二十八町 |
| 姥子 | 四里二十二町 | 大湧谷 | 三里三十二町 |
| 乙女峠 | 四里二十町 | | |

阿彌陀寺

塔ノ澤温泉から十町を隔てた塔の峰の南半腹にある。淨土宗で、慶長年間大久保忠隣の

創建にかゝり、開基は彈誓上人である。本尊阿彌陀佛は、惠心僧都の作で、もと東京回向院の本尊であつたと云ひ傳へられてある。

碓氷峠

木賀温泉は、宮城野村早川の谷にある。この温泉に一滴して、仙石原に至り、日本武尊吾妻はやの舊蹟碓氷峠へ登つて、往時を追憶するは、最も望ましい所である。

日本武尊が「吾妻はや」の歌をよませ給ひし碓氷峠は、群馬長野兩縣の堺にある碓氷峠なりと信ぜられてゐたが、夫れは誤りであつて、正しくはこの箱根の碓氷峠である。詳しくは拙著、地理的日本歴史、富士と足柄を参照せられたい。箱根底倉蔦屋旅館主人は、高山園内に橋媛祠を建設した。左に、高山園主がものした建碑の山來をしるしておく。

弟橋媛が走水の海上で日本武尊の御身代りに荒波の中へ身投げ給へるは隠もない史實であつて、古事記には「自其入幸、渡走水海之時、其渡神興浪、廻船不得進渡爾其后名弟橋比賣命白

之、妾易御子而入海中、御子者所遣之政遂應覆奏、將入海時、以菅盞八重皮疊重繩疊八重敷于波上而、下坐其上、於是其暴浪自伏、御船得進、爾其后歌曰、佐賀牟能袁怒邏毛由流肥能、本那迦邏多知互、斗比斯岐美波母、故七日之後其后御櫛依于海邊、乃取其櫛作御陵而治置也」とある、日本書記には「亦進相模欲往上總望海高言曰、是小海耳、可立跳渡、乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩而不可渡、時有從王之妾、曰弟橋媛、穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪溢、王船欲沒、是必海神心也、願以妾之身、贖王之命而入海、言訖乃披瀾入海、暴風即止、船得著岸、故時人號其海曰馳水也」とある。二書の記事此段は大差がないから、従つて、記傳と通釋にも、彼此差違の辨も見うけない（唯記傳に「此の比賣命の事之妾と記されたるいか、下文には、次妃と記されたるは合はず、彼記の文法にては、妃と云ばかりの人を、妾とは云べきに非ればなり、后とは天皇の大御妻に限て申すことなるに記にかく申すは、此後建命は、帶中津日子天皇の大御父命に坐が故に萬を天皇に准へ奉れる例なり」とある外には而して記傳に弟橋比賣命御名儀、弟は游登と同じくて、美たる稱なり、橋は此の近き御世に當世の國より渡參來てめづらしく殊に世に賞る物なるに依て稱たる名なるべし」とあるが、實に比賣命の御行爲は畏多くも其の橋の香よりもいや芳ばしい次第で、詞人の句に芳橋千年久彌香と歌はれるのも敢て適當では

ない、そうであるから、さすが雄々しい尊も、御船が木更津に着くまで、小丘（此の縁山で
づくと）に攀ち登つて眼下の蒼海原を眺めながら、吾妻戀しと宣ふて久い間去り給はないで、
云ふ）木更津の名は、君不去）又御歸途には足柄の坂本山（實は近接）に登られて遙に走水海を望みな
（の轉訛したのだといふ）獨り尊が惜んで歎げき給ふたばかり
がら吾妻はやさ三歎し給ふたのである（東方を吾妻と呼ぶ）同じく三浦の走水でも、上總の長柄郡本納村でも、また
でなく、相模の梅澤（今の吾妻）でも、同じく三浦の走水でも、上總の長柄郡本納村でも、また
木更津の海岸でも吾妻大明神として祀られ、殊に、走水では、觀音の御像にさへ方取つて諸國
の往來ふ船が初穂を献つて海路を祈つたことも傳へられ、その他海寄の地で今なほ吾妻の海神と
して祀られ、又大君のためには水漬屍も辭まない海の益荒男に守護神として崇められるのは誠
に深い理由があることである（前記の相武野甲の御遺跡の條及び「高」園主は、今回高山園の
隣地山林千餘坪を新に購入して開拓したところ、其高地から西に當つて宮城野の碓氷峠が眺め
られ嘗て建てた吾妻者耶碑が手に取るやうに見え、又、東の方は、湯本の山峽を越えて湘海の
波立つて白乳の馳せるのを遙に一眸に收め得ること、なつたので、今から千七百有餘年の昔
ながらの尊と媛の御事蹟をば覺えず眼前に浮べて一種崇高の氣に打たれ忽ち地をトして一祠を

建て、媛の御功績をば尊の御偉業と共に永く此山に表はし奉ることとしたのである、但し海
に囚める御神をば山に祀るのは聊か方角違なりとの感を起す人もないことでもあるまいが、
如上の縁由あつてのことであるから敢て不可なき次第であると思ふ。もし夫れ當山の交通機關
が登山電車索條電車自動車自動艇（近き將來に於て航空機さへ）など年一年と増加發達するに
連れて、便利の増大に伴つて危険が増進することは自然の勢であるのに鑑みれば、無事安全を
希ふ念の生ずることが愈々切なる筈だから、之れが祈願をかける御神として媛の祠前に額づく
のは、強ち園主一人のみの發念ではなからうと思ふ。その祠傍に一碑を建て、その一面に
媛命の御名の橋はその近き世に常世の國より渡參來て殊にめぐらしくもてはやされたる物な
るに依りて稱へたる名なるべしといふ走水海浪高く御船得進まず媛は御子は所遣の政遂げて
覆奏したまふべしとて尊に代りてされさし相模の小野に燃ゆる火の焰中に立ちて問ひし君
はもさ歌ひて沈み給ふ嗚呼己か身を輕しみ國家を重しみ給ふ健氣の御覺悟又軍旅に艱苦を共
にし、夫君の身を案じたまふ今はの切なる御衷情千歳の久しきに渡りても橋の香よりいや
芳はしこそ申すべけれ尊は歸ります時甲斐の方へ此の山の碓氷峠を越えたまふに就きさす

がにありし媛の名残り思ほし出で、吾妻はやま三歎し給ひしは殊にあはれなる御意と申すべし此の地遙に尊の碑の建てる碓氷峠を見又遠く媛の沈み給へる湘海の烟波を望みて當年の御偉業髣髴として眼前に浮ぶ乃ちこゝに御祠を設けて媛を祭る兩神の御靈永しへに此の山に鎮座し給へさあなかしこ

と刻み、他の一面には田邊詩伯に詠詩揮毫を乞ふて

海若作崖彼何物躍身波間一代君被美人貞烈通神明一須叟波靜海似一颯一篇國風留一雍音一殺身成仁千古心吾媿已矣三歎息婦女龜鑑堪一仰欽一史上疑團碓氷嶺指顧歷々相甲境嶺頭回首呼欲應相水一碧波千頃高山園關溫泉鄉幾多史蹟供一發揚一主人好事更卜一地虔祀一橋媛一建一祠堂一海邊古廟稱一走水一山上新祠即底倉湘君廟畔淚班一竹鷓鴣數聲啼相返瀟湘惜別兒女情地下有靈合一愧怍一函山五月烟雨深杜鵑叫破橋花覆咫尺相對吾媿碑魂兮永在二連理木一

と刻み置いたが、園主が小學時代に懇切なる教訓を受けた舊師石上憲定翁（當時湘南藤澤在の西股野に閑日月を送ら）の詠歌をも別に一小碑に刻むこととしたのである。

海風に花たちはなは散りぬれど其香は高し箱根路の山

太閤風呂

底倉溫泉高山園の山麓蛇骨川の左崖下に存する自然の洞窟を土地の人は太閤風呂と呼んでゐる。古くは頼光風呂とも呼ばれてゐた。天正十八年豊太閤小田原征伐のみぎり、この石風呂に浴して、陣中大いに閑日月あるを示したのである。依田學海翁云ふ、

「蛇骨溪に沿ひて上る、崖壁の凹みたる處溫泉出づ。相傳ふ、豊太閤小田原を征し、營を函山に置くや、一日此を見て、命じて石を研り槽を作らしめて之に浴し、士卒をして縦まゝに澡せしめ、以て其勞を慰し、呼んで石風呂と曰ひたりと。今廢す。嗚呼豊公は一世の英傑にして、宇宙を併呑するの概ありき。山河震動し、魑魅爲めに驚き、旌旗榮戦、湖壑に輝映せり。盛なりと謂ふべき哉。今其駐跡を見るに、瀑響樹聲、蟬語鳥音、人をして愴然たらしむ。富貴榮華の恃むに足らざること此の如し」

又この底倉には、伊達政宗が、太閤の爲めに一時幽せられし時の、屋敷跡もある。今舊

地は明かでないが、高山園内であることは云ふ迄もない。又高山園内には鬯仇討碑もある。「此邊は山家ゆゑ、紅葉の有に雪が降と、いふ淨瑠瑠の文句によりて、人口に膾炙せる鬯仇討の實録を按ずるに、飯沼勝五郎、始め大阪に住み、父三左衛門の仇、佐藤兄弟を尋ねて仙臺に至り、伊達藩士の娘、初花の掣となり、其後、俱に仇を出羽より越後路に追ひ、遇々疾んで足蹇となり、一旦大阪に還りて、更に東海道を下りて當山に登り、勝五郎は温泉に浴して病を養ひ、初花は神佛に祈誓をかけ、堂ヶ島の白絲瀧に打たれ垢離に清めて待ちたるに、靈験やありけん、勝五郎の足も自ら立ち又仇の瀧口と變名して、最上侯に扈して、當山を越ゆる事を探り知り、夫妻相助け終に之れを討取りしは、實に慶長四年八月廿四日なり、初花の當時、祈願せしと傳ふる車地藏の近頃、宮の下より掘り出さるゝあり、又高山園既に政宗侯の遺蹟の存するあれば、今其崖下に懸れる飛瀑に、侯の家臣の仇討に因みある白絲の名を附して以て、世の好事家の一祭に供すと云爾。

芦ノ湯

二子山、駒ヶ岳の間なる峡谷にある。元箱根の北半里。硫黄泉で、臭氣甚だ強いが、地勢海拔二千七百六十尺の高地を占めてゐるので、夏猶暑さしらすの地である。元和以前の官道はこゝを通つてゐた。

北の方湯ノ花澤へゆくみちに笛塚、箱根町へゆく途中に、曾我兄弟及び虎御前の碑、多田滿仲の墓がある。旅情をそゝること大である。

箱根神社

二子山八丁坂の下は、元箱根の宿である。元箱根の宿に、箱根神社がたゞせ給ふ。權現堂又は權現社とも云ひ、當國屈指の古祠である。神祇志料云、「天平寶字元年、僧滿願、夢に三神の告あるを以て、靈廟を設け、三客を一社に崇め奉り、箱根三所權現と云ふ」神社

考云ふ、「伊豆箱根者、本社彦火々出見尊也云々」と。鎌倉幕府の時、崇敬大いに加はり伊豆の走湯権現と共に修法持験の壇場であつた。戦國をへて漸く衰へた。維新後神佛分離せしより、大いに衰へ、別當寺たる東福寺も今は名のみとなつてしまつた。延年樂譜云ふ、

「草創の來曆を尋ねれば、聖武天皇の御宇、吉備大臣始めて建立、中古に至れば孝謙天皇の御世、萬卷上人に成しより以來、扶桑せいしゆ、百濟権現の徳例、いよく遂かに備り、後の喜悅甚深し云々」

思ふに、箱根権現は、神佛道の三教調合の靈場であつたのである。

「此程の口數待れてけふ既に、鎌倉殿の御參詣。是を物見と此寺の、老若の衆徒見わらは、數を盡して我もくさ皆面々に誘へば(調伏曾我)」

源家全盛時代に於ける。當社の繁盛は、全く我らの想像以上であつた。

箱根の古驛

芦ノ湖の東南岸で、東海道五十三次の一驛である。三島から登れば、水飲を経て時に達し、稍下つて、この宿に入るのである。小田原よりすれば、湯本に出で須雲川に沿ひ畑、須雲と二つの里をすぎ、關所をへてこの宿所へ入るのである。町の東を小田原町西を三島町と云ふも昔がしのばれる。東海道に鐵路開けて以來昔の面影を失つたが、今では避暑地として僅かに山の町としての體面を保つてをる。芦ノ湖の舟遊は一興である。

三島宿迄三里二十八町、山中、笹原、三ツ屋の三立場がある。小田原へも三島とほど同程である。

近世幕府が設けた箱根關址は、元箱根から箱根關へゆく途中の湖岸にある。小田原藩の警衛に屬してゐた。江戸幕府は、足柄路を塞ぎ、箱根を以て公私の往來に供し、行人を關所に於いて嚴重に取締つた。舊幕府以前にも、箱根に關所を設けたことはあつたが、云ふ

迄もなく位置は遠ふのである。吉田博士云ふ「康暦二年文書、箱根芦川宿（註「大體今」の箱根町）の邊に關をおき其役錢を鎌倉圓覺寺修理の料にあつること見ゆ、應永十三年六月の文書に、箱根山水飲關所のことを載す。この頃は、水飲にも一關ありしならん云々」と。
十六夜日記云ふ

「伊豆のこふを出て、箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ

たまくしげ箱根の山をいそげども

猶あけ難き横雲の空

足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなり、

ゆかしさよそなたの雲をそばたてゝ

よそになしぬる足柄の山

東北本線

道 灌 山

▲田端驛の上にある。市内電車なれば動坂線肴町下車。

道灌山は、谷中の臺から北につゞける丘で、昔は四時遊人集り、愛すべきの境であつたが、今は附近が俗化したので昔の面影はない。この地は太田道灌の築砦とも又は關道閑の屋敷跡とも云はれてをるが、何れとも判然しない。諏訪社は昔太田道灌の邸内に崇めたものだと云はれてゐる。江戸砂子に「社地に腰掛石あり、此邊田園遙かに開け、荒川帯の如く、行かふ白帆連なり、筑波、黒髪の山々遠く畫き出せるが如しと見えてをる。

西ヶ原の貝塚

▲田端驛下車。集鴨電車集鴨終點より七町餘。

飛鳥山東南につゞける岡で、農事試験場がある。舊幕の頃には、御殿山と云ひ遊觀の地であつた。

この地に有名な貝塚があり人類學上頗る著名である。生蓮寺を隔て、南方の低池は、太古東京灣の一支灣であつたのである。

尾久の石尊

▲田端驛下車七町。王子電車下尾久停留場下車。

王子の東、荒川の岸邊で、今では、遊園地が出来てゐる。この地に、有名な尾久石尊があり、俗信の的となつてゐる。今では、立派な堂宇があるが、嘗ては、巨石の周りに、形

ばかりの柵がめぐらされてゐたのみであつた。この石尊は、相州大山石尊と關係あるものであつて、生殖器崇拜のあらはれである。今でも石尊講と云ふものがあつて、年六回宛寄り合つて、出世石尊大権現の掛軸を拜んでゐる。石尊は地上高さ約一メートル許ある二基の自然石風の巨石である。當社の由來は、

抑出世石尊権現之由來を尋奉るに曆應の古へふしぎなるかなこの地おりく震動いたし龍燈夜々に立のぼり里人あやしきおもひ茅野を別て尋ねければ頭異形なる地より二尺ばかり生立しを見付是を即石尊と唱え置其後太田道灌の下臣高木隼人は六十一歳の時釋子門に入僧名高木灌敬と名乗常に佛神を敬拜し信心堅固の人なればかの入道へ靈夢につけて曰く我はこれ大悲薩埵の應化にして地より涌出し石尊なりもろくの衆生災難病苦をすくひ出世の衆生を守護し變女男子爲に地よ梨出現し給ふと御告を蒙り即灌教入道彼地をたづね見禮ば地より二尺斗り出し頭異形なる石二ツあり一ツは獨古の如く一ツは三古に似たり灌教入道これを拜して即大慈大悲の唾跡なるべしと信じ奉りて彼石のうし路へ一樹の木を植注連を引即出世石尊大権現と勸請奉り

二間四面玉垣を作り奉りければかんのふ利益の多かりければ愈灌教入道敬し里人鎮守と拜し奉り其御社より南に當り蓮華寺と申一字有り本尊は阿遮夢明王なり此尊像は良辨僧都の作にしてあらたかなる尊像なり此寺即出世石尊別當にしてそれより阿遮夢山蓮華寺阿遮院と號し遺所無双の靈神靈佛堂なり誰人か敬せざらんや。

武藏豊島郡下尾久村

別元祿二年己二月

別當

阿遮院

飛鳥山

▲王子驛下車、又は市内電車大塚終點から王子電車に乗り替へてゆく。

王子神社と石神井川を隔て、其東南に當る山丘で、今では公園となつてゐる、舊幕府時代以來江戸趣味の一である、飛鳥山と云ふ名は、元享年間豊島左衛門が、山上に飛鳥の祠を建てたからである。櫻の名所となつたのは、元文の頃八代將軍がこの山に櫻花を植ゑ

てからである。

王子神社は、元享年間に、當所の豪族豊島氏が紀州熊野權現に模倣して、伊弉册、速玉之男、泉津事能男命を祭つたに起因する。又王子稻荷は天正年間王子神社の別當を勤めてゐた宥養上人が、倉稻魂命を祀つたに始まる。又この程近くに瀧ノ川がある。都下屈指の紅葉の名所で、金剛寺には、近藤重藏の自像がある。重藏は云ふ迄もなく、有名な蝦夷探検家である。

静勝寺

▲赤羽驛下車數町。

静勝寺は、曹洞宗の巨刹であつたが、今は衰へて舊態を存しない。古くから道灌入道が築ける静勝軒の遺址だと云はれてゐるが、夫れは明かでない。

寺傳には、「當所は太田左衛門太夫資長、城壘を築きし舊址なりしを、六世の孫備中守

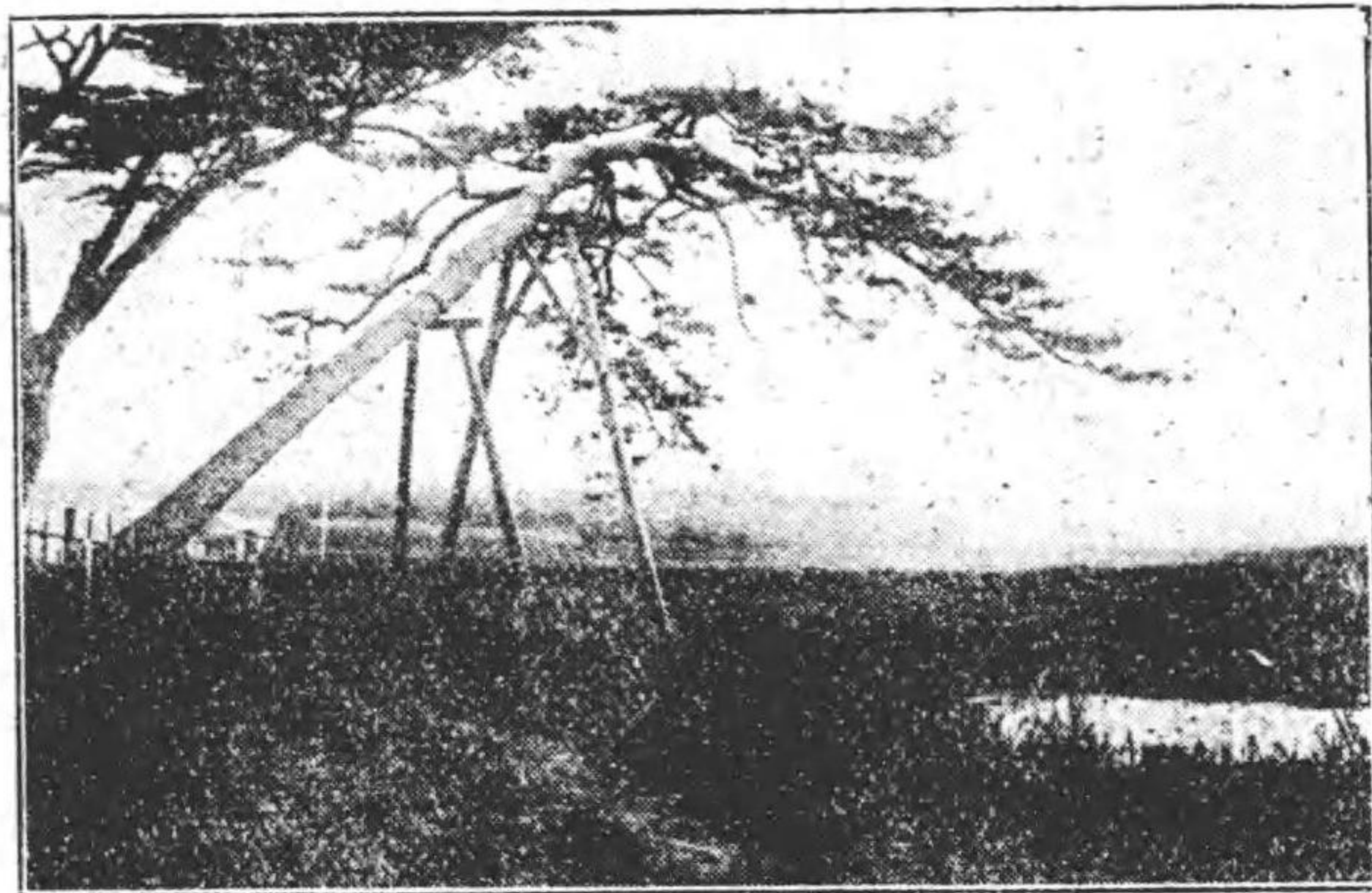
資清の法燈に取つて、自得山靜勝寺と改む」と見えてゐる。

大宮氷川神社

▲大宮驛から七町餘。大宮は、徳川時代中仙道六十七驛中の一の天領地であつた。今も猶、埼玉縣に於ける繁華の市邑である。大宮の名は、氷川神社と關係のあることを忘れてはならない。

昔は、武藏の一ノ宮で、今は宮幣大社、素盞鳴尊、大己貴尊、奇稻田命の三神を祀つてある、明治十七年以來祠邊の地は公園となつた。今猶園中から往々太古の土器破片を發見する。

神祇志料云ふ「氷川神社は今大宮驛の高鼻郷に在り、大社と云ふ」と。三代實錄云ふ「延喜式、名神大に列す。蓋大己貴命、素盞鳴命、奇稻田姫を祠る」と。神まうで云ふ。



大宮氷川公園松

祭神は須佐之男命、大己貴命、稻田妃の三座で、孝昭天皇の御代の創建だと傳へて居る。日本武尊の東夷征伐の折は、この社に征虜降伏の祈願をこめられた。源頼朝鎌倉幕府創設以來は、武門の崇敬が厚かつたが、明治天皇東京御遷幸の後、先づこの社に行幸あり勅を下して當國の鎮守、勅祭の御社と定められたので、神威いよくあらたかになつたのである。

社境は老樹鬱蒼として池沼あり、其あたり櫻が多い、今拓いて氷川公園として居る。社殿は明治年間の建設である。例祭は八月一日で東遊の御奉納がある、十二月十日の大湯祭は最も賑かな日

ある。

浦和をたゞせ給へり、大宮驛より遙に氷川神社を拜みて過ぎぬ、主上は此宮に詣でさせたまへり、あしたの程いたくかきくもりし空の晴れ渡りけるを悦びて、高崎正風

天つたふ氷川の神やまもろらん雨さなるべき空のはれたる

此御社は武蔵國の一宮におはしまして、西京の賀茂になすらへられたる官幣大社なればぬやまひあがめたまへるなりけり、御幣奉りたまふほど、神饌を供し、樂を奏しなどして、おこそかなる式どもありけり。

「近藤芳樹著陸路廻記」

大宮町字堀ノ内に高さ一丈餘、徑り七八間の塚がある。これ有名な黒塚で、これについて面白い物語りがある。

「この黒塚は昔三沼新田ならざる頃、大宮の神主、彼の宮にゐる鷹鳴等を取んとて、人の見とがめんことを恐れて、夜な夜な鬼面を被りて驚かし、その際にかの鳥をとりしが鬼出づると云ひふらし、果は奥羽安達郡の黒塚に擬して、黒塚と唱へ始めしとぞ」

と。元より牽強附會なれども、里俗の言としては面白い。

熊澤蕃山墓

▲古河驛の南二十九町。

古河は下總猿島郡の名邑で、渡良瀬川の流に臨み、陸羽街道の要衝であつた。室町時代には、古河公方のゐた所である。今では桃村をもつて有名である。土井氏八萬石の舊城邑は、今僅かに岩壘深塹を存するのみである。

蕃山の墓は、鮭延寺にある。寺には、こんな傳説がある。昔最上氏が、國を除かれた時其臣鮭延御前と云ふ人古河に落ちて祿千石を得た。然るに彼れはこれを自家の舊臣十人に分ち與へて、自らはその十家に輪寓寄食して世を終つた。そこで、その遺骸を埋めてこゝに寺を建て鮭延寺と號したのであると。又この附近に靜御前の思案橋なるものがある、蕃

山は、中山藤樹門の高弟で、備前侯に仕へ、後幡州明石の松平家に仕へ、松平氏が古河へ轉封せらるゝや、蕃山又それに従つたのである。その後蕃山の上表は、あまりに時代を超越した爲めに、幕府の忌避に觸れ、古河城内に禁錮せられて、元祿四年八月十七日、年七十三歳を以て歿した。

小山城址

▲小山驛の北六町、忍川の西岸にある。忍川は鮎獵の名所である。

小山は、舊奥羽街道の要衝に境り、市街年を追ふて繁盛の境に赴く。城は、保元平治年間下野大掾小四郎政考の築く所で、元暦三年管領足利満氏の爲めに亡ぼされた。かの關ヶ原の一戦に際しては、家康が、上杉景勝を征する爲め東下して此城にある時、石田三成のことをあげたるを聞いて旗を旋したことは史上著名の事實である。

城墟の南六町に、須賀神社(祇園)がある。地の舊家小山氏の守護神で、什寶の器具古文

書等が多い。この邊歴史の跡に富んでゐる。杖を曳くべきである。

國分寺址

▲小金井驛の西一里。

今は、僅かに、眞言宗の小坊舎を存するのみであるが、古へは當國(野)國分寺で、總州一國に權勢を振舞つたのである。東鑑文治二年五月二十九日國分寺及び尼寺顛倒のことが見えてるが如く、文治年間に、舊態を失つたのである。

薬師寺址

▲驛の東北一里。

寺は、天武天皇の御宇の造營で、海内屈指の靈場であつたが、後世は廢絶して、今では僅か龍興院を存するのみである。今も猶、往々田疇の間を探れば、薬師寺の文字鮮やかな

古瓦を拾ふことがあると云ふことである。往昔弓削道鏡がこの地に貶せられたことは有名な話して、今も猶その墓が存してある。

室の八島

▲小金井驛の西方三十餘町。

小金井驛の西方に總社と云ふ所がある。こゝに大神神社がある。古へ總社六所明神又は室の明神と云ひ、下總國の總社であつた。社域内に當國の驛枕室の八島がある。

上野國志に曰「室の八島は總社村にあり。その隣郷に國分村ありて、古へは總社村も國府の分郷なり。その地に清水といふ所あり。また煙村といふも並びてあり、もと煙の立ちし所なり。さて袖中抄に下野國野中に島あり、俗に室のやしまとぞいふ。室は土地の名かその野中に清水の出る氣の立てるは煙に似たるなり」。古歌あまたあり、茲にはその二三を録す。詞花集實方「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」新古今集

濱輔「朝がすみふかく見ゆるや煙たつ室の八島の渡りなるらむ」。芭蕉の奥の細道に記して曰く、室の八島に詣づ。同行曾良に曰く、この神は木花咲耶姬と申して、富士一體なり。無戸室に入りて、焼き給ふ、誓ひの眞中に、火々出見尊生れ給ひしより、室の八島と申す。また、煙りを咏みならはせ侍るも、このいはれなり。將た、つなしといふ魚を禁す。縁起のむね、世に傳ふることも侍りし」。

宇都宮城址

▲宇都宮市は戸田氏七萬石の舊城址で、古來奥羽に通ずる要路であつた。町の發達の由來を考へれば、城下町で、文祿以後繁盛を見たのである。

市中名勝廻遊自動車貸切、金五圓である。二荒山神社―城址―清巖寺―桂林寺(蒲生君平の墓がある)―蒲生神社を自動車で一巡し

うるのである。又廻遊俵賃八十錢であるから、市況をも合せ見るには、反つて俵の方が好都合であらふ。

城址は、市街の南にあり。今公園となつてゐる。康平年中宇都宮宗圓始めて之を築き、子孫累世之に住したと云はれてゐる、宇都宮氏は、上古二荒神の神裔で、後武士となつたのである。戦國の際には、阪東四箇の名城の一と云はれた。宇都宮氏は、慶長二年に豊太閤の爲めに城を奪はれた。其後浅野・蒲生、奥平、本多、松平、阿部の諸氏をへて、維新前は戸田氏の有であつた。明治戊辰の役には、賊軍猖獗、この城を陥れ、藩主従跣して城をのがれた。

猶宇都宮釣天井の事蹟は、普く人口に膾炙してゐることなれば、今は略しておく。

二荒山神社

▲宇都宮驛の西十五町。

宇都宮市中、白ヶ峰にある。下野國の一ノ宮で、宇都宮大明神の名を以て古來其名あらはれてゐた。當國無双の古祠なれば、藤原秀郷、源頼義、同義家皆當社に祈請をこめたことがあつた。祭神は、東國經路の偉功ある崇神天皇の皇子豊城入彦の命である。

下野國志に曰「この神體を和漢三才圖會には柿本人麿と記せり。是は當社の室庫に古き人麿の畫像あれば、それをやがて神體なりと思ひ違へし非事なるべし。元來、二荒の大神は人皇第十代、崇神天皇の皇子豊城入彦命を祝ひ奉れる所にして、神體は乃ち其御遺骸なりとぞ。もし、また承和五年に日光より移したる社ならば延喜式を撰定せし時にはいまだ七十年許以前の社にて、いと新らしき社なれば神名帳に加入すべき謂なし。彼延喜式も其時始めて撰定せしものにはあらで、上代の規矩を更にあらため糺されしものなり」。八部大祓、本居宣長の古事記傳等にも豊城入彦命を祭ると記せり。新和歌集に權律師謙忠の歌あり。曰く「東路やおほくのゑびすたひらげてそむけばうつ宮とこそきけ」。又道興准后の社頭に奉納したる發句あり、「ちらぬまはあらしや花の宮木もり」

古峰ヶ原神社

▲日光線鹿沼驛の西七里。馬車の便がある(一圓八十錢)。

日本武尊やまとたけるのみことを祠り、古來修驗道場の靈地れいちとして知られてゐる。今も猶、夏期登山者が多し。神社に一泊はくして翌日足尾へ出るも面白い。僅かに三里半だ。しかも其一里は馬車が通つてゐる。

日光

▲日光の一區は、本邦山水美さんすゐびの鍾かねまる所、それに加ふるに殿堂樓閣の美あり。自然しぜんの秀麗と人工の精華しゅくわと相俟つて、海内無双の地と云はれてゐる。遊覽いうらんの順序は、日光廟—霧降瀧—裏見瀧—清瀧—中禪寺—湯本—西澤、日光名物漆器、羊羹挽物細工、唐辛、旅館

小西、神山、神橋館、古橋、上州屋、中野屋、金谷ホテル、中禪寺旅館、萬屋、米屋、和泉屋、レーキサイドホテル、湯本旅、南間ホテル、釜屋、板屋、米屋。

電車、自動車の便備はり、交通には遺憾がない。

日光は、又二荒に作る。舊訓はフタラである。もと、此山は、二荒神がうしはけるを延暦年中僧勝道登攀して神宮寺じんぐうじをたて、記文を僧空海そうかいに依頼した。空海決諾以て補陀洛山記を作つた。補陀洛は經説によれば觀音淨土くわんのんじやうどである。已にして、山神の二荒をニクワウと云ひ、經説の日光佛にっこうぶつに附會ふくわいしたのである。

勝道山人の登攀以來、この地は、佛教の占有せんいうにきした。今の鉢石町(驛のあ)は、寺社門前町として起つたのである。其後いろくの變遷へんせんはあるけれ共、其名が海内に鳴り響ひびくに至るのは、元和寛永の際に、徳川氏とくがはしが廟堂を起して以來である。日光廟にっこうべうあるが故にこそ徳川氏は日光街道を重かさんじたのである。

○元和三年天海大僧正勅を奉じて家康公の遺骸を駿河の久能山より當山内に遷し東照大権現と崇む、前年秋幕府の委囑により天海僧正萬般を指揮して神廟を佛岩山に造營し大樂院を創立して東照宮別當とし専ら同社の祭司たらしむ、又勅を奉じて構内に藥師堂を新建す（東照廟を當山に移す）。

○正保二年十一月東照廟に勅して宮號を賜ひ翌年より毎年特に奉幣使を遣さる是を例幣使と云ふ（人臣にして宮號を賜はつたのは外にない）。

○慶安四年四月廿日三代將軍家光公薨す、同五月六日山内字大黒山に埋葬し勅して大猷院と稱し勅額を下し賜ふ此時龍光院を創建して是が別當所となし廟務に任ず、

○承應三年公海大僧正寺務を辭し一品守澄法親王（後水尾帝第三皇子）其後を繼ぎて貫主に任じ日光山門主として東叡山寛永寺を兼董し且つ天台一宗を管領せらる、同年特に詔して日光門室を改めて輪王寺宮と賜ふ。

○明治元年十月門主公現法親王（北白川宮能久親王殿下）勅詔により御生家伏見宮へ御復歸、同年十一月輪王寺の稱號並に日光東叡の本山號を廢止せらる。

○明治四年一月八日日光縣より當山神佛分離社寺廢立の處置を達せらる（曰く社寺其他を區分して僧侶の神勸を停止し神社に屬するものは都て舊社家に各僧侶は皆舊本坊の一寺に合併して院坊區々の稱號を廢し單に滿願寺の號を用ゐ且つ神地内に在る堂塔は悉く滿願寺附屬地へ移遷す可しと）、茲に至つて新宮を二荒山神社と改稱して本宮瀧尾中禪寺及連峰祭祀の諸社悉く之に屬し東照廟も權現廟を廢し單に東照宮と唱へて俱に社家の司配する所となり廣く寺中に散在せる數十の佛堂は皆滿願寺に屬し渾て舊本坊に合併し各院各坊の稱號を廢し其寺地は奉還して百拾ヶ寺僅かに滿願寺の一寺となる、同年五月滿願寺自火燒す（六年再建す）。

○同九年六月明治天皇當山へ臨幸滿願寺を以つて行在所とせられ兩日三夜御駐蹕、同八月御手元金三千圓を賜り三佛堂移遷舊觀を失はされこの恩命を蒙る。

○同十三年十一月中宮祠境内立木觀音堂妙見堂東照宮境内の藥師堂輪藏五重塔深砂王堂瀧尾境内の彌陀堂千手堂皆堂内に於いて舊の如く佛事執行を許可せらる、同十四年十一月三佛堂遷地造營落成。

○明治十六年十月五日本坊輪王寺舊號復稱許可、本坊を舊の如く單に輪王寺と稱し十五ヶ院輪王

寺々中と稱す又満願寺の號も千古の舊稱なれば當山寺院の總號として存す。

○同十八年一月輪王寺を特に別院の地位に列し同十二月跡號の公稱を許可せらる。

○同二十五年四月天台座主より特に寺中十五ヶ院を比叡山各坊と同一寺格に昇班せらる。(日光の栞)

(1) 鉢石 大谷川の南岸にあり、日光の驛市である。古くは坂本と呼ばれ寺社門前町であつた。徳川氏が廟祠を起して以來繁盛の地となつた。日光巡拜圖志云ふ。

「鉢石町の入口、左の方に小き番屋有て參詣の者の國を尋ねしるす。是は坊より置所にて、おのゝ其國の坊あり。みだりに他家に止宿いたさせまじき爲なりと。但し江戸者はいづれにても心次第なりとぞ。御宮の石鳥居の邊に、御番所あり。旅宿客參詣の時、宿主より輪番の社僧に胡亂ならざる客のよしいひ入れ社僧より手形を取つて、御門番に見せしめて後通行す」

と。今では日光御廟の參觀も金さへ出せばよいのであるが、昔は中々面倒な手つゞき

があつたのである。

(2) 星ノ宮 町の西端、神橋の邊の丘上にある。一に妙見宮と云ひ、星辰を祭る。開山勝道山人の置く所である。

(3) 山菅橋 通例神橋(訓美)と云はれ、大谷川の激湍に架し、廟寺に入る第一阻である。神橋の名は比較的新しいが、ヤマスゲと云ふ名は、頗る古く、枕草子に、「山菅の橋は名をきゝたるおかし」と出てゐる。

(4) 東照宮 神橋より左へ長坂を登り、二町許にして、中山に至る。右に輪王寺(御本)あり、正面は、別格官幣社東照宮である。祭神は徳川家康である。家康駿府に薨せし時一時駿州久能山に葬り、後遺命に依つて當山に改葬したのである。現在の社殿に寛永年間に三代將軍家光が、天下の諸侯から費を徴し、當時の良臣名工を一山に集め、十數年の星霜を費して落成したものである。所謂權現造りの模範的のものである。(神領は秀忠の時五千石、家光に至つて一萬石となる) 古へは別當僧、並に奉行の吏ありて、輪王寺門跡を奉じて

眞俗の所分をなした。例祭は毎年四月九月の兩度に行ひ、四月を特に御本祭と稱して重要な神事となつてゐた。幕府は毎年奉幣使を出し(四)月、將軍家も親しく本社に參詣せられた。

拜觀順序

東照宮の大鳥居(高さ二丈七尺六寸)をくぐると、銅葺總朱塗の表門に達する。(石華居は黒田は酒井忠勝の)之より石段を進むと三神庫があり、次ぎは素木造りの厩である。(欄間に三正の猿を彫つてある) 更らに唐銅の小鳥居を過ぎると、通路左右に、南蠻鐵の燈籠、飛もの越の獅子、或は蓮燈籠などが立つてゐる。燈籠の數百八十基何れも、研究に値するもののみである。

少しくすゝめば、陽明門、其美、其麗、筆紙のよくすべき所ではない。一に日暮門とも云はれてゐる。舊幕の頃には庶人の門内に入るを許されなかつた。

「構造は兩妻入母屋四方軒唐破風造二重扇垂木銅葺の樓門で四方の軒先に金鈴を釣し

高三丈七尺桁行京間三間三尺八寸梁間二間半高さ三丈七尺、正面に掲げられた額の神號は後水尾帝の御宸筆で文字は純金で造り外は紺青で填めてある、組物は上下共に唐様二手先詰組、破風下虹梁上の彫物は牝牡の麒麟、上層尾垂木の端は呵呷の龍頭、四隅には雲龍の彫物で皆金箔に活彩色を施してある、梁鼻は上層正面は俗にタイバと稱する龍頭馬蹄の獸下層は獅子頭で何れも白塗で上層中央の頭貫の面にある白龍は目貫の龍と稱する、周囲の勾欄には唐獅子の丸彫、下の組物毎に牡丹に唐獅子の彫物を組出し勾欄の下組物の間々には周公旦聽訴を首め孔子顔回、琴棋書畫、四時三管八仙四睡其他高士仙客數十人を彫刻してある、柱は十二本皆樺の圓柱で白塗にし雲紋の地彫に所々散しの圓紋を置き内に鳥獸草花を彫つた木理の虎と稱するのがある、又裏側の一木は雲紋が彫つてあり是を魔除の柱と稱へる、中通天井の墨繪の昇龍降龍は探幽の筆で彫實である。表の腰間には極彩色の隨神を裏には金色の狛狗を置き天井には天人を描いてある、(費現五十八萬七千餘圓)左右に二間宛の袖塀があり、袖塀に續いて左口

に廻廊が連つてゐる、表は朱塗裏は辨柄塗で上長押頭貫臺輪丸桁墓股等悉く極彩色で長さ百二十間餘、背後表面の大彫刻は悉く彩色を施し美觀を極む、胴羽目の彫刻は松竹梅鳳凰孔雀金鶏等、蹴込は鶴鷹鴨鴛鴦鴛鴦等で欄間は雲形、精巧美麗唯驚嘆の外ない

(日光遊覽)

門を入れば、唐門(桁行一丈、梁間六尺)がある。唐門を出ると拜殿である。拜殿は、桁行七間五尺餘、梁門六間、高さ四丈五尺餘、建築、美術の精妙をつくしてゐる。拜殿と接して本殿がある。通常公開はしないが、金五圓を納めれば、拜觀することが出来る。

拜殿を辭し、唐門を出て左に數町、奥ノ院の入口に、猫門がある。上に左甚五郎の睡猫が彫つてある。之より約二町、二百四段の石燈を登ると奥ノ院で、殿後の寶塔は即ち東照宮家康の遺骨を納むる墳墓である。奥社は、舊幕の頃には、貴賤を問はず拜觀を許されなかつたのである。

(5) 輪王寺 日光門跡又御本坊と云はれ、日光山諸佛道場の總轄である。元は四本龍寺又滿願寺と云ふたが、御親王門跡となりし以來は、専ら輪王寺と稱した、往時は二十六院八十坊と唱へても、今は十二坊六院を有するのみである。境内に本坊と三佛堂との二建物がある。三佛堂は、當山第一の巨殿で、慶安元年、之を日光新宮の東に建てられた。明治十四年に、移轉して今の地に置かれた。南向兩妻入母屋、桁十七間梁十間五尺、棟高八丈五尺。

(6) 二荒山神社、大同三年に勝道上人が、二荒山神を鎮祭せられたのが始めて、下野國の一宮として、中世以降、神殿佛宇の壯麗一山に鳴つてゐた。維新前は日光新宮、滿願權現とも呼ばれてゐたが、維新後國幣中社に列し、今の名に改められた。本殿と拜殿とは、特別保護建造物となつてゐる。本殿を廻る瑞籬の西南隅に化燈籠がある。鹿沼氏の奉納したもので、化けて人に斬られたと云ひ傳へられてゐる。奥宮は二荒山頂に、中宮祠は中禪寺湖畔に鎮座してゐる。

(7) 大猷廟 三代將軍家光公の廟墓である。東照宮を御宮と云ふに對し、御靈屋と云ふてゐる。東照宮よりも地勢高く幽趣に富んでゐる。山誌云ふ。二王門、御手洗屋、寶庫二天門、夜叉門、鐘樓、鼓樓、唐門、本殿、拜殿、皇嘉門、奥ノ院は寶塔にして山上にあり」と。二天門にかゝげられた「大猷院」三字の額は後光明帝の宸翰である。日光廟の拜觀料は、一人九十錢、東照宮、大猷院、二荒山神社、及び輪王寺等を拜觀する、こゝが出来る。寶物拜觀料は一ヶ所十錢と云ふ定めである。又案内人の料金は四十錢である。靈廟開閉の時は、

自四月一日至九月末日

自午前八時至午後四時

自十月一日至三月末日

自午前九時至午後四時

拜觀に要する時間は、二時間半乃至三時間である。

(8) 瀧尾 神橋の北西十八町ばかりの所である。白糸瀧の丘に當り、中宮別所と稱し、樓門、女體宮、不動堂、本地堂、經堂、千手堂、別所堂等がある。この瀧ノ尾は、他

の本宮中宮と離れて一區をなし、空海大師の開創と稱せられてゐる。

神橋より中禪寺湖に至る間に、含滿が淵、田母澤御用邸、妙道院址(天海僧正の建立で、今は釋迦堂を存するのみ。傍らに三代將軍に殉じて割腹した堀田正盛以下の墓がある)、寂光(弘法大師の開基、明治十年野火の爲め焼けて今は一若王寺を残すのみ。)

寂光瀧、清瀧觀音、般若の瀧、方等の瀧、華嚴の瀧等は一見すべきである。(五郎兵衛華嚴瀧に至る道は、星野五郎平翁が開鑿したのである。)

(9) 中宮祠 中禪寺湖邊一帯の名稱で、古くは中禪寺と唱へてゐたが、神佛分離に際して中宮祠と改められた。湖畔に二荒山神社



居鳥の祠宮中畔湖寺禪中

中宮祠がある。今の社務所は、舊別所で、補陀洛山神宮寺(法號を中禪寺と云ひ、勝道上人の創設であつた。)の舊址である。本殿の右、木戸門は、登拜口又は禪定口と唱へて男體の登山道である。中宮祠から戦場が原をへて、湯本温泉迄三里、温泉は海拔五千尺の地で、夏猶暑さ知らずの地である。一度は杖を曳くべき所ぞかし。

足尾銅山

▲今では、足尾銅山迄汽車にのつてゆくことが出来るが、昔は日光細尾から徒歩でゆくを普通とした。

中禪寺湖畔から、アセカタ峠をこえて足尾へ入るも面白い。

足尾は、渡良瀬川溪谷に沿ふた鑛山町で、銅を産するを以て其名海内に鳴り轟いてゐる。往古銅銀を盛んに出した頃は繁盛してゐたが、延享以後衰頽し、維新當時は戸數僅かに三百に過ぎなかつた。然るに維新後、其業更らに復活し、今では、山中の都邑となつた。製

銅額の増加するにつれて、噴烟のため、附近の山々峯々の樹木は皆枯れて、荒涼たるありさまとなつた。足尾町から四里、庚中山へ登つて、奇巖怪石、造化の妙を味ふも面白い。

最近下野電鐵の開業により、日光線今市から、大瀧温泉、川治温泉へ容易くゆくことが出来るやうになつた。日光遊覽の歸途温泉に浴するも時にまつての一興である。

那須國造碑

▲西那須野驛下車、東野鐵道にて黒羽迄ゆく。黒羽の南一里に那須國造碑がある。

湯津上村にある。太田原町(近世太田原氏の城下)の東南に當る。(湯津上の原義は石神である)

碑は文武天皇四年庚子歲所造の古碑で、本邦現存有文の古碑の中、第一の舊物である。歴史に興味を有する程の人は、一度は是非共見學をしなければならぬ。元祿年間、水戸光國公、亭を置き、保護を加へられてより幽光始めて光りを發したのである。國造碑の附

近に、瓢形ひょうがたの古墳二つある。俗に車塚と云はれてゐる。國誌こくし云ふ「那須國造碑を、土俗には笠石と呼ならはしたり。扁石へんせきをくぼめて、笠の如くに、此碑の上にかぶらせたり。故にしか云ふなり。高さ今の曲尺にて四尺ばかりあり。石は石工いしこうの云ふ御影にて、正面は砥の如く磨きて、左右其外は自然石しぜんせきなり。碑文は一行十九字づゝ八行にて百五十二字あり。此碑天和の始め迄は、草むらの中に倒れふして、知る人もなし。故に草刈くさかりわらは共、あやまりて、腰うち掛、または其そのあたりに尿などすれば、たちまち物狂となり、或は大熱だいにつを發して、さまざまのことども口ばしりけるとぞ。然るに、天和三年、水戸黃門みとくわもん光國卿、武藏庄馬頭村へ再び下向げかうありて、儒臣佐々木助三郎宗淳に命じて先づ碑文ひごんを仰打せしめて見せなはし、則宗淳によましめ給ひ、其後元祿四年有司に計りて、湯津上村は御代官所、並に御家人の知行ちぎやうと、入會の地なれば、彼此得替をなし給ひて、碑ひの在所凡二反許りを、水戸の封地となし給ひ、豎八間横七間の塚つかを新に築かせ、其上に寶玉造りの堂を建て、傍らに泉藏院と云ふ修驗を住居ぢゆうぐさせ、月俵を下し、彼堂を守らしめ給ふ。」と。

鹽原温泉

▲西那須野驛から、鹽原鐵道に乗つてゆく。我らの云ふ所の鹽原は、箒川の水源で、那須高原兩火山の間にある溪谷中に散在する諸村落の總稱である。鹽原の地名は、この地の諸温泉が、鹽類を含有するからであらふ。我らの云ふ鹽原温泉は、大綱、福渡戸、鹽釜、鹽ノ湯、畑下戸、門前、須卷、古町、新湯、湯本の十湯を云ふのである。十湯の附近には相當に名勝古蹟もあるから、之らを巡遊するには三日を要する。湯本から小路四里、川治温泉へ出て、電車でんしゃで今市へゆき日光へ廻るも面白い。

(1) 源三窟 古町温泉の西北にある、洞は所謂鐘乳洞で、入口は高さ一丈六尺巾二丈八尺で三十間位は進むことが出来る。源三位頼政が、平氏との戦ひに敗れ逃れ來つてこの洞を隠れ家としたと云はれるが、元よりとるに足らぬ妄説である。頼政の子伊豆冠

者有綱が、鹽原家忠を頼つて此の地へ来てこの洞を隠れ家としたとの説もある。鹽原家忠の城跡は古町の宮崎の傍らなる山上にある。家忠はこの地の豪族で、藤原秀衡が二千の大兵を僅か四十騎ばかりの手勢で追ひ拂つたと云ふ古戰場は、今の尾頭峠である。

(2) 城山 鹽の湯の西にある。宇都宮一族の武將君島信濃守の城跡である。君島氏一族離散して麓に下り、温泉宿を開いた。今鹽原の旅館で君島姓を名乗るものは、此の末葉である。

(3) 高尾の碑 江戸吉原三浦の名妓で(高尾)所謂仙臺高尾である。碑文は山本北山が書いたのである。

「高尾は承應年間新吉原三浦屋の妓となり、萬治三年高尾となる、野州鹽原の人、後陸奥仙臺侯伊達綱宗に荷籍せらる、事幕府に聞え綱宗は萬治三年七月品川の別邸に幽せらる、高尾之に仕へお相の方といふ故に世に之を仙臺高尾といふ子なきに依て熊谷

齋宮の二男を養子として碌千石を賜はる、楢原新太夫是なり仙臺若町に墓あり云々」
(4) 妙雲寺 下鹽原にある。門外は門前町、古町である。平凡な藁葺の建築物だが、臨濟宗の古刹である。正和年間佛國禪師の嗣法、大同妙喆和尚の開基である。俗傳に平重盛の姨母、妙雲尼の遺跡と説くは誤りである。

那 須 野

▲黒磯驛から、那須温泉へゆく途が、即ち那須野が原である。今は開墾されたが、古は廣漠たるものであつた。

那須野は、下野那須郡の中央にある曠野で、北に那須岳、西に鹽原山、高原山、東に八溝山聳え、峰巒之を四周してゐる。其中を箒川、蛇尾川、板空川、餘笹川、黒川等の諸水流れ、末は那珂川へ流入してゐる。南北八里、東西五里乃至七里、標高百五十米、乃至四百米の高さをもつてゐる。明治十三年から開墾の事業を起し、十八年に至つて築道疏水等

の工事先づ完成した。那須開拓に際して、三島子爵の功勞は大である。

源頼朝將軍の時、那須野に於いて、卷狩(狩獵であつて、今の觀兵式並大演習に當る)を催うしたことは、吾妻鑑、曾我物語に見えてをる。

八十二代、後鳥羽天皇の御宇、建久四癸丑年四月二日、右大將源頼朝公、那須野の御狩を催され、關東八ヶ國諸大將供奉いたし、家々の纏を立て思ひくゝの狩裝束にて、十萬の勢子を打ち入れしかばさしにも廣き那須野を、八方より狩り下す、かれて那須肥前守資光(一本には光資)より御狩の儀仰ぎ奉りしにより、眞先に立ち、岩を攀ち谷を越え、縦横無盡に狩り立てしかば、多くの禽獸、勢子を破り逃れんとするを追ひかけ、追ひつめ、打ち殺し、或は射取り、喚き叫んで狩場へ進む、斯る所に、其丈一丈許りの大熊はしり出で、大勢の勢子を掻き立てくゞ猛り廻る、其ものすこき、有様何とも云ひがたし、資光之を見、三人張に、十三束を打ち番ひよつ引き兵と射、熊の肩間に、箭のかくる、斗りにぞ射こみける、痛手に少し弱る所へ、郎黨の角田駈け寄りて、熊を打ち伏せ柄も拳も通れさ差し通し首打ち落しけり、然る所に五尺許り

白狐、鮮なる毛次にて、眼は赤く日月の如く、左右の牙は、上下に齧齧ひ、口を開きて、怒るときは、火焰を吐きさながら、黒雲の如し、資光を初めとして、土肥土屋等の面々、我れ射取らんと馳せ寄れば、野干は之を事もせず、自在に飛走す、資光討たんとすれば、野干飛びかゝりて喰ひ付かんぞす、資光太刀を抜き拂へば、岩に登らんとする所を、透さず、兩足斬り落しぬ、資光熊と、狐の二頭頼朝公の見參に入れければ御感淺からず吾が朝に並びなき熊、野狐は定めて玉藻の前が化生なるべし、あら日出度や、今度の忠賞に源氏の白旗を得さするなり、又先例の如く、那須の武者所たるべし、自然國の亂れあらん、其時は頼朝に忠を盡すべしと、仰せありければ、頼資、資光、有りがたしと頂戴仕る、此時頼朝公一首の詠歌を遊ばされて、武士の矢なみつくらふこての上にあられたばしる那須の篠原と那須記に見ゆ(蓋し賀朝家集に記しあれば、鎌倉右大臣實朝公の詠歌なりと云ふ説、實なるが如し)斯る所に、其長八尺許りの大鹿、幕下の御前に馳せ來る、折節御前に下河邊六郎行秀、小山左衛門尉朝政、伺候なし居りしかば、六郎上意を蒙り、黒塗の大の中指抜き出し兵と射る、此矢妻手の肩さきに、ぐささ中りけれども、和國無双の大鹿なれば、猶猛りて弓手の方に走り、來る二の矢を次がんとす

るに、透間なし、あはやこ思ふ所に、大刀ぬき前足を切りおこせば、小山が郎黨、馳せ集りて終に鹿を射留めける、朝政其鹿を擔はせ、御前に奉りしに、御感斜ならず、鹿角は此野を狩りし印しにこそ、温泉神社へ奉納なされけり、九勝の角是なり。

三斗小屋

那須温泉は、湯本・新那須、北、辨天、大丸、三斗小屋、高雄股、板室を指し、古來著名である。黒磯驛から一番近い湯本迄四里六町、自動車の便がある。滞在中那須登山を試みるは一興である。

三斗小屋は、湯本から三里。那須嶽の西にある幽谷で、會津へゆく間道である。こゝから大峠をこえて、南會津郡の野際村へ二里、この地戊辰の役に、東軍が約四ヶ月に亘つて官軍に敵對した所である。

殺生石

那須温泉に遊んだらば、九尾狐と源翁和尚とに關した傳説で有名な殺生石を一見すべきである。芭蕉翁の「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」の句は、この附近の景狀を云ひあらはして、申分がない。石の附近は不毛の地で、砒臭烈しく人をして殆んど呼吸に堪えざらしめる。奥の細道云ふ、

「黒羽の館代、淨法寺何かしの方に音信る。日をふるまゝに、ひとひ郊外を逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣で與一が扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社にて侍ると聞ば、感應殊にしきりに覺えらる。

修驗光明寺と云有そこにまねかれて、行者堂をはいす。

夏山に足駄を拜む首途かな

殺生石は、温泉の出づる山かげにあり。石の毒氣いまほろびず。蜂蝶のたぐひ、眞砂の色見えぬほど、かさなりて死す云云」と。

謡曲殺生石は昔の此邊の光景を最もよく書きあらはしてゐる。

高崎線

△秩父線▽

熊谷寺

▲熊谷堤の櫻で名高い熊谷驛から約七町。この近傍屈指の古刹である。

浄土宗の古刹で、蓮生山熊谷寺と云ふ。寺域は熊谷館の遺址で、かの熊谷直實はこゝで生れたのである。直實は、一ノ谷の役で、敦盛を心ならずも討つてから無常を感じ、出家して蓮生と號したが、其子直家及びその子孫もここに住した。後に子孫が、安藝、陸奥、近江等に分散したので、遂ひに廢館となつた。當時、武士の邸宅には持佛堂があつて佛事を行ふ風があつた。熊谷館にも夫れが存してゐたのであつた。館の廢館後持佛堂が寺となつたのである。夫れを後に天正年中に幡隨慈上人が中興して熊谷寺と名づけたのである。

安政元年に、本堂は焼けたが、反つて焼け肥りで、舊に倍して立派な建物となつた。境内に直實の墓がある。(之は直實の骨をうめたのではなく、京都東山金戒光明寺にある直實の墓から分骨したのである) 其他寺に直實の遺物があつて今、寺寶となつてゐる。

渡邊華山隱棲の地

熊谷驛から秩父鐵道に乗り、大麻生驛で下車約八町。

少間山と云ふ低い山の中腹にあり、龍泉寺觀音閣がある。ここは、渡邊華山が一時隱棲したところのある所で、眺望は頗るよい。

畠山重忠の墓

▲秩父鐵道永田驛で下車、田中の渡を渡る畠山へつく。鎌倉の頃

畠山の一翼の時にいた地で、重忠はこゝで生れたのである。この地に重忠の影塔がある。

この地に眞言宗の一古刹がある。満福寺と云ひ、往年重忠に依つて再興せられたのである。重忠の信仰した觀音堂があり、其後ろに重忠の墓がある。(寶曆十三年の再造である) 田中の渡の上に、荒川の渡がある。之は俗に鶯の瀬と云はれ、昔荒川が氾濫した時、重忠が鶯の音を趁ふて巧みに徒渡りした所と云はれてゐる。

鉢形城址

▲秩父鐵道寄居驛で下車荒川を隔て、西南七町

城はもと北條氏邦の據つた所で、荒川の斷崖深潭、自然の壁池をなし、金城鐵壁の備へをえてゐた。城は東西五町乃至三町、南北八町、數郭に分れてゐた。永祿天正の頃は、氏邦がこの城にゐて、小田原北條の爲めに、北武藏秩父を鎮してゐたので、地方の名邑大城をなし、寄居、櫻澤、折原は、城下町であつた。天正十八年秀吉の爲めに圍まれて落城した城址を訪ふたらば歸りに、象ヶ鼻の奇勝を賞すべきである。この邊は、鮎獵の本場で

ある。

寶登神社

▲秩父鐵道寶登山驛で下車すれば、一二町にして、秩父赤壁と云はれる長瀨の奇勝を一見することが出来る。夏日、こゝから舟を賃して、三里下の寄居へ下るは面白い一日の遊びである。

驛から四町。寶登山の麓に寶登神社がある。地方の名祠である。昔日本武尊東征のみぎり、こゝに立寄られた縁で、尊を御祠りしたのである。

登路、十五町、寶登山頂をきはめ、長瀨の勝を望むもまた面白い。

和銅採鑛の跡

▲秩父鐵道黒谷驛で電車を降りると、僅か八町で、直ちに和銅採鑛

の跡を訪れることが出来る。



秩父長瀨の風光

箕山の中腹にある祝山は、元明天皇和銅元年正月十一日に秩父から朝廷に献上した銅を採鑛した所と云ひ傳へられてをる。古へこの邊から銅の出たことは事實であるけれ共、其位地は今では指定することが出来ない。けれ共日本最古の銅錢和銅開寶は、秩父産の銅に依つて鑄造せられたことは慥かである。土人は、この山を今も金山或ひは和銅山と云ひ傳へてをる。又一説に昔和銅山を南北に掘り盡したとも云はれる。
(今の和銅澤は、其中斷した所であるとも云はれてゐる)

秩父神社

▲秩父鐵道秩父驛から約一町。

秩父驛即ち大宮は、秩父郡(秩父盆)中央で、古來大宮郷、又は大宮町と云ふてゐた。昔も今もこの地方に於ける政治産業上の中心地で、秩父銘仙の名は天下に鳴りひびいてゐる。

秩父神社は俗に秩父妙見と云つてゐるが、これは後世社内に妙見社を建て、その靈驗著しく、夫れが爲めに妙見の名があらはれてしまつたのである。神社は古い歴史のある社で祭神は國造の祖八意思金の命である。今の社殿は武田信玄の爲めに焼かれて後、徳川時代に再興したものである。

秩父神社の創建は人皇十代崇神天皇の十一年、知々夫彦命、秩父國造に定め賜ひしき命が十世の祖、即ち八意思金命を奉齋せられたるものにして所謂、國造本紀の『瑞籬朝御代、八意思金命十世孫、知々夫彦命、定賜國造、拜祠大神』に依り詳かなり、即ち八意思金命は天照大

神の天岩戸に隠れ給ひしき命の才智に依り、天岩戸の前に庭燎を焚き、長鳴鳥を啼かせしめ天鈿女命に舞はしめ遂に大神を誘えたりとは神話の傳ふるところにして神代第一の智者と仰がれ給ふ、三代實錄に曰く『貞觀四年七月二十一日戊子、授武藏國正五位下勳七等秩父神正五位上、同十三年十一月十日壬午、授武藏國正五位上勳七等秩父神從四位下、元慶二年十二月八日己巳、授武藏國從四位上勳七等秩父神正四位下』とあり、菅公の延喜式神名帳に曰く『秩父二座内並小、秩父神、椋神』とあり、實に東國最古の鎮護と云ふべし、其後天慶年間平高望の五男村岡五郎良文常陸の國香に加勢して、下野の染谷川に於て將門を追ひ退け、後秩父に來り居住せらる、時當社に北辰妙見を勸請すされば茲に於て世々秩父妙見と稱せらる、所以なり、其後八十七代四條天皇の嘉禎元年九月火災に罹り悉く灰燼に歸す、百代後小松帝の應永四年七月足利持氏再建す、爾來稍々衰運に向ふ、永祿十二年武田信玄亂入の際悉く兵燹に罹り再び焼失し、天正七年正月北條氏邦假宮を建造して圭田七石を寄進し同十九年徳川家康五十石を増して同二十七年九月再建せしより爾來復舊す、百八代後水尾帝の元和二年四月家康の功を慕ひ社中に東照大権現を勸請す、二代將軍秀忠公又病氣平癒を祈願せらる、祈願狀は伊奈半十郎の筆な

リと云ふ、寛文以來領主阿部侯毎歳代拜使を向けらる。

橋立観音

▲秩父鐵道終點影森驛より數町、影森は武甲山(四千四)百尺(四)の山麓にある。

橋立観音は、秩父八十八所の一で、橋立川の溪流を前にし眺望に富んでゐる。堂後の峭壁の中に一大鐘乳洞がある。これ著名な橋立観音の鐘乳洞で、一見の價値は十分にある。

三峰神社

▲影森驛より四里半。途中強石迄三里半は、自動車の便がある。

神社は、三峰山腹(雲採、白石)妙法の三嶽(三嶽)にある。社格は縣社であるが、參詣者頗る多く(年平均二萬五千)本社傍らの宿坊では、一夜數百人を泊めうる設備がある。

社は、景行天皇の四十二年日本武尊の創建、後文武天皇の三年役の行者登山して以來神

佛混淆となつたと傳へられてをるが眞偽は定かでない。(別當寺は天台に屬し、高雲寺と稱す)明治元年神佛の混淆を禁ぜられて神社となつたのである。山深く幽玄の境である。

城峰山

▲本庄驛下車、兒玉迄電車でゆき、兒玉から三波石で名高い、鬼石迄馬車でゆく。鬼石から神流川を溯る、こゝ二里矢納の里に城峰山がある。武州屈指の靈地である。

日本武尊東夷征討のみぎり、城峰山に登り給ひ、山嶺に躬ら矢を納め大山祇命を祀り給ふたと云ひ傳へられてをる。朱雀院の御宇天慶三年平將門の弟將平は、この山に矢納城を築いて叛旗をひるがへした。藤原秀郷賊徒を平定した後、當山の祭神に城峰の社號を附した。

祭神大山祇命につかへまつる靈犬大口眞神は火難盜難除けの神として信仰的となつて

ある。明治十六年山火の災にかゝつて本殿其他灰燼に期したので、今の社殿は其後の造營である。

この山中にある桔梗は花を開かない。將門の息女桔梗前が戰敗れて臨終の際怨語せしを無心の花もあはれとや感じけん。以後開花せず」と云ひつたへられてゐる。

當社の神使は、山犬(狼)で、それに關していろ／＼神祕的の話しが傳はつてゐる。

平忠度の墓

▲高崎線深谷驛より北十三町。

平家世をとつて二十年、榮華は極めて短かつた。滅亡の際源氏のさむらひ、岡部六彌太忠澄は、一敵將を斃した後、その忠度なることを知り、憐んで其墓を此地に築いた。後に、菊の御前、忠度を慕つてこの地に來り墓前に櫻の樹を植ゑて、悲しみのあまり此の世を去つてしまつた。今も猶忠度の墓の傍に菊の前の墓が並んで、あはれをとめてゐる。岡部

の六彌太が、なさけある武士であつたことは、謡曲俊成忠度の「加様に候者は、武藏の國の住人岡部の六彌太忠澄と申すものにて候。さても今度西海の合戰に、薩摩の守忠度をば某が手にかけ失ひ申て候。御最後の後尻籠を見奉れば、短冊の御座候。又承り候へば、忠度と俊成の卿とは、淺からぬ和歌の御值遇のよし承はり候。此短冊を持ちてまいり、俊成の卿の御目にかげばやと存じ候云々」とあるとて一入奥ゆかしさを感じさせられる。

深谷驛の西北岡部村の善濟寺に、岡部六彌太忠澄夫妻の墓がある。

金鑽神社

▲本庄町より兒玉町迄電車賃十九錢、兒玉町から神社迄一里半。人力車、馬車の便がある。

武州の二ノ宮で、天照大神、素盞鳴尊の二座を祠る。社傳によれば景行天皇の四十一年の創建で、御伯母倭姫命から賜はつた火鑽金を御靈代として齋き祠つたのであると。社境

神さび、詣道には櫻が多い。今官幣中社で、信仰頗るあつゐ。一度は杖を曳くべき所ぞかし。

駿河大納言の墓

▲高崎驛より七町。驛前より電車にのり、大手前にて下車すれば二町。高崎は、大河内氏八萬石の城下で、古來仲仙道の要衝に當り、市況活發である。城址は、今猶ほ濠渠を有し、堤上に櫻樹が植えてある。城は元和田城と云ひ、上杉氏の臣和田氏の居城であつた。

市の東偏に、浄土宗鎮西派に屬する古刹大信寺がある。元龜元年總譽誓願上人の草創で慶長三年俣渡田村から遷したのである。境内に徳川忠長の墓がある。忠長は駿河大納言と呼ばれ、駿州五十五萬石を領し、三代將軍家光の弟である。寛永九年冬、驕暴を以て除國せられ、高崎城主安藤重長に預けられ、翌年十一月六日に自刃した。忠長の除國、夫れに

ついでに自刃には、永久に解くこと能はざる秘密が宿つてゐることは疑ひない。

船橋の古跡

萬葉集上野國歌に

「かみつけの佐野のふなはしとりはなし

おやはさくれどわはさかるかべ」

と見える佐野の船橋の跡は、高崎市の南佐野村にある。

佐野常世遺跡

謠曲鉢ノ木で名高い佐野源左衛門常世の遺跡は、上佐野にある。物語としては面白いが鉢ノ木の物語は、架空のことであり、時頼廻國のことも史上に於いては否定せねばならず、源左衛門常世の存在も否定しなければならぬのである。

徳川氏は、武家道德涵養の一助として鉢ノ木を奨励した。夫れにつれて常世なる架空的

の人間は、有名となり、神として崇めらるゝ迄になつたのである。

上州三碑巡り

▲上信電氣鐵道は、高崎下仁田間二十一哩間を營業してゐる。この沿線は史蹟頗る豊かである、山名驛の近くに、山名の碑金井澤の碑、吉井驛の近くに多胡の碑がある。上州三碑と云うて古來著名である。三碑巡りはいと興多き催しである。

山名の碑は、高さ三尺幅一尺ばかりの野石で、碑文は五十三字。白鳳十年に、放光寺僧が私に建設したものであつて、多胡の碑よりも古いと云はれてゐる。

金井澤の碑は、山上の碑より約半道。神龜三年の建碑である。山名の里の丘上に根古屋城址がある。曾て武田晴信の占據せし城壘である。古へは山名の里から根古屋へかけて、山本の里と云ふた。謡曲鉢ノ木に山本の里とあるは、こゝである。又この程近くに、廢城

考に「應仁元年上杉氏の老臣等上杉顯定を越後より迎へ平井城を築きて之れに楯籠り、足利成氏と戦ふこと度々なり」とある平井城址がある。吉井停車場から、多胡の碑迄約二十五町。其途中に、多胡の城址と萬葉集に詠ぜられたる多胡の入野の古蹟がある。多胡の碑は、高さ四尺一寸、幅一尺六寸乃至二尺で、八十字を刻してある。下野の國造碑、陸前多賀城碑と共に日本三古碑の一と云はれてゐる。碑面は、

辨官符上野國片岡郡綠野郡甘樂郡並三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅左

中辨正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原寫。

吉井は新羅人の歸化地である。

富岡製糸場

▲富岡町は、養蠶、製糸の業の盛んな所として知られてゐる。高崎へ五里。安中停車場迄約二里二十町である。町の北里余小野村得

成寺に、小野小町の事蹟を傳へ、俗信の的となつてゐる。

富岡製絲場は、明治五年六月の開設で、關東地方に於ける西洋式製絲業は、この工場に胚胎したのである。日本製絲業史の第一頁を飾る工場である。始め官營であつたが、後私營となつた。

貫前神社

▲上信電鐵一ノ宮驛下車數町。

延喜式内の古社で、古くは一ノ宮明神と云はれ、今國幣中社に列してゐる。安閑天皇二年の創建で、經津主命を祠つてある。境内に、日枝神社、内宮外宮、阿夫利神社琴平社及び末社二十二座がある。毎年三月十五日に、大祭を行つてゐる。

黒瀧山不動尊

▲下仁田驛から、鑄川に沿つて二里半。下仁田の附近は、有名な蕨弱玉の産地である。この地は幕末武田耕雲齋の手勢と高崎藩との古戦場である。

下仁田西南二里に、小澤の里がある。南日川の溪谷中にある幽玄の境である。こゝより北西に當り大鹽澤と云ふ所がある。齋藤竹堂の遊記に依つて世にあらはれたる黒瀧山の奇勝はこの地にある。黒瀧不動尊は、附近の人々から大いに崇敬せられてをる。又附近に阿唱念山の奇勝もある。

信越本線

板鼻の宿

▲板鼻は、高崎市を距る二里、安中へ一里。安中驛で下車してゆくをよします。安中驛の東十町に、鷹ノ巢山の絶景がある。この山上には、武田氏の臣依田六郎の城址がある。

板鼻は、碓氷川の北岸にあり、中仙道の一驛次として、昔は繁盛した場所であるが、鐵路開けてから甚だ振はない。謡曲鉢ノ木に、「墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡につきにけり」とある所だ。碓氷川は、碓氷嶺に發し、高崎市の西に至つて烏川に合する(十)のだが、信越線中仙道は、この川に沿ひ、風光頗るよい。古來度々戰場となつた所で永祿三年九月武田信玄と長野業政との戦ひは著名である。

町の北方に里見城址がある。里見氏累世の居城であつた。猶里見村の西北烏川の上流烏川倉田邊は、和名抄に「碓永郡浮囚郷」とある浮囚郷である。

磯部城址

▲磯部驛は、鑛泉を以て世に知られてゐる。炭酸性冷泉で、火力を借りて澡浴に供してゐる。驛の東南約十町に磯部城址がある。

城址は、城山と云はれ、高丘で、樹木鬱茂してゐる。建仁年間佐々木盛綱の築營と云はれ、盛綱の墓は今猶松岸寺境内にある。佐々木氏がこの地で勢力を振つてゐたことは、東鑑に見えてゐる。猶境内に大野九郎兵衛の墓と稱ふるものもある。

松井田

▲松井田驛は、妙義登山者の下山驛として知られてゐる。妙義へは

一里十町。山麓迄自動車の便がある。

松井田は、古くは松枝と書き、中仙道の驛次では安中と坂本との間である。平治物語に「義經上野國松井田と云所に一宿して、家主の男を見るに、大剛の者と見ゆれば主従の約をなす。伊勢の國の者なり、伊勢三郎義盛と名のる」と見へ又曾我物語に一頼朝卿其後は松井田に宿り給ふ」と見えてゐる。それらの記録に依つて、當時を追憶すれば感慨無量である。平安朝時代には、この松井田に學校があつたらしい。前上野誌に、承和二年小野篁之を建てたりと云ふてゐるが、小野氏の建學と云ふことは疑ふべきだが、學校のあつたことは、延喜主稅式に「上野國學生料稻一萬束」とあるに依つて事實らしい。町で見るとは不動寺(近世寺領九十石、上州は不動寺に於ける一靈場である)松井田城址(安中越前守の居城で、武田信玄と戦ひ、矢つき刀折たが、大道寺駿河守政繁は、小田原北條の滅亡と共に、滅亡した)である。

横 川

▲横川驛は、碓氷嶺を越える電氣機關車の準備驛として知られてゐる。驛南には鼻曲山、妙義裏山が聳え、碓氷の溪深く、一靈境である。

横川には、舊幕の頃御關所があつて、旅人を嚴重に取調べた。幕府は碓氷峠には峠町と横川の二ヶ所に關所をおき安中藩をして之を守らしめてゐた。之は近世のことであるが、古代にも碓氷の關のあつたことは、將門記、三代格に依つて明かである。和名抄、碓氷郡坂本郷とあるは、今の坂本町から横川へかけてを云ふたのである。延喜式に坂本驛馬十五疋と載せ野後驛から此に達し、嶺を越して信州長倉驛へ達したのである。近世坂本宿は、東海道に於ける三島宿の如く、本陣脇本陣ありて、繁盛したが、鐵路開通後旅人の通行する者少なく、荒涼たる山村となつてしまつた。鐵路の開通と共に、峠下の宿場は多く衰へ

てしまった。荒涼たる宿場しゆくばを通つて往時つうじを追憶おぼするは興多いことである。
紅葉かみぢの頃かみぢ輕井澤かみぢで、下車し碓氷嶺すいひをこえて、坂本の宿しゆくへ下つて見ることは、是非とも御
すゝめしたい。

兩毛線

伊香保湯

▲上越南線澁川驛でんしやから電車でんしやの便がある。有名な温泉地はるなまで、榛名山はるなまの東麓かみにあり、好箇かうこの避暑地である。

伊香保いかほの湯は、關東屈指せきせきの古い温泉で、伊香保神社いかほじんじや(伊香保湯前宮)が式内しきないの名神大社であつた事實に見ても古くから温泉おんせんとして知られてゐたことがわかる。天正年間てんしやう木暮、千明の人々ちゆうじやうが中興ちゆうきやうの祖となつて、繁盛するに至つたのである。伊香保山中いかほさんちゆうは古くは、伊香保神領であつたが、近世寛永九年以後は幕府ばくふの直轄地となつた。

いかほなる物聞山のほととぎす

にござぬことにきこゆなるかな

伊

勢

と、當國の歌枕と云はる、物聞山をたずぬるも面白い。萬葉集に見えたる伊香保嶺は、黒髮山、舟尾山、二ツ岳、水澤山迄の總名である。

榛名神社

▲伊香保から、榛名湖畔迄約二里。榛名神社は湖畔にある。湖畔より山中の最高點榛名富士へ登るも一興である。(一四五〇米、湖面を抜く二五〇米)

榛名神社は、本國神名帳に、「群馬郡正一位榛名大明神」と見ゆる古祠である。中世以降僧徒奉仕して、六宮滿行權現と云ひ、一大權勢を振まつてゐた。後上野志に「榛名山の社壇は磐石に造りかけて、大岩宮の上を蓋ふ、宮殿の四邊、奇石怪岩、重疊環峙して、實に仙境と云ふべし」と見えてゐる。

箕輪城址

▲伊香保から、高崎に至る街道の西方に船尾山がある。山南箕輪村大字西明屋の椿山に、箕輪城址がある。高崎から箕輪迄二里半。電車でゆけば、觀音寺前停留場で下車するを便とする。

城は大永年間長野信業の築く所で、その子業政之を守護した。弘治永祿の間、武田信玄この城を攻むること五年に及んだが、業政死守して之を卻けた。業政の偉勳は赫々たるものであつた。業政永祿四年に歿し、右京大夫業盛相ついでこれを守つた。時に武田勢再び攻めて城はつひに陥落した。後武田氏より澁川氏北條氏に屬し、天正年間に徳川の臣井伊直政城主となつたが後高崎に移るに及んで廢城となつた。山吹日記云ふ。

「西門の跡あり。から堀、三重櫓臺、西北は高し。山川廻りて流る。内部の間石二つあり」箕輪山中に唐目木の温泉がある。ヤケドに特效ありと云はれてゐる。

草津温泉

▲澁川は、吾妻諸温泉へゆく出発点である。草津、四萬、澤渡、河原湯へは、この地を出発点とする。けれ共、最近草津へは、輕井澤驛から、電鐵の便が出来たので、十中の八九迄は、この線を利川する。

草津は、伊香保と共に、關東屈指の古い温泉である。行基菩薩之を開けりと云ふは信用し難き説であるが、泉名が古くから世に知られてゐたことは事實である。草津縁起には、「右大將頼朝公、建久四年八月三日、信州三原御獵の時、白根明神の鳥居の下迄狩入らせ給ふに、硫黄臭氣して烟立つ。依つて其地の住人に仰せて、叢を刈らせ給ふに、自然とよき温泉湧き出づ。是必病を治すべしと、足利駒王丸が疾病を試み給ふに、七日にして平癒す。右大將感じて御身も治し給ふに、心地快然たり云々」

と見えてをる。草津が温泉として繁盛するに至るのは、徳川時代になつてからである。温泉の入口に白根神社がある。白根山を祭るもので、本國帳に、從一位白根明神とある、神である。昔は、神に位階を送るを例とした。草津は海拔四千五百尺、夏猶暑知らずの地である。

沼田

▲上越南線沼田驛下車。

和名抄、利根郡沼田郡、訓奴萬太の中で、其地利根川の東に當り、片品、薄根の二水を南北に帶び、山中の別天地である。古來上州より越後に通ずる要衝に當つてゐる。北條五代記に

「景虎は沼田へ發向すといへ共、氏康出馬ゆる、其かひなく、越後へ歸陣す。その時節の落書に

景虎は越後かたびらながうきて

沼田に入りて足ぬきもせず」

と見えてゐる。古來、上越二州の英雄の勢力の衝突地であつた。

城址は、今は壘壁のみを存する丈けであるが、昔は、要害險難の城であつた。古へ沼田某の據る所であつたが、中世廢城に歸し、天正十八年眞田信幸封を此地にえて、城を修め二萬七千石を領した。其後城主には變動があり、幕末には、土岐氏三萬五千石の居城であつた。

總社神社

▲前橋驛下車。市の西二十町元總社にある。

元總社は、古へ上野國の國府のあつた所で、國府址は、蓋し、長尾氏の遺墟と稱する地であらう。元總社の西北半里東國分に國分寺址がある。國分を以て國府の址と唱ふる説は

非である。

總社神社は、古來總社明神と云はれ、國府時代、國司の國內諸神遙拜の祭壇であつた。この社は、盤筒男の神を祭るなど、唱ふるは、近世の云ひごとで、原義を失へるものである。社域頗る幽邃である。

文明年中迄は、國府の地名を呼ばれてゐたが、長尾氏の築城以來、總社を以て呼ぶことゝなつた。慶長中秋元氏總社城を廢して新に植野に築城した。しかもこの新城に總社の名を用ゐたので、茲に於いてか、元總社の名が出来たのである。

總社町に、光嚴寺と云ふ古刹がある。寺傍に、寶塔山、愛宕山と唱ふる二古墳がある。土人は、これこそ毛野君の祖王の墓なりと云ひならはしてをる。

前橋城址

▲前橋は、利根川の左岸にあり、越後下野との交通の要路に當つて

ゐる。松平氏十七萬石の舊城下町で、上毛生糸市場の中心をなしてゐる。

城址は、驛の西北半里、今では公園になつてゐる。

前橋城は、一に厩橋と云ひ、天文以前は、平井の上杉氏に屬し、以後は小田原の北條氏に屬してゐた。長尾宗資の始めて築く所と云はれてゐるが、眞偽は定かでない。天正十年織田信長の臣瀧川一益この地にゐたが、信長弑せらるゝや尾張へ歸り、又北條氏に屬した。天正十八年北條氏滅後徳川氏配下の大名がこの城主となつた。維新の時は、松平氏十七萬石の采邑に屬してゐた。縣廳のある所は、舊本丸址である。

伊 勢 崎

▲伊勢崎驛下車。

桐生につげる機業地で、糸織銘仙がこの地の特色ある産物である。一書に曰「伊勢崎織

布は、初め文政年間近郊の民、栗茶色に鼠色を交へたる縞物を製し、これを伊勢崎塚の市に賣る。稱して太織といふ。武州本庄の商估これを江戸に送り秩父織と共に廣く販賣なしければ、秩父縞とも呼ばれたり。天保中より黒地に鼠色を交へて織り、遂に盛大の物産となり、伊勢崎の名あらはる。安政中より紺染を精良にし、黒地縞廢し、年に十萬匹の産額あり。明治に至りてますます増加す。」

國定忠次の墓

▲國定驛下車。

幕末に、國定村の忠次と云ふ博徒が、仁俠を以て、男を賣り、國定忠次の名は、關東一圓に響きわたつた。事を以て、官に捕へられ、前橋城下大渡關で磔刑に處せられた。

桐生の機業

▲桐生驛下車。

桐生は關東第一の機業地で、京都西陣に匹敵してゐる。學生の見學旅行地としては好適である。市内の名勝としては、驛から北十町に西ノ宮神社、十二町に桐生天満宮がある。古城址に丸山公園があり、渡良瀬川に臨んで風光頗るよい。名勝地誌云ふ。

地は群馬縣山田郡にありて、南に渡良瀬川の清流を控へ、後に野州の山嶺を帯び、機杼の聲の盛なる、蓋し他に其比を見ず。而してその沿革又極めて古く、和銅年間（今を去る千二百年餘）既に上州絹を献じたること正史に見ゆ。元明帝は桃文師を國に派せられたれば、上州の機業も亦當時是等官撰の技術傳習官に依て發達の途に就きたるなるべし。天慶の亂、一たび中絶し元弘に及んで、新田義貞勤王の師を此の地に起せし時、旗絹をこの地より出したる事あり。元中年間に及んで其の業稍々發達し、西部の日野絹、東部の仁田山絹其名頗る著る。應仁の亂其業又々中絶したりしが、徳川氏起るに及びて、再び其事業を恢復し、關ヶ原の役、旗絹二千四

百十四を献じたること歴史に明かなり。されど此頃は只一般に平絹を織出すに止りて、未だ他の種類に手を着するに暇なかりしが、寛文年間初めて紗綾絹を産出し、續きて元文に至りて、彌兵衛、吉兵衛の兩人の京都より移り住みて縮緬、小綴子、絹紗綾等の織法を傳ふるあり。文政に至りて織物の枝大に進み、機業家競うて工夫を凝し、支那製の織物を模造し、傍ら糸織、琥珀龍紋等を製造せり。これ桐生織物に於ける進歩の第二期なり。而して舶來綿糸を使用して絹綿交織を製織し、大に世人の嗜好に投じたるは實に安政年間であり。明治維新後事業一時衰頽したれど、忽にして再び隆盛の域に復し、年々の産額次第に増進の好況を呈したりしも、泰西染色法輸入せられてより、或は目前の利に迷ひて變色し易き物を製し、或は短尺のものを出し甚しきに至りては一反中仕上げの外都と内部に品質を異にする等の惡むべき奸策を施すものありしを以て、忽ち世上の信用を失ひ、明治八九年の頃は東京市中の確實なる呉服太物商は「上州物一切取扱不申」と標幟して以て名譽を爲すに至れり。この結果として、機業上一般の監督を爲すべき桐生會社設立せられ、一々その精粗を検し、四種の證紙を製品に貼付するに至りて、漸くその名譽を恢復したり。十三年、黒縹子の流行に會し、從來の染法を更め、新法を用ひて南

京繻子と競争し、十四年初めて米國輸出の羽二重を製し、二十年頃よりシヤカード機械を使用するもの年と共に加はり、紋織の技術桐生に於て著しく發達し、遂に紋織製造法の專賣特許を出願して、京都の機業家とその覇を争ふに至れり。それより以後經濟界しばし動搖して産業上一頓挫を來すこと少なからざりしも、猶よく昔日の名聲を保ちて以て今日の盛況に達せり。産地は山田、新田の二郡にして、營業組織は元機屋、賃機屋の二つより成る。而してこの地は足利に異りて、産出は専ら絹織物なるが爲に、元機屋も亦概ね自家製造を營めり。されど工場を設け、多数の職工を傭使して製造に従事するもの少数にして、元機屋の注文に應じ、毎に婦女子の賃織に屬するもの多し。而して伊勢崎に比較して男工の多数なるは、織物の種類複雑にして意匠を要するものあるを、自家に於て使役するもの多きに由れり。重要な會社は日本織物會社工場（桐生町大字新宿）成愛合資會社（福田村大字上久方）縮緬合資會社（桐生町大字安樂士）等にして猶ほその他幾多の小工場あり。市場は桐生にありて、三、八の日これを開く。

大慈寺址

▲岩舟驛より西北一里餘、驛の北面に屹立する岩舟山、又驛の南方一里にある三龜山（一に大和田山）は一見の價値がある。

大慈寺は、今僅かに草堂を残すのみであるけれど、古へは、當國屈指の大刹であつた。行基菩薩の草創で、慈覺大師の出身地である。寺址の北に、式内の村檜神社がある。三島村字大田和の三香保崎は、慈覺大師の出生地である。

室六所神社

▲栃木驛の東北一里強。
栃木は今池方の名邑である。錦着山の公園は、一遊の價値がある。栃木の西北一里余思川の西に國府がある。古への下野國府はこの地に求むべきである。

室六所の宮は、古への下野國の惣社で、室とは此地の舊名である。中世以後祠人室の八島てふ縁語を以つて詠唱し、つひに東國の名所となつた。古來祭神は、木花開耶姫以下六神なりと云はれてをるが、頗る原義を失つてをる。奥の細道云ふ、

「室の八島にまうす。同行曾良が曰く、此神は木花さくや姫と申して富士一體なり。云々」

と。

あづまぢの室の八島におもひたつ

こよひぞこゆる逢坂のせき

隆源

栃木町の北郊を標茅が原と云ひ、合戦場、川原田、木野地等に涉り、荒原の風趣をとめてゐる。巴波川の水源地である。

大平山

▲栃木驛の西一里、俵六十錢。

大平山は、海拔三百四十米（栃木町は四十米）山頂に大平神社がある。蓋し式内都賀郡の大社であらふ國誌云ふ「大平大権現宮は、大平山の中腹にあり。別當蓮祥院般若教寺」と。和漢三才圖繪は、この社の祭神を佐野源左衛門常世と記してをるが、之は妄説とるに足りない。たゞ謡曲鉢の木が廣く人口に膾炙したることを證するのみである。

寶曆元年神社御取調べの時、當社神官よりの報告は、

「大平山舊號大神社、祭神天孫尊、相殿天照大神豐受大神」

と書きあげてをる。大神とは、云ふ迄もなく、大物主の神である。宗長東路のつと云ふ。

「永正六年九月十六日に、壬生より佐野へ歸りゆく間に、大平とて、小寺あり。般若寺と云ふ。一宿して連歌あり、

鹿しかの音ねやすめばもみぢのみねの松
松まつ杉すぎの深ふかきさまなるべし」
と。

東武鐵道

(淺草伊勢崎間)

(館林葛生間)

千住大橋

▲市内線千住大橋終點下車。

千住は、昔江戸から日光にっくわう、常陸、奥州方面へ出る宿場しゆくばであつた。千住は古來野菜、川魚の市場として有名であつたが、夫それは八代吉宗將軍の頃からである。

千住の大橋が始めて架せられたのは、文祿三年で、工事の監督者かんとくしやは伊奈備前守であつた。其後屢々改造されて、其都度少し宛位置あてゐちをかへてをる。此橋の守護神は、小塚原町こづかはらまちの能野社ののじやで、昔は橋を替へる度びに、その殘木を以て、社殿しゃでんを修造することになつてゐた。

小塚原刑場址

大橋の南、南千住の街道の左側に石地藏と不動堂とがある。こゝが昔の死刑場で、井伊大老を斬つた十八士の墓、安政大獄に殺された志士の墓もある。今では昔の面影がない。

小菅御殿の址

▲千住東方の町ついでである。

昔小菅に御殿があつた。地積十萬坪、寛永中伊奈半十郎忠治の屋敷に賜り、家光公が放鷹の爲め渡御せられたことがあつた。寛政四年、伊奈家の断絶と共に、御用地となつた。文化四年以來粃米の貯藏地となり、郡代付の代官持となつた。この御殿址は、今監獄となつてゐる。

横井博士工業史云ふ、

「明治五年、東京銀座市街改築の事ありしが、一時多数の煉瓦を要するを以て大藏省は英國人を聘し、地を小菅村に卜し、ホフマンの輪層窯を築いて焼かしめられしとぞ」と。小菅監獄の煉瓦は、この時製造した煉瓦を利用したのであつた。

西新井大師

▲西新井驛下車七町。

川崎の大師と共に俗信の的となつてゐる。總持寺五智山遍照院と號し新義真言の古刹で本尊は、弘法大師作厄除大師と云ひつたへられてゐる。像は昔真間の弘法寺にあつたのだが、弘法寺改宗の際、この寺に移されたのである。將軍家御鷹狩の際には、屢々御支度所となつた。加治水の井、及び三十坪の蓮池があり、共に俗信の的となつてゐる。

業平の古址

▲粕壁驛より八町。驛より十五六町の所に有名な牛島の藤名所がある。粕壁町は、古利根川の南岸にあり、奥州路の一驛であつた。

粕壁町を左折して進むと梅田と云ふ所がある。この邊は、隅田川の舊河道と云ひ傳へてをるが、實は古利根と元荒川との連絡河道であつて、隅田の本流ではなかつた、この梅田こそは、業平が「名にしおはゞいざ言問はん都鳥」と口ずさんだ隅田川渡の舊址だと云ひ傳へられてゐるが、之は妄説である。この地に梅若塚もあるが、元より信するに足らない。

岩槻城址

▲粕壁から岩槻町へ二里。町は、舊幕の頃、日光參詣の驛次であつた。古書多くは、岩附と書いてある。

城址は、町の東で、元荒川が、其東北の二面を繞つてゐる。長さ十四町、横八町。遠くから見れば恰かも島の如くである。長祿元年太田氏の築城にかゝり、爾後連綿として一方の鎮所となり以て王政維新に至つた。(寶曆年間以後) (大岡氏の城邑)

文福茶釜

▲川俣驛で下車するをよしとする。歸りは箱林へ出るに面白い。箱林躑躅が丘の躑躅の満開の頃杖曳くをよしとする。

文福茶釜は、茂林寺にある。寺は曹洞宗の古刹で、赤井正光の開基、大林正通禪師の開基である。境内廣く幽玄の氣にみちにある。

躑躅ヶ岡

▲箱林驛下車。箱林町は、城下町で、城は、弘治の頃既に赤井の

居城で、幕末には、秋元吉朝六萬石の城邑であつた。五代將軍綱吉公も嘗ては此地に封ぜられてゐた。榊原康政の信仰に依つて有名ななつた淨土宗の古刹善導寺は一見の價値十分にある。

躑躅ヶ岡は、沼に臨み風光愛すべきものがある。躑躅は沼に沿うた一帯の丘に植ゑられてある。昔一人の女がこの沼に身を投げた。所の人々少女の心根に同情し一株の躑躅を植ゑたのがもとであるとの傳説もある。又、寛永中、新田義貞の愛妾勾當内侍の遺愛の躑躅を上州新田から此所に移植したのであるとも云はれてをる。

鉢木の古址

▲佐野線佐野驛下車。町は下野國安蘇郡第一の名邑である。

この地を謡曲鉢ノ木にあらはれた舊址であると説く人もある。假りに時頼行脚の事實は別問題としても、鉢ノ木にあらはれた佐野は、この地に非ずして上州の佐野であることは

疑ふべくもない。

町の南北端に慶長七年唐澤山城主佐野信吉が、唐澤山から此地へ移封されてから、同十八年罪に依つて徐封さるゝまでの居城であつた城址がある。城址は十州園と云ふ公園となつてゐる。

唐澤山

▲田沼驛より二十八町。(驛より山下迄十四町、山下より山上迄十四町)

この山は、俵藤太藤原秀郷の城址で、山頂の別格官幣社唐澤山神社には秀郷公を祠つてある。社殿は古への本丸跡にある。尙ほ二ノ丸三ノ丸、武者詰其他舊址がある。山上の眺望は絶佳である。

管窺武鑑云ふ、

「佐野唐澤山、新田の金山、佐竹の太田山、之を關東の三名城と申し、城初まりてより

終に攻落されたることなしと申傳へ候」とある如く、昔は金城鐵壁の城であつた。

出流山の鐘乳洞

▲葛生驛より二里半。

出流山は、阪東十七番、子授安産千手觀音を安置する山紫水明の靈場である。奥ノ院に三個の鐘乳洞がある。この附近は櫻及び紅葉の名所として世に知られてをる。學生の遠足地としては誂へ向きである。

出流の地から山越しに山路をたどれば一日で古峰ヶ原に達することが出来る。

日本風景論に曰く「出流岩窟は村内各所に散在す。皆な地下の泉水石灰岩を浸蝕して穿鑿せらる。昔時勝道上人この洞窟を發見せりと里稱すれども、即ち信を措くべからず。出流村より二町、溪路を登れば、絶壁上に大師の窟あり。長梯子上りて口に達し得。此窟よ

り少許にして觀音の窟あり。鐵鎖に頼り梯子に上りて口より入れば、一大房あり。内に大黒天、聖道上人の像を安置す。鐘乳石、石筍四周に森列し、壯嚴無比、これを觀音の脊姿と稱す。觀音窟を出づるや、これ窟あり、内部相通す。梯子に頼り上窟に入れば、内より下窟に下り、外部に出づるを得。二窟より更に三十間、大日如來窟ある。窟は内部にて二條に岐れ、一は深さ凡そ二十五間、一は遠く北部の山中に穿入して測るべからず。

足利學校

▲足利驛より五町。

足利は、關東屈指の機業地で、古來東山道の名驛である。古くは庄名にも呼ばれ、足利氏勃興の地である。

町の北に、城址がある。本城山、要害山とも云ひ藤姓足利氏の居城であつた。

足利學校は、天長年間小野篁の創建なりとも、上古國學の遺制なりとも、足利義兼の建設する所なりとも云はれ、諸説區々として定まらない。今日學校では大長九年篁の創立なりと云ふてをるが、定かでない。永享年間上杉憲實の再興後の事蹟は明かである。

「足利學校が歴史上明かになつたのは、その再興時代からである。即ち皇紀二千九十九年花園天皇の永享十一年に上杉憲實が荒廢した此學校を再興して、鎌倉の圓覺寺から快元和尚を招いて學頭とした時にある。この後代々禪宗の長老が管理して明治維新に及んだのである。面白い事は僧侶が學頭となつても決して和尚とか長老などは呼ばない。必ずこれを呼ぶに先生の尊稱を以てした。當時憲實は書籍や學田を寄進し、其子憲忠、孫の憲房等も亦學問を好み、多く書物を寄せた。時恰も室町幕府の衰世、戰亂絶え間なき時代で學問教育の便りは他に之を求めることが出来ぬ。故に足利學校は我國唯一の學府教育の中心地となつて、天下四方から好學の士が集つたのである。勿論學生の大部分は僧侶であつたが中には易學や醫學に志す者もあつて、盛な時には二千人も生徒があつたとの事である。

天文から文祿にかけての百餘年間は此學校の黄金時代であつた。

豊臣時代には天正十九年豊臣秀次が奥羽に九戸政實を攻めての歸途下總に止まつた時、足利學校第九代の學頭僧三要在往つて面謁した。すると平生學問に心を注いだ秀次には都でこれを盛にする氣が起つたものと見えて、足利學校を京都に移したいとの相談を持ち出した。それには三要も早速同意して、學校の藏書を初めとして先哲の畫像まで悉く纏めて京都に送つた。間もなく秀次の最期となつて、この學校移轉の事は畫餅となつた。その後徳川家康の時、足利學校學頭閑室は奇才に富み家康の寵を得た。家康は學校を修理し孔子の像を納め、また活字を寄附して多くの書物を印刷した。これを後世から足利本といふのである。八代將軍徳川吉宗の日光社參の歸途、足利學校に遊んで學舎に修繕を加へたが、此時藏書の保存法を講じ、從來の借覽制を絶つて以て十一代將軍徳川家齊に及んだ。寛政五年に家齊は校舎の修覆を加へて時習館と名づけ、再び藏書の借覽制を立てた。その後渡良瀬川の氾濫は時折學校に禍し學田を流し、生徒を養ふ事が出来なくなり學校は非常に衰

類した。明治元年足利の藩主戸田忠行が朝廷に請ふて再興を計つた。

鏝阿寺

▲足利驛より五町。

俗に大日如來と云ひ、眞言宗、坂東の大教刹である。足利上總介義兼の創立である。國志云ふ、

「足利驛の鏝阿寺は、圭田六十石、金剛山と號す。鏝阿とは蓋し大日に同じ、眞言宗の檀林にして、七堂伽藍備り、院中十二坊、學頭を千手院とす。本願は足利上總介義兼朝臣にして、系譜に鏝阿寺殿と號す」云々と。

足利城址

足利の街北の山頭にある。頗る要害の地で、今猶一條の流がある。

此城は、大喜年中(約八六〇年前)藤原秀郷七世の孫足利成行が創めて造つて居り子孫に及ぶ。然るに、養和年間(約七二〇年前)忠綱に至つて、志田義廣の反に與して遂に絶家となる。所謂藤原足利の滅亡で、此に代つて上總介義兼が居城となり子孫に及ぶ。此が源氏の足利で、尊氏は其から六代の孫に當る。

尊氏が幕府を室町に建て、此地を去つてから、城主の交迭も度々に及んだが、近くは天正年間後北條の將長尾顯長が所有となりしが、十八年滅んで、徳川の代となると、五代綱吉の寶永二年(二一一年前)戸田大炊頭忠利が一萬一千石の大名として封ぜられてから代々傳へて維新に至つた。(郊外史蹟より)

金山城址

▲太田驛より十五町。

太田町は、新田郡の名邑で、俗に新田の町とも云はれた。近世例

弊使路の一驛であつた。東京附近屈指の遠足地である。

(1) 高山神社 (高山彦九郎を祭る)

(2) 大光院 (浄土宗鎮西派の巨刹で、建久の頃大光院新田義重の建立で、本尊は阿彌陀如来。

義貞の時焼失したが、慶長十六年徳川家康に依つて再建せられた。僧吞龍を開山とした。

これ俗に吞龍様と云はれる所以である。子女の生育に靈驗ありて縁日の日は善男善女の参詣で賑ふ。

(3) 太田山金龍寺 (金山の登り口にある。新田義貞追福の爲めに建てられた寺である。堂後に義貞の碑塔がある。

(4) 金山

(5) 新田神社 (金山の山上にある。)

以上、数字の順に遊覽するを便とする。

金山は、新田山、松山とも云ひ、平夷より抜くこと二百米。山上より、赤城山の雄大な裾野を大觀した風光は、天下、他に比すべきものがない。山中より松茸を産する。昔は年

々、松茸を將軍家へ献上した。

城址は山上にある。木曾路圖繪に、太田は新田義貞の古城なり。新田庄なり。此北に城山ありて金山と云ひ、乃祖大炊助義重より義貞まで居住云々と。

義貞は、世良田城より移つて此金山に居城せんと欲したが、事半にして王事に斃れた。

義貞の三男義宗の子貞氏に至り、金山に居城し、尹良親王の居館を建てた。後天正十八年小田原北條家滅亡の時、城主山良國繁北條家に黨した廉で、常陸牛久に移され、金山城は廢されてしまった。今猶古井、壘礎を存してゐる。一見の價値は十分にある。

生品の森

▲木崎驛より三十町。

生品神社は、今では見るに足らぬ一小祠で、四邊荒寥たる中にたゞせ給ふ。本國帳に「從三位生階明神」と載せ、昔は大きな社であつた。元弘三年五月八日、新田義貞が、世

良田の館を出で、百五十騎ばかりの兵で、この明神の前で、以仁王の命旨を三度拜した由緒ある所である。當時を追憶すれば感慨無量である。

義貞はやがて、疾風迅雷の勢で南下し、つひに分倍河原の戦となつたのである。

世良田

▲境町驛下車。世良田は、境町に接してゐる。

世良田は、新田義貞の館のあつた所であり、江戸幕府の祖先徳川氏發祥の地である。

東鑑建久四年四月、右幕下頼朝、那須野の狩倉の歸りに、新田入道上西(義重)が新田館に遊覽し給ふとあるは、世良田の館である。眞言宗の古利物持寺は、今も館の坊と稱し、館の地はこゝに求むべきである。

大字徳川は、利根川の岸邊にあり、江戸幕府はこの小邑四百石の租を特除して徳川郷と唱へ、當代發祥の慶意を表さしめた。今に猶永徳寺(天台宗、徳川) 満願寺(徳川義季の二男三義季の所建) 河守頼氏の女淨念

比丘尼を開山とし、世に縁切寺といはれ、妻女にして、離婚せんを欲するもの、東照宮ありて、逃げて此寺に入れば、出家と認められ、夫家再び取返すことをえないのであつた。) 其遺跡を説いてゐる。徳川は、東鑑始め古書には得河と書かれてゐる。この郷、維新前迄は正田隼人氏世々郷務を司つてゐた。義季以來の館は、東照宮祠のある邊である。